

近代文学に描かれた福祉の風景

——都市と農村における歴史的諸相

遠藤興一

瘦せにやせたるそのすがた／枯れにかれたるそのかたち／何を病みてさはかれし／何をなやみて左はやせし／みにくさよあはれそのすがた／いたましやあはれそのかたち／いづくの誰ぞ何人ぞ／里はいづくぞどのはてぞ

——北村透谷「ゆきだふれ」（明治二五年）より

はじめに——問題の所在

大多数の国民生活は、維新、開化が成立した後も、それまでの様ざまな封建的慣習や社会意識を維持しながら日々を暮らしたが、なかでも伝統的な生活様式を強固に維持した農村の動向に触れるなら、明治初期のわが国は人口の八割近くを農業従事者が占め、農業生産額は国民総生産の六割近くに及ぶ典型的な農業国家であった。それが半世紀を経た大正中期になると、農業人口は五〇％を割り、太平洋戦争直後はさらに四五％へと下がる。やがてここから戦後の経済復興が始まり、経済の高度成長期を経て、世界史上他に例を見ない急激な産業化、都市

近代文学に描かれた福祉の風景

化を達成した。その一方で、農業人口及び農業生産が、全生産額に占める比重は急速に低下、昭和三五年には三割、四三年には二割を切り、農業人口の就業人口全体に占める割合も一割を切った。つまり、人口比で見ると、ドイツやフランスをはるかに越えた低比率になったのである。こうした推移の後を顧みると、維新以後、半世紀を経た時点で、わが国はもはや農業国家とは呼べない事実に向面したことになる。が、だからといってそのことは、日本が実質的に農業社会でなくなったということにはならない。人びとの生活全体に与える伝統文化や産業面からの影響を考慮すると、農業人口には含まれない人びとも、その多くは農村社会の出身者であり、あるいは農村的伝統、慣習の影響をその身に深く帯びて育った。つまり、都会に出て都市住民となった後も、「故郷」としての農村社会は、生活や意識から切り離されてしまったわけではないということ。もともと、今日といえども米作に頼った営農実態はどうかといえは、維持された農業構造そのものが大きく様変わりした結果、これまでの農村文化も連動して、急速な変貌を余儀なくされつつある。だが、改めて近代日本史を顧みると、生産場面における人びとの暮らしが一樣に賃労働化しても、消費生活をのぞいてみればすぐ分かるように、従来の文化的価値観や規範は農村的なそれを含みつつ、依然維持し続けている。伝統社会が近代化していくプロセスは、西欧社会のようには直線的ではなかったということである。従って、ここでは生産と生活の全面にわたる、様ざまに錯綜した関係が見られた。さて、歴史を遡るなら、古代、中世が、近世封建期となり、さらに近代へと変わっていくなか、商工業の漸次的発展により、農業経済を基盤とする村落社会はそれこそ、近代以前から資本主義の波に洗われ、それまで自足していた農業の担い手は村落を単位とする共同関係を徐々に離れ、都市との間で新たな経済関係を結ぶようになっていく。その結果、封建遺制を残したまま農業経済圏は変質、やがて徐々に崩壊していった。そ

れまでの経済体制を維持することが困難になると、並行して個人は家イェや村ムラから分離、離脱していく。こうした解
体現象は、既に江戸後期に始まり、明治以後はその傾向に一層の拍車がかかった。その一方、明治政府は農村社
会を中央統制下に置くため、様々な制度改革を図っている。⁽¹⁾村ムラは元もと隣保相扶を存立の基盤とする血縁、地
縁によって成り立つ生活共同体であり、明治以後、政府はそこに新たな行政「区」を設けたが、実態はその多く
が昔ながらの生活機能を残存させた。さらに、市制・町村制の公布（一八八八年四月）以後も、旧来の町村行政
はここに抜本的な手を加えることをせず、戸長、役場の裁量決定に配慮の跡を残し、可能な限り管轄区域の判断
に柔軟性を持たせ、何とか行政区画と両立する機能を持たせようとした。そのうえで、地方制度の成立後、政府
は町村合併を促進したのである。かくして、新たに設けられた行政村は、旧来の自然村に、あるいは小規模なが
ら地域集団にその機能を持たせ、共同的秩序を従来どおり、維持、存続することを可能とした。だが、村ムラは行
政村として国の行政支配の末端を掌る役割も確実に担わされ、それが後に町村制の改編を経て、それまで自然村
として機能した村ムラは公法関係の外に追いやられていく。ここにおいて「郷党相携えて救済せん」とする伝統的な
相扶機能は、深刻な動揺を経験することになった。その結果、様々な方法を用いて、「国民精神の美質」を育
成するためという主題のもと、救済機能の維持存続を、しかも惰民思想と抱き合わせ、勤労精神との間で相扶機
能の一体化を図ろうとした。つまり、「貧民モ亦猶然リ、一度之ヲ貧ニシ、再ビ御慈悲ヲ以テ御救ヒ米、御救ヒ
衣、御救ヒ食糧ヲ賜ハルハ、最初ヨリ之ヲ取ラサルニ如カズ」とみなされ、慈善行為は抑制と批判の対象になっ
た。隣保相扶こそが救済の基調であるとみなされたのである。従って、本稿の主題である慈善事業に対する世間
一般の注目、村落共同体秩序の動揺、変質と並行して生じた。しかし、その場合でも隣保相扶と慈善事業はそ

それぞれ基本的な性格を残し、その強化が、公的扶助の政策化に対して抑制的に働くのは必然で、救済課題の認知、さらには国民化に向けた抑制的働きをもたらすことになった。その間の隘路を示している例が明治四一年一〇月に発表された中央慈善協会の設立である。

古来、郷党隣保の情誼に依て行はれたり。然れども其施設や多くは一時の施与に止まり、所謂恤みて傷はす。能く養い能く教ふるの真諦を發揮するものに至りては、殆ど之を見る能はず。近時、時運の發展は各種の慈善事業を勃興せしめ、其施設も亦漸くにして本来の真義に率由せんとするに到りしと雖も、其画策や尚ほ未だ深く世人の同情を集むるに及ばず、其活動も亦随ひて十分なる能はず。

このように、「各種の慈善事業を勃興せしめ」ながら、その一方で活動の趨勢を「十分なる能わず」という具合に鑑みて、絶えず抑制し続けた。農村社会における自給自足は、生産と消費のサイクルを交換経済によって漸次拡大し続けるよりは、むしろ自助、自活を原則としながら、こうしたサイクルに関与し続けた。しかし、近代化とともに貨幣（金融）経済が行きわたると、それまで維持、機能してきた生活そのものが動揺を始める。農村から都市に流入する向都、離村の浮動層が増加したが、それは農村の経済規模を縮小させると同時に、都市の産業を支える人的、物的基盤を提供、強化したことを意味する。当然救済機能に影響を与えない筈はなく、柳田國男によればそうした時「種々なる救済政策がありますが、其中にも区別をして見れば凡そ二つの種類があります。一方には政府が手を下すところの他力手段の外に、人民に自力でやらせて見たならばどうか。自分

の頭の蠅を人にはかり逐うて貰う必要はないから、自分自身で救荒の手本をやらせたらどうか^②という、自助努力の勧奨につながった。農政研究のなかからこうした見通しをたて、「自分自身に救荒の手当をさせる」経済的自由主義と、共同体による相互扶助を結び合わせたところに、柳田の問題理解を読みとることができる。この点について、内務官僚であった井上友一は「公費の受権者三万人に出でず、其の救助の公費も亦、国及び地方を合わせて無慮、四〇万円内外にすぎず、是を泰西諸国に比して霄壤あるを觀るは亦以て宇内に於ける無比の一大慶事と謂わざるべからず^③」と自賛、同じく自助を施策の基本に置いた。「一定の社会的特徴をもった空間的に連続している地域^④」を指して「一個の完結した社会形態」であると見なすなら、都市救済は完結するどころか、様ざまに複合した機能集団としての姿を示す。それがやがて、農村の共同体性に波及、「単位家族内の関係や機能と同族集団内のそれとは同質のもの^⑤」を見せることになった。こうした同質化傾向はやがて都市下層社会に及び、それらをまとめて思想的に擬制したものが家族国家観であり、家族と国家は連続的なりニアアの關係に入っていく。一方、都市の側から見ると、どのような特徴が見られたであろうか。同質化が生み出した共同体機制的の衰微、公的救済はこれを代替し得ず、救護法が受給者を「カード階級」と呼んだように、憎民觀を温存、救済の抑制に向かった。福祉的救済の行方は、私的な民間事業に依存していかがるを得ないのである。共同体機制的の弱体化に直面しながら、それを補強、回復する手段を持てなかつた都市社会は行政も民間も、収容施設の働きに依存しつつ家の機能をここに持ち込もうとした。そして、都市を中心に活動する収容施設は都市化の申し子の存在となり、被収容者は個別、固有に持っている郷土的な伝統文化から切り離され、匿名化していく。つまり故郷喪失^{ハイマート・ロス}の民となる。かくして都市を中心に成立した慈善救済は、明治三〇年代になると、既述したように農村における

人口増加率の低下と、都市における人口の著増、並びに急激な救済対象の増加に悩まされ続けた。昭和期に入り、救護法の実施以後の状態を見ると、例えば昭和一年末現在、全国に一万四、二五一の社会事業施設があるなか、その三一％は六大都市を含む府県に集中している。救護法の実施状況も、東京、大阪といった大都市と地方を比較した場合、同じ傾向が抽出できる。法の精神が家族制度にもとづく隣保相扶を本音とし、並びに淳風美俗をたてまえとして成り立つ救護法は、居宅救護を原則とし、収容救護を補助的な位置に置いて適用した。にもかかわらず、こうした趣旨に照らすなら、地方都市や農村と比べて、大都市は法の趣旨とは逆に、本来補助的であった筈の施設事業が異常なくらい発展した。昭和九年度の総計からみると、居宅救護総数一九万五、四一三人のうち、東京、大阪両府の合計は三万八、二九三人で、全体の一九・五九％となる。残りの八〇・四一％は他の地方都市、そして大半の農村であるから、村落共同体の相互扶助機能が残っている比率が高いほど、居宅救護の占める割合は高い。ちなみに、施設収容による救護数は全体で二万八、〇五四人で、そのうち前述の二府は一万四、七一人と、全体の五二・四四％、地方都市や農村は一万三、三四〇人で四七・五六％となっている。つまり、収容救護は二府だけで全国総数の過半数を占め、制度自体がいかに大都市を中心に偏して機能しているかが分かるのである。

都市

以上の事実を前提に、東京を例として都市福祉の動きを追ってみたい。江戸期以来、東京には貧民窟と呼ばれる下層地域が散在し、生活困窮者が集住、滞留、沈澱していた社会がある。特に四谷区鮫ヶ橋、下谷区萬年町、芝区新網は「三大貧民窟」と呼ばれて、その典型となった。これらはその後、皇居を中心とした都市部の外側へ、

そして周縁から更に郊外へ拡大しつつ移動する。時とともに、所在地と規模を大きく変えていった。明治二〇年代以後になるとこの拡張し続ける都市機能に押し出されて、四谷鮫ヶ橋は新宿方面に、下谷萬年町は上野から北上して金杉、日暮里方面へ、あるいは三河島、千住方面に、浅草界隈の下層民も本所から深川方面へ、芝新網もやがて三田、田町、品川と東海道沿いに動いた。加えて地代、家賃の高騰によって支払いが難しくなった下層民も、より安価な土地を求めて移動せざるを得なかった。また、そうした移動先は低湿地、谷地である場合が多く、居住環境としては著しく劣悪であり、貧民窟はそれ自体が社会問題発生の温床となり、あるいは公衆衛生上から問題性の多い土地となった。このような地域は都市化や景気のおりを受けるとたちまち動くので、行政的対応を図るうえにおいて、地域の設定にもとづく対策化が難しく、対応はどうしても事後的になり、しかも郊外に移動するにつれ、周辺の農村地域をなしくずし的に都市化の渦に巻き込んでいくことになる。後になればなるほど、細民地区はこうした都鄙境界地に顕在化していくのである。つまり、都市と農村という異なる経済生活圏が衝突したところで、いまだ住民の新たな生活条件が整わないまま「新開地」となり、ここへ外から次つぎと貧困者が流入してくる。東京の例で言えば荒川を越えた足立や葛飾がそういう特徴を示した。このような傾向は大阪、名古屋をはじめ、多くの地方都市でもみられた傾向で、大正中期以降になって精力的に調査、相談活動を展開した方面委員（後の民生委員）の報告資料を見ても、主な活動対象は、たいていこうした新開地の住民を相手にしている。日露戦後からしばらく経た後、こうした下層社会には木賃宿とは別に、共同長屋が出来るようになり、人びとは謂集するようになった。簡易、無料宿泊所が登場するのもこれと時期や場所を同じくし、東京市の場合、ここで「模範長屋、及び模範紹介所の建設を見るに至った」といわれる。下層民を対象とした本格的な組織対応が

行われたのはこの頃からである。当初、その動きは住民の個別、具体的なニーズに応えるものでなく、貧民地区をひとつの生活有機体とみて、それを改善する、つまり都市改良事業の一環に位置づけようとした。農村が共同体としてのまとまりを重視したように、都市においても同じような統合化インテグレーションを図ろうとしたわけである。そうした生活機能の中核的な役割を担ったのが、いわゆる「施設」であり、この施設機能の拡大をもとに、都市における福祉機能の充実、整備を図ろうとした。都市・農村における個別事情の違いを考慮すれば、当然その分布状況には異なるものがあつたが、大正一一年の時点で見ると、全国にある九三三施設の内訳は、都市部では経済保護、医療保護を中心とする生活機能の基幹に触れたものが六九%（六四四施設）を数えた。西欧社会の福祉機能と比較しても、この傾向に変わりはなく、福祉が労働保護、産業育成と近接的關係にあつて社会政策的な特徴を示したところにも同様の傾向がみられた。イギリスのワーク・ハウス（労役場）にその典型的な姿を見ることができるところが、こうした対応はその後の動きを追うと、わが国では西欧社会のように発展していく傾向を認めることはできない。貧困者救済イコール賃労働者化という方向を政府は採用しなかつた。代わつて、わが国では生活保障を生産者化という方向において対応するのではなく、それぞれ個別に個別的なニーズとして受け止め、それを処遇方針に反映させようとした。こうした傾向は昭和期に入ると益ますはつきりしてくる。昭和七年以降、毎年実施した「救護法施行状況」調査によると、昭和一五年の被救護者は八五%が六大都市に集中し、人口一〇万人以下の地方都市や農村部は全てを合わせても七%内外で、貧民の経済保障は「労働」政策でなく、主として「救済」政策として実施された。職業紹介、授産事業はそうした性格を持つものであり、対象の多くは居宅住民である。従つて、収容施設は鰥寡孤独不具廢疾と言つた恤救規則以来の伝統的無能貧民対策の延長上において、細々とその救

済を存続せしめた。

農村

都市生活が生産と消費の分離、分立を傾向としたのに対して、農村では両者が一体化、生活の全体を有機的に機能すべく努めた。この特徴は農作業のような生産活動はもちろんのこと、慶弔、葬祭、不時の災害、不幸に立ち至った世帯に發揮された。封建的支配のもとにおいては様ざまな賦役や年貢に苦しみ、ために余剰生産の可能性が低かった。つまり、常に貧しい暮しに甘んじながら耐え続けた。従って、地縁・血縁のつながりは、相互扶助の機能を働かせることを必然とした。単独で生きていくことが不可能な環境に置かれたということで、共同防衛、相互扶助に関わる約束事をこと細かく定め、そのための仕組を整えた。柳田國男はこうした暮し方を指して、「村も家もあらゆる生き物と同じ様に、我と我が力で支えることができなくなれば死亡であり、大なり小なり、其力の一部が故障すれば衰微である」と述べている。この働きは生活の余裕が生み出したものではないから、今日いうところの慈善や奉仕、ボランティア活動とは異なる性格を持つていた。経済的な自立に向かう努力は、個人に課せられた義務であり、社会的な責務でもあった。相互扶助はそうした義務や責任を果たした結果として、あるいは義務の履行と並行して機能した。従って、その逆をたどること、すなわち互酬機能はここに介在しない。「農民が久しい仕来たりを守って、大よその村限りの通例というものを立て、それを越えた為に貧乏する者だけは、自業自得と謂って恤まなかつた」⁸ことは、この点を指した評言である。長塚節は作品「土」で、明治の農村生活を描くうえで、「彼等のような低い階級の間でも、相互の交誼を少しでも被らないようにするのは、其処には

必らず、それに対して金銭の若干が犠牲に供されねばならぬ。絶対にその犠牲を惜しむものは、他の憎悪を買うに至らないまでも、相互の間は疎略にならねばならぬ」と述べ、物品や金銭による互助を含めた相互負担は、当然の義務履行であったことを確認している。伝統的慣習の衰退と、近代化の進展にともなう、こうした互助機能は徐々に低下したが、それでも産業や法制の変遷に比べれば、はるかに緩慢な展開を示し、そのような機能を維持するため、生産と消費が一体化している生活構造が支えとなり、力となった。昭和六年に書きおろされた「明治大正史世相篇」で、柳田は農村とは「それ自身が職業の集団であつて、たとえ独立の力は弱くとも相互救済の力はまだ具へて居た」という指摘を行っているが、多分そのとおりであろう。前述のごとく、政府は明治二〇年代の市制町村制整備のあと、行政村を新たに設置、国家主導による政治経済機構の運営に、丸ごと取り込もうとしたものの、自然村、つまり伝統的な農村社会におけるさまざまな機能は、こうした一片の法令によって崩れ去つたわけではない。確かに、郷里制や五人組制度のような、村落の政治的仕組が明治以後も形を変えて残つたということは、内務省のイニシアティブによる地方改良政策を見ても、そうではないことが判然とするが、それは広い意味での隣保相扶を前提としたうえでいえることで、時の政治的意図にもとづいて全てが一新したということではない¹⁰⁾。そして、このことは多分に扶助内容に影響を与えた。とりわけ経営規模が小さい農家であればあるほど、ひとたび困難に直面すると対応能力もそこに追いつくことができない。従つて、結局大規模化、統合化（地主への一極集中）の途を選ばざるを得ないことになる。さて本稿は、これまで述べた歴史的な経緯と社会的な背景をもとに、近代文学史のなかに登場する作品群を選び分けながら、このような都市と農村をひとつの対抗軸として設定、それぞれが内部に抱えた貧困問題をとり出し、そこで対応して取り組まれた庶民の側の日常的対策を

文献的に追ってみたいと思う。その場合、選択と解釈の前提として我われが考えるのは、マックス・ヴェーバーがいう意味での「エートス」に注目してみたいということ。従来の実証史的な経済史からは見えてこない、あるいは見えにくい生活の奥底にあるものや、当事者の内面世界を彩るものが何であつたのかということに関心を集中させたいからである。エートス概念については、参考となる文献を掲げて、その説明に代えたい。

エートスは単なる規範としての倫理ではない。宗教倫理であれ、あるいは単なる世俗的な伝統主義の倫理であれ、そうした倫理的綱領とか倫理的徳目とかいう倫理規範ではなくて、そういうものが歴史の流れのなかでいつしか人間の血となり肉となつてしまつた、いわば社会の倫理的雰囲気とでもいうべきものなのです。そうした場合、その担い手である個々人は、なにかのことがらに出会つと、条件反射的にすぐその命じる方向に向かつて行動する。つまり、そのようになってしまつた、いわば社会心理でもあるのです。主観的な倫理とはもちろん無関係ではないけれども、もう客観的な社会心理となつてしまつている、そういうものがエートスだと考えてよい。¹¹⁾

一 都市と農村における貧困と救済

都市の貧困

ここに紹介する「雨窓漫筆 緑蓑談」の「第十二、北に行く雁」は、都心から見れば北東の方角にあたる下谷区万年町とその周辺の生活模様を観察したもの。下層貧民を取り上げる場合、先入観や想像を交えて、故意に事

実を曲げることを当然視してきた当時の文壇にあって、須藤南翠の記述はそれらと一線を画し、事実の集積をもとにしている。かたわら対照的に引用するロンドンの貧困事情は、実見したわけではないから文献紹介の域を出ないとはいふものの、C・ディケンズの作品をここに持ってきたことはまことに興味深い。山崎町、萬年町の暮らしぶりは畳、戸棚、茶碗といった家具、什器、調度の実際に触れ、どこからか貧民の嘆声が聞こえてくるようである。明治二〇年前後、わが国の経済は資本の本源的蓄積を終え、都市下層社会は人びとの眼にもはっきりと見渡せるようになった。

貧富の懸隔の著名なるは獨り地方と中央首府とのみにあらず、齊しく帝都のうちにして少しく市区を遠ざければ、忽ち貧民群をなして一枚の衾に一戸五人の寒さを凌ぎ、一椀の飯に三口の餓を禦ぐなる無慙の疆界を見ることあり。彼の全世界に比類なき英の首都龍動ロンドンの如きすら夕陽斜めにかかる時去つて小巷に足を容れば、忽ち一種名状すべからざる臭氣來たつて鼻を駭かし、眼を放つて之を望めば矮小不潔の陋屋に棲み、眼凹み、髪に光澤なく、顔に垢づきて瘦せたる男の長方形の柱に凭りて卷簾シガレットを喫しながら瞳を瞼の上部に着けて往來人を諦視するあり、家屋は一室に過ぎずして窓高く、室内暗く粗造の棚を設けたる外寝臺と覺しき物もなく、衾に代ふるものなし。⁽²⁾

北村透谷の作品を拾っていくと、我われは評論文学として優れたものが少なくないことに気づく。なかでも「戦争と基督教」などは、日清戦争の戦没兵士とその遺家族に触れ、寡婦、遺児の悲嘆に明けくれる生活模様を拾い

上げ、「戦後社会と戦争」は、障害者や貧困者を大量に生み出す戦禍の現実を直視する。それは「維新以来の輝かしい進歩の中に形成されつつあった暗黒面を見逃していない⁽¹³⁾」。とりわけ「慈善事業の進歩を望む」で、貧困者を対象とする救済活動、すなわち救済事業の緊急、かつ可及的な対策を訴える。

慈善は恵与のみを意味せず、同情を以て真目的となすなり。願はくは志ある者赤心の涙を以て貧者を訪らへ、願はくは社會をして此温情によりて文明の進路を過たざらしめよ。多難なる邦家をして小人國とならしむるな、民人の性情の鑄造せらるるや多くは此の温情の多寡に基ける事少なからず、蒼生の安危將た此の事業の如何に関するとも思はざる可からず。⁽¹⁴⁾

明治二〇年代も末期になると様子はどう変わるのだろうか、樋口一葉の場合である。明治五年東京に生まれ、下級官吏の家に育ち、中流社会の子女が集まるサロン、歌塾に通いながら古典的教養を身につけた。しかし、七歳で父を喪ったとたんに生活は破綻する。貧困状態が続き、一家を養う必要からやむなく売文業に転じ、やがて露伴や西鶴の文学に通じる「うもれ木」を発表するや、文才が世に認められた。そして、明治二八年の「にごりえ」、「十三夜」の発表に至って一躍有名作家の仲間入りをするも、まもなく肺結核に患り、二四歳で短い生涯を閉じた。そこで「日記」に目を転じてみると、当時の女性としてはめずらしいくらい男性的、国士的な気概の持ち主であったことが分かる。「わがころごしは国家の大本にあり」と記し、初期社会主義者たちとの交流もあった。晩年の作品「わかれ道」は下層住民を登場させて、貧児の環境改善を世に問うている。世間では此の頃よう

やく要保護児童の処遇が問われるようとしていた頃のこと。この作品には男児を引き取り、傘職人として一人前にしようとする女性、お松が登場するが、まるで大阪でわが国最初の私立感化院を設立した池上雪枝の姿を彷彿とさせる書きっぷりである。

今は亡せたる傘屋の先代に太っ腹のお松とて一代に身上をあげたる、女相撲のやうな老婆さま有りき。六年前の冬の事寺参りの帰りに角兵衛の子供を拾ふて来て、いよいよ親方から八釜しく言つて來たら其時の事、可愛想に足が痛くて歩かれないと言ふと朋輩の意地悪が置き去りに捨てて行つたと言ふ。其様な處へ歸るに當るものか、少つとも怕かない事は無いから私が家に居なさい、皆も心配する事は無い、何の此子位のもの二人や三人、臺所へ板を並べてお飯を喰べさせるに文句が入る物か。¹⁵

田岡嶺雲によれば、「吾人は一葉女史が『濁江』^{じりえ}一篇を讀みて深く作者が犀利の眼光と溢るる如き同情とに服す。女史は小説家として優に其の伎倆滔々たる當世に抽んず。濁江一篇は売春の女を主人公としたるもの、作者はこの厭悪すべき女性に向つて無量の同情をそそぎ、細やかにその同情をうつし來る」¹⁶。通史的にいうと、日清戦後に現れた深刻小説、もしくは観念小説のテーマと似た社会矛盾、人生の不条理が「にこりえ」には描かれ、それが戦後の物価騰貴や軍事費の増税による貧民層拡大へとつながっていくことを予想させる。「日記」を開くと、「此夜、田辺査官來訪、貧民救助のことにつきはなしあり」(明治二六年一月二五日)、「横山源之助來訪、はなす事長し」(明治二九年五月二九日)、「人間の運命と世相の眞実御冥想余り氣迅なる事御忍耐生活を處せられ

ん事はれ小生の第二に貴方に望むものに御座候、当分の確実なる見込つき候まで文学者生活御忍耐如何に候や」(明治二十九年二月二十九日) などという一文が注目される。ここから、一葉はいずれ文学者生活から社会的実践に移っていくとしていたのではないかと推測するのは一葉研究者、和田芳恵である。つまり大音寺前、丸山福山町における日常は、自身も含めて、周辺地域の貧困実態は急迫の度を深めていたから。「にぎりえ」にはこうした貧困からの解放を願う作者の想いが強く表現されており、平岡敏夫は「風俗が単に風俗にとどまらず、時代の深部にまで食い込んでいく意味」⁽¹⁷⁾が見てとれるという。同じように窪川鶴次郎も「正太その他『下層社会』の子どもたちを登場させているが、本能的と云っていいほど、簡潔な筆致で作者は彼らを描き出している。この『貧苦』への作者の深い同感、他方ではみどりの恵まれた生活が、その姉の遊郭におけるいかなる汚辱にもとづくものであるかについての潔癖がいささかも感じられない」⁽¹⁸⁾ことにこだわりを見せる。そのこだわりとは「みどりにたいするこの『貧苦』による庶民的な『心の鈍り』は、正太らの『貧苦』への庶民的な同感と表裏をなす」⁽¹⁸⁾事実である。近代文学のなかに封建期以来の道德観を登場させ、それを下層社会の日常生活を通じて表現したのは一葉が最初であった。近代的な、人間の心理分析を作品を通じて行った作家として国木田独歩の名はよく知られているが、同時に彼は明治三四年「武蔵野」で、清新なりアリズムと抒情性の高い世界も描いてみせ、世間の注目を浴びた。そうした一連の作品と趣を異にするのが「日の出」(明治三十六年一月)で、「教育界」に発表したもの。倫理的な色彩の強いこの作品で、独歩は自身の慈善観を披瀝している。主人公の池上権蔵は放蕩に身を持ち崩し、親譲りの田畑、屋敷をすべて他人手^{ひと}に渡してしまふ。遂に自殺するまで追い詰められていく。が、その瀬戸際で知り合った老人の感化によって立ち直り、克己勉勵の末、遂に村内屈指の豪農になるという筋立てである。ここ

に勤労精神の涵養と禁欲、節制という道徳観が登場する。独歩は更にもうひとつ、貧困の実態を描いて社会不安や政治不安を、ひいては人々の勤労意欲を奪うものがここにはあると指摘する。同じことが独歩の「窮死」になると、更に深く浮き彫りにされる。市内九段坂下のとある、一膳飯屋に文公という、行くあてのない貧しい労働者がやってくる。窮状を見兼ねた周囲の応待は概して親切である。自身は既に肺病を患い、明日のいのちもおぼつかない。ようやく飯を済ませた文公には、折りからの雨で落ち着く先も無い。思い余った末、わずかな関わりをたよりに辨公の家を尋ね、ようやく一夜の寝ぐらを得るといふ筋立てだが、貧しいが故に文公を泊めるか、泊めないかでもめる父と息子の葛藤を間にはさみ、老父は突如死んでしまい、泊まる所を得た文公も翌朝には、新宿赤羽間の電車にひかれて轢死してしまう。ここから、独歩は「如何にも斯うにもやりき切れなくなつて倒れた」細民の実存的心理を写実的な筆致で巧みに描き、貧困の具体相を切り取る。

文公の黙って居るのを見て、「常倒の婆々の宿へ何故で行かねえ」、「文なしだ」、「三晩や四晩借りたつて何だ」、「ウンと借りができて最早行けねえんだ」と言い様、咳息をして苦しい息を内に引くや思わずホッと疲れ果てた嘆息を洩らした。「身體も良く無いやうだナ」と、辨公初めて気がつく。「すっかり駄目になっちゃつた」、「そいつは氣の毒だなア」と内と外で暫時無言で衝立って居る。すると未だ寝着れないで居た親父が頭を拾げて「辨公、泊めて遣れ、二人寝るも三人寝るも同じことだ」⁽⁹⁾。

この作品を書いた独歩が日頃つきあい、その仕事に注目した人物が松原岩五郎である。ペンネームを二十三階

堂といひ、独歩は「二十三階堂主人に与ふ」（青年文学、第一五号）で、都市下層社会をリアルに描く文章は記録文学になつてゐることを評価した。それは桜田文吾（大我居士）の「貧天地饑寒窟探検記」と比較し、松原の「芝浦の朝煙」、「東京の最暗黒」を高くみており、「陋巷窮尾の秘密」を明らかにし、ここに文学の体裁を整えたことは大いに意義ある仕事であると言ひ、これら記録文学は大我居士との比較を通じて、「足下に即ち彼れ大居士の如く、自ら身を糞して貧民のむれに入り、以て觀察したるに非ず、只だ之れ見聞録たるに過ぎず。而も此の觀察を此の文章とせり。若し夫れ一步を進めて大我に倣ひ、吾が文学の爲めに、ひたすら希望して措かざる也⁽²⁾」。明治四〇年代になると、深川の霊岸、麻布の新網、浅草の玉姫、本所の三笠といった地域がこれに加わるが、こうした下層社会の変貌を映した雑誌としては「風俗画報」を挙げることができる。そこは絵入りで、「貧民窟は近年公衆衛生頗る厳密にして、陋つて家屋は改造され、街衢は拡張され、爰に汚穢なる旧体面を更へて、設備整然たる棟割長屋と化し、住民生活の程度も昂進し來れる爲め、眞の貧民は生存競争に逐はれ、詮方なく地区の小貧民靴に這るるが如き傾向を示し、曩の貧民窟は現今の貧民窟もあらず、新貧民窟は人の知らぬ間に異なる方面に當まれつつあり⁽³⁾」。やがて郊外に向かつて一挙に進む都市化、産業化の波に押し流され、その一方で残された都心の貧民窟もその様相を大きく変える。この両方に注目した横山源之助は、「貧街十五年間の移動」（太陽、明治四五年二月）を書くが、労作というべきで、ここでは慈善施設の動向も拾ひ上げている。

日露戦役前後より本所、深川の細民部落には、木賃宿のほかに、共同長屋が出来て來た。仏教徒の手により無料宿泊所も出來た。団体または個人の経営を以て、孤兒院、養老院または慈善病院の類も起り、東京市

の経営により特殊学校が設けられ、特に本年に入り、模範長屋および模範紹介所の建設を見るに至った。⁽²⁵⁾

このように状況が変化するさなか、木賃宿の利用層も様変わりを見せたが、社会的な役割、機能の変化が顕著となっていくのは明治四〇年代に入ってからのこと。変化の様相を記した加藤碧瑠によると、「木賃宿探検記」のなかに「今日では以前の細民街も、交通土地の利の如何に依つては、最早過半は細民ならざる良民の移り住む者日に多くなり、既に下谷の萬年町の如きを見ても、昔の窮民部落たる不潔さを改め、以前の面影はガラリ變つて普通の町となつてをる」という。同じ頃、島崎藤村も木賃宿を内部から描写しているが、それにしても「天井の低い二階、古新聞で張詰めた壁、細い暗いカンテラの光、それから幾人の貧しい旅人が其上に枕して眠つたかと思はれるやうな、冷い、垢染みた木片の臭気」⁽²⁶⁾が漂う有様は認めることができる。明治三五年二月、露伴が写した「水の都」東京にもこうした風景は登場する。東方に向かつて、尾久付近まで足を踏み入れてみると、そこは野趣に溢れた一面の葦など雑草の地。さらに「尾久の渡より下二十町ほどしてまた一転、折れて千住製紙所」の辺りまでくると、こちらはもう都市化の波が押し寄せている。交通機関の発達にともない「隅田川貨物停車場のための渠ありて西に入る。こは上野停車場より各地に至る氣車のために、水運陸運を連絡すといふまでにはあらねど、石炭その他を供給する」⁽²⁷⁾地として、整備されていたからである。まもなくすると、この辺りも下層貧民の集住地に変わった。すなわち、「町盡頭を徘徊するに、何れの方面に向つても貧民の部落がある、貧民の巢窟がある。如何に層樓高閣の櫛比星羅せる、繁華の地にても、其のしほしに往つて見ると、磨き砂賣、屑拾ひ、煙管の仕挽、さては寸燐の箱張等、種々様々の賤業を執り、生活するものがある」。数年後、つまり明治四一年

前後になると、尾久のさらに先にあたる三河島の鉄道踏切を越えた、八、九丁ばかり、道の両側は古着屋が幾棟も並び建つようになった。しばらく以前までは「三河島、町屋、尾久あたりの百姓達が野菜を挽き出しては肥料こやしを挽いて戻る朝夕の往還²⁶」にあたり、つい近年まで牧歌的な風景が見渡せたのに、俗に狸長屋と呼ばれる屑屋の集住地になり、市内の紙屑、ぼろ屑をはじめとする廃品を回収する一大集積地と変わった。これが今日に続く廃品回収業の嚆矢となっていくのは、さほど後のことではない。

狸長屋の近所が忽ち立派な街になって仕舞った——屑屋町。聞けば東京では市中と名の付く限り屑屋商賣を許さないようになったのだそうだ。其處で浅草界隈の屑屋も最寄の市外へ転宅したる中に、其の一と分れたのが此の金杉田圃へ引越して来た。皆んな田を填しめた家を建てたのだ。何でも此辺の地侍が坪一錢五厘とかの割で貸すから来てほしいと言う相談が成立ったのださうだが、其の埋立ての無造作にも驚いた。東京から「ゴミ」を車で押して来て、其れを炭俵へ詰め込んで投げる。其上へおマジナイ程に土を置く、只だ其れだけ²⁷。

都心に眼を戻してみよう。荷風は「監獄署の裏」（帝國文学、明治四二年三月）で、市ヶ谷監獄の裏手に住む人びとの貧しい暮らしぶりを記している。監獄や軍隊宿舍から囚人や兵士が食べ残したものの、つまり残飯を定期的に相当量捨てるため、それを目当てに貧民が集まり、付近に集住地が出来ることになった。荷風はこの作品で、監獄内から排出される下水で洗濯する人びとの日常生活を記し、その貧しさは同時に衛生問題をまき散らす、い

わば伝染病の汚染源になっていることに警鐘を鳴らした。

私は折々この貸長屋窓下を監獄署から流し出す懲役人の使った風呂の水が、何とも言へぬ悪臭と氣味悪い湯氣を立てながら、下水の溝から溢れ出して居たことを記憶して居る。しかし、驚くべきはこの辺りに住んで居る女房連で、寒い日には其れをば頻と便利がって腫物だらけの赤児を背負ひ、汚い齒を出して無駄口をききながら物を洗って居る。又夏中は遠慮もなく臭い水をば往来へ撒いて居たものです。⁽²⁸⁾

農村の貧困

かつて農村は都市と異なる社会環境を保ってきた。極端な言い方をするなら、近代以前の農村には純粹な形の個人生活というものは存在しなかつた。たとえば村には入会いりあひの山野があつて、そこから季節毎になりわい、つまり春の青草、秋の木の実、茸などを採取する。そのためにはあらかじめ「口明け」の日を決めておき、採取の期間を定めていた。欲しいものを好きな時に、好きな量を採用することは許されなかつた。山林から樹を切り出し、橋や柵といった公共的普請に使う場合などは、材料と同時に村民の共同労働が必要となる。その場合、労役を忌避することは認められない。社会道德の通念から言つても、それは許されず、違反すれば軽蔑の意味で笑い者とされる。厳しくは村八分が俟っていた。そうした共同労働と重なる相互扶助には様ざまな慣行があつた。そのひとつ「ゆい」に触れてみよう。漢字では結、由比などと書くが、原則的には一日の出働量に対して一日の労力で応える。通常、それを金銭に置き換えることは許されず、やむを得ず賃金に代えて済ませることが認められたのは明治期

もだいぶ経ってからのこと。「ゆい」の機能は親族、近隣を含む狭い範囲で行なわれ、通常は三、四世帯規模の互助行為であるが、せいぜい多くても四、五戸から一〇戸程度の世帯が「ゆい」を組む。まれには一二〇〜一三〇人つまり村中総出で行なう「ゆい」もあった。春の田植え、秋の稲刈りといった労働力の提供をはじめ、その内容は開墾、田普請、家普請、屋根の葺き替えといった大仕事にまで及んだ。例えば屋根を葺き替える場合、村の共有する萱場（入会地）から刈り取った萱草を村中総出で束ね、短期間のうちに葺き替える。一度葺き替えればほぼ三〇年近くは保つので、こうした作業を毎年数軒づつ、農閑期に行なえば一村を四〇〜五〇戸と見立てた場合、ほぼ三〇年で村中の家普請、屋根普請が完了する。次に「こう」について。こちらは一般に家毎に集まっ
て行なわれる互助組織といった趣きである。元もと宗教行事と結びついたもので、仏典の講読、講話に集まった檀徒の間で行なわれたもの。それがいつしか経済的互助組織を育むことになった。時代の経過とともに、この寄り合いは定式化し、参加者も固定したため、講中、講衆と呼ばれた。彼らの間では共同出資、相互扶助、低利貸し付けといった貨幣を仲立ちとする互助機能を働かせることもあった。更に、遊芸的な講も出来たが、いずれも明治以降は農村社会から消えていく。ここで本題である農村の貧困に触れてみよう。こうした互助機能が衰退していくと、そこではどのような問題が発生したのだろうか。明治三〇年代の風景をひとつ。地方から汽車に乗って、花の都、東京にやってくる人びとが新橋停車場に着いて、改札口を出ると、まず最初は街の眺めが眼に飛び込んでくる。そして、一様にその喧騒に驚くのであるが、同時にもうひとつ、彼等は路端に埋くまって物乞いをする乞食の多いことにも眼を丸くする。そして思う、なぜだろう。日本民俗学の創始者、柳田國男は東京帝大政治学科を卒業すると、農商務省に入って官途を歩いた。法制局参事官から内閣書記官、記録課長を経て貴族院書

記官長になったところで退官、後は朝日新聞論説委員を勤めながら、文学の世界に近づいた。特に、自然主義作家達との交流はやがて自身龍土会のメンバーになるなど文筆業に明け暮れる。その柳田には貧困問題に強い関心を寄せるきっかけとなった体験がある。明治一八年一〇歳になったかならない頃、兵庫県下の北条町付近を襲った飢饉は母の実家に近いこともあって、次の様な見聞を文章に書き残している。「私は裏長屋の隣りの貧民窟の近くに住んでゐたので、自分で目撃したのであるが、町の有力な商家『餘源』をはじめ、二、三の家の前にカマドを築いて、食糧のない人々のため焚き出しをやった。人々が土瓶を提げてお粥を貰ひに行くのであるから、恐らく米粒もないやうな重湯であつた⁽²⁰⁾。さらに、次の様な場面**にぶつかると、貧困実態をより深く考えざるを得ない心境に陥る。**

布川の町に行つてもう一つ驚いたことは、どの家もいわゆる二児制で、一軒の家には男児と女児、もしくは女児と男児の二人ずつしかいないということであつた。私が「兄弟八人だ」というと、「どうするつもりだ」と町の人々は目を丸くするほどで、このシステムを採らざるをえなかつた事情は、子供心ながら私にも理解できたのである。あの地方は四、五十年前にひどい饑饉に襲われた所である。食糧が欠乏した場合の調整は、**死以外にない⁽²¹⁾。**

柳田によると、明治の貧困に特徴的なことのひとつとして「人間の孤立」現象を挙げる。それ以前も貧窮状態はしばしば生じていたから、ことさらに珍しいことではないが、それは当事者にとつて、今日考えるよりも耐え易い、

忍び易いものであったという。なぜなら、同じ境遇にあった人びとは貧しいなりに、互いに助け合ってきたから。そこには互助の精神（エートス）が生きていた。それが近代化にともない、社会関係は細分化、孤立化を促進した、つまり近代的な貧困は個人的自由主義が行きわたるにつれ、伝統的な紐帯を解体させてしまったのである。いったん天災や飢饉にみまわれると、人びとは互いに助け合うより、己が暮らしを護る方向にバラバラになって走っていく。共同体規制が「規制」としての機能を喪失したわけで、貧困に対処する共通感覚は失われた。そうなれば為政者の働きかけは自立、自助努力の涵養に向かうしか方法はないわけで、「一方にせめて自分の家の一群だけは、まず済すくめたいと希う者が多いと共に、他の一方から困苦はわれ一人に集まっているかのごとく考えて、世を恨んでいる者も非常に多い」（明治大正史世相篇）、そうした状況が広汎化する。近代的な貧困は人間どおしの「孤立」を深めるばかりでなく、いざという時はひたすら自助努力を求めることを必然化する。さて、次に紹介するのは杉村楚人冠（一八七二～一九四五）の「雪の凶作地」（明治三九年一月）である。凶荒の実態報告を踏まえて書いたルポルタージュ文学であるが、まずは同じ事態に対する行政報告の一部を引用してみよう。「明治三五年の凶荒に遭遇して五十六万九千石の減収となりたる為の農村の疲弊甚しかりに、その翌々三十七年に日露干戈を交へ、曠古の大戦役となり、予備、後備国民兵まで召集せられ、農馬亦多く徴収せられしのみならず、内には愛国公債の募集あり、農民疲弊せりといふと雖、忠愛の至誠進みて国家の為に盡し、時局の急に應ずることに決して人後に落ちざりき。然るに三十八年に至りて、俄然未曾有の大凶歉に遇せり。吁累次疲憊の余に加ふるに、此の不可避の大災厄を以てす⁽³¹⁾」。楚人冠は和歌山に生まれ、明治二〇年に上京すると英吉利法律学校、国民英学会に学んだ後、しばし病床にあつて帰郷、地元新聞の記者となったが、二六年に再び上京、国民新聞の執筆陣に加わ

り、やがて文筆業に入る。

東磐井郡生母村の報告に據れば、同村に関東地方の機業者とか唱ふる者女工募集の爲として入り来たり、窮民に就て其女子を出稼せしめんことを勧めたる結果、窮民の中には一時の急を凌がんと、そが最愛の子女をして五年乃至八年の契約にて其募に應ぜしめ、其の報酬としては僅に手取二圓乃至五圓を得たるが多しとぞ。此等は表面女工募集との触れ込みなれど、其實新占領地等に醜業婦として賣り飛ばさるものが少からず、殆ど純然たる一種の人身賣買が行はれつつあるなり。⁽³²⁾

窪田空穂は少年の頃、つまり明治一〇年代の農村風景を回顧した文章を後年になって残した。その語りによれば、農村は古来自給自足を建て前とし、明治三〇年代まではそうした風俗、経済を維持、後の変化も決して急激なものではなかったという。自給自足の様相も大旨同じで、住環境に多少の違いはあったとして、衣食の暮しぶりにほとんど違いはなかった。百戸程の部落の内情を見て、飯米に余裕があり、販売ルートに乗せられるものは一割から二割程度である。あとはやっとの思いで自給するか、小作人となって借金を背負うかどうか、どちらかであった。この農民の暮しを内容に立ち入って文学作品にしたものといえば、長塚節の「土」に勝るものはない。長塚（一八七九～一九一五）は子規門下の俳人でありながら、その小説には俳諧趣味の登場することはほとんどなかった。茨城県下の豪農の家に長男として生まれ、尋常中学を中退、子規に師事して俳句を学んだ。子規の没後は明治三六年、伊藤左千夫とともに「馬酔木」を創刊、自然を写生し、文章は客観的であることを重んじた。

かたわら自然主義に近い小説も書くようになり、その代表作が前述の「土」で、この作品は漱石の推輓により朝日新聞に連載された。郷里茨城の農村を舞台に、貧農の悲惨な暮しぶりを巧みに、自然描写を交えつつ話を進める。加藤周一によると、「この独特の小説を支えているのは、農民の生活の貧困と悲惨ばかりでなく、自然との親密さに浸された诗情もあるだろう。しかしそこには、貧困の構造に対する批判の言葉や、悲惨な状況に対する何らかの反抗、あるいは反抗の行動を通じての貧農間の連帯感情は全くあらわれていない」というが、長塚以前の日本文学にはついで現れることのなかった農村社会の裏面、底辺を直視し、鋭くえぐり出そうとしたことは評価されなければならない。それは食生活の貧しさ故に、やがてささやかな盗みを誘う、その心性、ないし人間性にひそむ暗闇をとり出してみせ、主人公勘次の行動の裏には巨大な「貧窮」がひかえていることを読者に教える。それはまた、勸善懲惡の伝統倫理で裁くことをしない長塚の文学的視点もかいま見せてくれる。明治四三年といえ、日露戦後の恐慌が農村に深刻な打撃を与え、農産物価格の暴落を引き起した年で、全国の自作農はその半数が小作農化していく分岐点にさしかっていた。以後小作農は太平洋戦争後の農地解放迄、度重なる小作料の重圧に苦しまなければならなかった。「土」はこうした社会的な背景のもと、鬼怒川のほとりに暮す貧農の行く末を予感させる作風になっている。

お品は自分の手で自分を殺したのである。お品は十九の暮におつぎを産んでから其次の年にも又妊娠した。其の時、彼等は窮迫の極度に達して居たので、其の胎児は死んだお袋の手で七月目に墮胎して畢つた。それはまだ秋の暑い頃であった。強健なお品は四、五日経つと林の中で草刈りをして居た。それでも無理をした

為に、其後大煩ひはなかつたが恢復するまでは暫くぶらぶらしていた。

川上眉山は作品「一軒百姓」で、村の掟を破つたため、村内の交際を絶たれた一家を中心に、村落共同体による規制が徐々に弱体化していく、その様子を記した。それは共同体内部における結束を弱めると同時に、伝統的な相互扶助機能の衰退を描き、そこには農業生産ばかりでなく、生活全体に及ぶ変化があった。

もし利一郎が若連中に為た咎ならそりや仲間除者にもしましやう。交際も絶ちましやう。それでも利一郎はこれまで若連中に付いちや随分役に立つた男で、塵一本咎がなかつたのだ。それでも利一郎が遠慮深えすけえ、遊びにも出なかつたがで、なにも若連中から除者にした譯ぢやねえ。それであんまり気の毒だすえ、皆に俺から話した處が、皆だつてお前様のやうな解らず屋ぢやねえすけえ早速承知した。皆が承知して見りや些ちつとも差支えねえ談話はなしで、それに又女共も恁うして辛積に集つて居る中は、若連中に付くが古來からの習慣ならはしで、して見りや若連中が承知したもんなら女共も承知するが當り前の談話はなしだもの。³⁴⁾

共同体から排除されたのは個人ばかりではない。集団として他の共同体との交流が禁じられた、もうひとつの共同体があつた。被差別部落のことである、あるいは癩部落と呼ばれたハンセン病患者の村、村全体が近隣の村々から棄否され、それが明治以降も続き、いずれも近代日本史における社会問題の一角を構成した。久米正雄はこの問題に関心を持って作品「光の漣」を書いている。このようなハンセン病にまつわる問題を文学の主題とした

作品群を指して世間は「癩文学」と呼んだが、それは癩者自身が書いたものと、外から観察して書いたものによって構成される。互助、扶助とは正反対の棄否、無視の世界があった。

「今日は何處へ行っただね」と声をかけた。「S村へ托鉢に行きました」、「え、S村へ？」と男は、何故か顔をそむけるようにして、「Sとはまた、えれえところへ行ったでねえか」と言うのであった。「えれえところつて、あの村には何かあるんですか」、「お前さんたち、気が附かなかったかや。手や顔の崩れた衆が、あの家にもこの家にも居たらがや」、「ああ、さういえば何處の家にも病人がゐたやうですが」、「それだよ、お前さんがたは、他處の土地から來た衆だで、知んねえだらうが、あれは、はっ昔から有名な癩病やみの村で、この辺の者は、誰もあの村の衆とは行き來しねえだよ」、「えッ！」青年たちが驚いた様子を見ると、その男は得意然としてしゃべりだした。⁽³⁵⁾

共同体の外部から農村の内部に岐け入って、様々な生活事情を記録し、歴史、民俗研究の資料とした試みが文学としても成り立つことは、柳田國男の例を俟つまでなく明らかで、そうした研究を文学作品に結晶させるうえで、様々な資料を提供した人物がいる。宮本常一である。彼が各地を歩き踏査、記録して綴った文章から、昭和初期の農村風景を活写、雑誌「民話」に連載したものを紹介したい。衰退の途上にあるとはいえ、いまだ機能していた相互扶助機能として、観音講に言及した場面である。

村の中にあつてはやや安定した生活をしていて、物わかりのよい年よりが大てい世話焼きをしている。村の中にある何もかも実によく知っていて、たえず村の中の不幸なものに手をさしのべているのである。それも決して人の氣づかぬところでそれをやっている。今野氏の祖母も夜一時、二時頃隣村の不幸な女を訪れたり、また食うに困っている者に物をとどけたり、また夜半訪れてくる他家の嫁の色々の相談にあずかつていたという。他人の非をあばくことは容易だが、あばいた後、村の中の人間関係は非を持つ人が悔悟するだけでは解決しきれない問題が含まれている。⁽³⁶⁾

都市の救済活動

江戸が東京と名を変える前後の一〇年ほどは、都市下層を対象とした記録的、文学的な記事が多く出版された時期にもあたっている。それは時代が激動、動乱期にあたり、政治、経済が著しく不安定なため、結果として細民の窮乏化が進んだことによる。加えて、この時期は自然災害も多く、都市は地方から逃散、流入してくる人びとを抱え込むことになった。従って、行政当局もこうした事態に眼をつぶることは許されず、対策を提示、実施している。幕末の例としては勝海舟が庶民の困窮ぶりを目のあたりにしたとき、施策としての「お救い小屋」の開設に触れた。海舟の発句には、「新米や玉を炊ぐのおもひあり」、「落栗やしうとと孫のおもひあり」、「唐茄子に一日は餓えをいやしけり」といった飢餓に題材をとったものが登場する。

当時、幕府では上野広小路へ救ひ小屋を設けて貧民を救助したが、餓孍路に横たはるといふことはこの時

実際にあつたヨ。また、幕府に浅草の米庫を開いて、糶を貧民に頒けたが、その時、最も古いのは六十年前の糶で、その色が真赤だつたヨ。それより下りて五十年前ぐらゐのは、ずいぶん沢山あつたつけ。⁽³⁷⁾

維新の後、明治政府は富国強兵、殖産興業を国是としたから、いきおい文明開化の裏でひっそり暮らす下層庶民を題材とする作品を書く作家が現れたのは大分後のことである。なかでも、徳富蘆花は「自然と人生」に日清戦争に勝利、国民が祝意を示そうとして特設した凱旋門の周囲に謂集する人びとの群れを観察した際、なかから「餓狼の如き凄まじき」貧民の姿を見つめている。勝利に酔う人びとの片わらに、飢えてさまよう人びとがいかに多いかということに気づいた蘆花は、なぜこうした人びとが増えるのか、為政者こそ考えねばならぬ問題であると指摘した。街頭のとある片隅で起つたいさかいに目を留めて次のようにいう。

「何でへ、畜生奴。何が面白えんでい。わいわい騒いでやがる。畜生奴、車力なんざ如何するんでい」。余は愕然として顧み、顧みてまた愕然たりき。余が背後に立てるは、立ん坊の一人なるべし。髪も鬚も蓬々と打かぶり、渋紙色の顔は更に餓狼の如き凄どき光を帯びたり。雑巾を綴り合はしし様なる單衣の胸も露はに、縄の帯して、跣足なりき。群衆の中に子供あり、食べかけし饅頭をとり落しぬ。彼の縄帯の男、飛びかかりて取るより早く忽ち食ひ盡しぬ。彼は實に飢えたるなり。⁽³⁸⁾

浮浪者が官憲と交渉を持つことがあつたとすれば、民生安定に関わる救済問題というより、治安維持に触れる

取り締まり対象としてであるほうが圧倒的に多かった。それについて、疾病、死亡、あるいは行旅病人、死亡人となつた場合の扱いが多い。透谷はこうした人びとに眼を注ぎ、注意深く観察した（本稿の冒頭詩！）。こうした状況は都市を中心に益々拡がった。原因として考えられることは、農村の窮乏化と都市への流入が一層活発化したこと、公簿上の本籍地と実際の居住地が遠く離れたこと、従つて地縁、血縁関係が生活につながらない。明治三一年六月公布の民法により、家族の扶養義務が法的に明確となり、かつ厳しく履行されたことによる。それまでは放置、放任された人びとがここに触法的な存在となり、三二年三月には「行旅病人及行旅死亡人取扱法」（法律第九三号）が公布され、取り締まり対象となり、一層嚴重な監視対象になった。ちょうどそうした時期に書かれた作品がある。ピクトル・ユーゴーの「レ・ミゼラブル」に登場するジャベール刑事を彷彿とさせる巡査が主人公の泉鏡花「夜行巡査」である。作者は偏執的な性格の巡査を登場させて、寒空のもと、乳児を抱えて途方に暮れる乞食の母子を相手に、情無用の取り締り状態を描いている。作者はこうした官憲の対応を厳しく批判していることに、読者は容易に気づいただろう。

婦人は慌しく蹶起きて、急に居住居を繕いながら、「はい」と答ふる齒の音も合わず。其のまま土に頭を埋めぬ。巡査は重々しき語氣を以て、「はいでは無い、こんな處に寝て居ちゃあ不可ん、疾く行け、何といふ醜態だ。」と鋭き音調。婦人は恥ぢて呼吸の下にて、「はい、恐れ入りました。ございませす。」慥く打謝罪する時しも、幼児は夢を破りて、睡眠の中に忘れたる、饑と寒さを思出し、あと泣出だす聲も疲労のために裏洩れたり。母は見るまも人目も恥ぢず、慌てて乳房を含ませながら、「夜分のことございませすから、何字

且那樣お慈悲でございます、大眼に御覽遊ばして」⁽³⁹⁾。

社会福祉学にとって古典にはいる河上肇の「貧乏物語」は巷間よく知られている。これは評論文学であり、同時に経済学上の文献である。貧困原因の研究がテーマ。大正五年九月、大阪朝日新聞に連載されるや、まもなく評判になり、単行本として発売されると、瞬く間にベスト・セラーとなった。「驚くべきは現時の文明国に於ける多数人の貧乏である」という書き出しで始まる貧困原因の分析は、やがて「貧乏退治の根本案」を提示する。ところが、世間の注視を一身に浴びながら河上が出した回答はきわめて常識的で、中庸思想に彩られたものであった。著者はここに三つの方策を提示した。奢侈の廃止、社会政策の推進、将来的には社会主義の実現である。このうち最も有効な方法は奢侈の廃止であった。当時の河上は社会政策、社会主義は国民の道義的節儉に遠く及ばない政策と考え、マルサスの情民観に立脚して救貧問題を考えていたことが分かる。だが、この後、彼はその思想を大きく変えて正統派マルクス主義者に変身していくのである。文学書として読んでみると、「その文章は流麗、その内容は貧乏の問題を経済学的な観点を交えて論じた点で、画期的であり、その解決法として人心の改造を強調した点で、彼のいわゆる利他主義と直接つながっていた⁽⁴⁰⁾」といわれる。

第一に、世の富者がもし自ら進んでいっさいの奢侈ぜいたくを廃止するに至るならば、貧乏存在の三条件のうち、その一を欠くに至るべきがゆえに、それはたしかに貧乏退治の一篇である。第二に、なんらかの方法をもって貧富の懸隔のはなはだしきを匡正し、社会一般人の所得をして著しき等差なからしむることを得

るならば、これまた貧乏存在の一条件を絶つゆえんなるがゆえに、それも貧乏退治の一策となしうる。

第三に、今日のごとく各種の生産事業を私人の金もうけ仕事に一任しておくことなく、たとえば軍備または教育のごとく、国家自らこれを担当するに至るならば、現時の経済組織はこれがため著しく改造せらるるわけであるが、これもまた貧乏存在の一条件をなくするゆえんであって、貧乏退治の一策としておのずから人の考え至るところである。

大正期に入って急速に盛んとなった労働運動であるが、ここに関わりながら文学活動が続けた人びとがいた。そうしたなかのひとり、平澤計七は資本家による労働者搾取の実態を、文学作品を通じて世に訴えた。次に掲げる「慈善」は労働災害の責任を労働者個人のこととみなして、使用者はここに恩情を以て報いる対応をとつたことを問題視し、責任と労災保障の在り方に大きな疑問を投げかけた。細井和喜蔵が「女工哀史」（大正一四年）で底辺労働者の置かれた立場を実証的に明らかにし、労働搾取の劣悪、不合理、理不尽さを衝いたことに比べるなら、平澤の筆致もそこに倣つたものである。

或る工場の職工が怪我をした。なぜ怪我をしたかと言ふに、其工場は他の同職業者からも、秘密を覗き見られるを恐れて窓を明けるを尠くしたが為に、真夏の温度は非常に騰り、人間の頭を狂はしてほんやりとさしたからである。慈善に富んだ工場主は甚だ気の毒とあって、其指を一本落した職工に二百円の見舞金を呉れた。そして、其不衛生な工場に衛生的な設備をしゃうとは思わなかつた。職工の喜びは大変なものであつ

た。翌年戦争の恩恵で此工場の景気はすばらしくよく、為めに度々徹夜業をせねばならなかった。指の一本無い職工は、此長い労働を一時間も休まずに働いた。そして、去年指の怪我した頃に、歯車に腕をとられて仕舞った。不衛生な工場に、長い間の労働で、身體が疲労した結果である。慈善に富んだ工場主は此哀れな職工に四百円の見舞金を呉れた。貰った職工は涙を流して喜んだ。そして、其場を喜んで追出された。⁽¹⁾

賀川豊彦（一八八八〜一九六〇）は大阪を舞台にして風刺小説を書いている。その名を「空中征服」と言い、都市行政の貧困をとりあげ、政治権力の横暴を庶民の感覚で捉えた。社会喜劇に仕立て、パロディ風な筆致で、滑稽さを前面に出しているが、内容は民衆の苦しみと行政の無能を比較しながら批判しており、決して軽いテーマではない。紹介する「赤ん坊を救え」は、工場の煙突が吐き出す煤煙によって深刻な健康被害を受けた人びとの苦しみ、とりわけ児童に与える悪影響を問い、予防、救済を訴えたものである。荒畑寒村の「谷中村滅亡史」は我が国における公害の原点を叙したものといわれ、銅山から出る煙や汚水が深刻な農村問題となったことを告発したものであるが、こちらは大都市におけるそうした公害を扱った。

翌朝まだ寝ているうちから起すものがある。それは島村であった。「もう、示威運動の幹部連はほとんど全部天王寺公園に集まっておりますから、あなたも参加して下さいませんか」との要求を斉して来た。充分休んでおらないが、ご奉公のためだと思って、天王寺公園へ行ってみると、来るわ、来るわ、煙に困っているお嬢さん連中が幾千人ともなく集まってくる。みな煙のために発育不良な乳児、嬰兒を背にして、今日の

示威運動にくわわるのであった。⁽⁴⁾

ここで賀川と同じ大阪市の貧困問題に触れてみよう。石川淳の「貧窮問答」は市内釜ヶ崎付近の細民生活が、こうした問題を集約的に表した地域であることを示唆する。

陰惨な空気とは何であろう。わたしはただある臭気のことをいふ。たとへば大阪の今宮釜ヶ崎の陋巷をさまよったことのあるひとは知っているであろうが、あそこでは雨ふりのたびに、泥濘と化する狭い露地の中に、泥濘とおなじ色のいぶせき小家が「ちゃちゃ」とかたまりあひ、その溝板の上に潜んであたりをうかがつてゐる半ずぼんの男の眼つきにあやつられながら、子供を背負ったかみさんとか、継ぎはぎの前掛に膝頭の破れをかくした若い女たちが、五十銭銀貨一枚の光をあてに行く人を暗い部屋に引き入れようとしてゐる。これまた人の世の相、あさましいなどと一口にかたづけたがる咽喉ほとけのつまる思いであるが、それよりも耐えがたいのはあの臭気である。人も家も街も一枚の腐った雑巾同様で、そこから立ち上るもやもやが傾き合った軒の間をどこへ抜けよう口もなく、中に一足踏み込んだとたん饅⁺えた飯粒を眞向かいから叩きつけられたごとく眼も鼻もつんと刺し通されて、思はず面を掩ひながら駆け出したくなるのだ。⁽⁵⁾

若き日の武田隣太郎（一九〇四～一九四六）は旧制三高の先輩にあたる梶井基次郎、中谷孝雄、外村繁らと同人を組んで創作に励むかたわら、セツルメント活動に参加した。この時の経験をもとに、昭和八年発表の「日本

三文オペラ」は、底辺に暮す庶民の哀歎を綴り、作家として周囲から注目された。同じ系統の作品「釜ヶ崎」でも、もっぱら木賃宿生活から見た貧困実態を綴る。こちらは慈善病院に收容される行路病人が登場、社会事業に触れた話になっている。釜ヶ崎の土地を遡って、その由来を尋ねてみよう。明治三五年頃までは紀州街道に沿って立ち並ぶ、旅客相手の八軒長屋が在った。それが「東区の野田某氏が初めて労働者向きの、低廉なる住宅を建設して労働者を收容したるが、尚当時に於いても依然として、百軒足らずの一寒村に過ぎなかつた」⁽⁴⁾この地域が、急激に下層貧民の集住地に変貌していく様子を大阪市社会部調査（「日傭労働者問題」、大正一三年）は記述し、住民のなかで目立つ職種として人夫、手伝い、仲仕、船夫などいわゆる「鮫鱈」と呼ばれた人びとをとり出した。彼等にとつて通常の旅館は高額に過ぎて泊まらない。そこで建物の仕様は素末、劣悪でも安価な宿所がどうしても必要な施設となつた。それですら、失業したり、傷病、老齢が進むと泊まれなくなる。と、やがて木賃宿から貧民長屋に移っていかざるを得ない。こうして釜ヶ崎は木賃宿と貧民長屋の複合居住地に変つていく。

電車の狭いガード下で、そこには誰彼となしに小便すると見え、コンクリイトは湿気で壊れ、白黴のようなものひろがっているが、激しい臭氣に彼も亦、そのことに気がついて、小口貸金手輕に御用立てます、と言う広告を読みながら、排泄するのであつた。そこを抜けると無料宿泊所があり、そのあたりには、午前中からもう夜の宿の心配をしなければならぬ浮浪者たちが、いつでも事務員が来て出てきて受附けるならば、すぐ列を作つてならべるように仕度をして、蹲つて考えたり、立ち話をわいわいやっていた。⁽⁵⁾

同じ地域を東京市内に求め、なかでも簡易、無料宿泊所が登場する作品を紹介してみよう。

白妙橋を渡ると、宿泊所の所員が数名飛び出してきて、この珍妙な行列を迎えた。この宿泊所は一泊一五銭であつた。それが払へない人々のためには、少し先にバラックの平家建てが四棟建つてゐた。一棟は事務所、一棟は一泊九銭の宿泊所、他の二棟は無料で、深川一泊所とも呼ばれてゐた。無料宿泊所は二棟とも百畳敷ほどで、壁も、仕切りも、天井もなく、唯薄ペリが敷いてあるきりであつた。眞赤な太陽が灰色に凍つた海の彼方に沈む頃になると、何処からともなく浮浪者の群が集つてきて、煎餅蒲団にくるまつて一夜を過ごすのである。無料宿泊所には店員がおつて、遅くきた連中は断わられてしまふので、彼らは已むことなく橋の下や霜枯れた原っぱの雑草の中に潜りこんで野宿をする。⁽⁴⁶⁾

東京市役所が実施した「浮浪者に関する調査」によると、昭和四年二月現在、生業を持つてゐる者のうち、最も多い日傭人夫は全体の一五・七%を占め、他も大部分は稼働能力の低い立ちん坊や軽子等、さらには大工、左官の手伝い、土方、芸人、ゴム靴直し、目立て、辻卜売りといった雑業層がここに加わつた。このような人々の暮らしをルポルタージュ風にまとめた工藤英一や草間八十雄は、その生活の内部に迫つた。例えば「浮浪者は語る」では、市民が毎日掃き出す二五万貫（九三八トン）から二八万貫（一〇五〇トン）に達する塵芥を埋め立てに用い、それを処分する東京湾の洲崎沖に面した場所を生活の糧、蒐集の地としているヨナゲ屋と呼ばれる人々を取り上げる。彼らはこの作業で日に三〇銭から四〇銭を稼ぐが、それでも食事代をひくと、その日のねぐらを

有料宿泊所で過ごすには足りない。

見ると立派な身體の若者が多い。「何を希望する?」「仕事を下さい」、仕事さへあつたら、金をもらえたら、木賃宿一泊二十五銭に泊り、湯にでもはいつて、足をのばして寝るのに、誰が好きこのんで野宿せう。二月夜半の風はひどく寒い。木賃宿は不景気でがら空きが多い。然かるに一方、心ならずも多くの野宿者がいる。⁽⁴⁾

「どん底の人達」を書いた草間八十雄（二八七五〜一九四六）は長野県松本の生まれ、上京後は和仏法律学校を経て中央、東京日日、日本といった新聞の記者となり、当時都市下層社会のルポルタージュ記事を書かせたら彼の右に出る者はいないといわれた。大正一一年には東京市社会局嘱託、同一五年には中央職業紹介所事務局嘱託となつて、主に調査活動に従事した。きっかけは「酷く惨ましい生活の有様を聞いて涙を浮かべずには居られない」体験をしたことである。プロレタリア作家同盟に属する葉山嘉樹、里村欣三は昭和六年一月「改造」に「東京暗黒街探訪記」を載せたが、そのなかに草間が登場している。すなわち、「私達はブンブン鼻を刺すやうに強烈な泡盛を飲んだ。ふいと、その時気がついたことであるが、アルコールが廻つて来た草間氏の顔が、にわかにかつと燃えるやうに、真つ赤に焼け爛れて来たこと、益々雄弁になって、言葉つきまですっかり『べらんめえ』口調に変わつて来たことだ。『さういふ草間さんこそ、土手のお金にそっくりじゃないですか』、葉山が懐中電灯のレンズのやうに飛び出た眼を、草間氏の横顔へ押しつけながら、肩を叩いて笑つた」。

農村の救済活動

農村生活の深刻な事態は爾価の急激な暴落、続く生糸生産業の縮小、さらに天候不順や経済恐慌のあおりを受けて農業全体の不振から生じた結果である。それは長期にわたる米価の低落を呼び、加えて様ざまな個別的不運が重なった。昭和五年一〇月、雪崩を打つようにして生産物価格が暴落すると、本格的な、そして長期にわたる農業不況が到来した。同年一〇月の米価は八月に一石当たり三〇円五〇銭、九月に二八円七〇銭から一挙に一九円台に下がった。しかも翌年は東北、北海道方面にも凶作が発生、それは九年まで三年間断続的に続いた。日本経済はこの恐慌を引き金にして不振のどん底に落ちた。東北地方では娘の身売りや欠食児童が多発、小学校教員の給料さえ不払いとなり、社会問題となった。破綻の様子を数値で見ると、昭和元年の農家所得を指数一〇〇とした場合、同六年は五〇〜六〇の減収である。里村は昭和七年八月、「改造」に「凶作地帯レポート」を載せ、北秋田郡矢立村の場合、「農民は犬の皮を着て、田植を^④してゐる。足がツキツキ冷えて二時間置き位ゐに、田からあがつて焚き火で暖を取らなければ続かないといふ。ここでも百姓は高利の借金に悩んで首が廻らない」。そこには乞食と見まごうばかりに困窮化した農民の姿があった。伊藤永之介の「鶯」（文藝春秋、昭和一三年六月）も文学的評価の高い作品だが、社会事業に詳しい眞木哲夫によると、救済面からの取り上げ方は正確でなく、「斯業の認識不足に不満を感じないものはなかるう」と批判的である。記録文学に登場する社会事業は、多くの場合、その細部や内面的な営みに充分触れ得ていない。東北の農家では経済的な負債を少しでも軽くするため、前述したように子女を年奉公に出す場合が多く、小学校教員がそれをとどめようと苦勞する話もあちこちにあり、あるいは村の職業紹介係をはじめとする行政担当者の説得方が地道な努力が描かれていたりする。伊藤の作品に

は「アル中の虚無僧は死んだ子供を葬ることが出来ないのです、方面委員に泣きついて、口をきいて貰い、町役場からやつと五円の埋葬料を恵んでもらった」話が出てくる。

春吉は子沢山のために前々からハルを奉公に出したいといっていたが、成績がいい子供なので、給与を児童並みにして学用品などをやることにして高等科にすませた。ところが入学して間もなく、婆さんの葬式を出したりしてどうにも暮らしにこまるから奉公に出したいといつて来たので、それならばというので役場の職業紹介係とも打ち合わせて適当な働らき口をさがしていたが、それまでこのことで度々学校にやって来た春吉が、ぱったり姿を見せなくなったので可笑しいなと思っていたところ、昨日の朝、春吉の弟嫁がハルのことで学校にやって来た。春期の修学旅行が四日の後に追っついて、ハルたちの学年は二時間ばかり汽車に乗って県庁所在地の市まで行くことになっていた。⁵⁰

政府はこうした困窮農村を対象に、昭和七年から三年間、就労機会の提供と農村復興のために道路建設、河川改修、治山治水、港湾整備といった公共事業を大々的に行なうことを決定、公共事業の振興に着手した。この時の国庫支出は総額にして八億六、四八七万円余に上る。ところが、不況対策は当初の意図とは反対の結果を齎し、度重なるインフレ対策のおかげで、かえって本来の農業復興は進まないどころか、むしろ更なる疲弊へと農民を追い込んだ。同じ伊藤の作品「鴉」（昭和一三年五月）をみると、農作業に手を割くことができない状態を生む、静岡のある大きな土木工事の人夫仕事であったが、働きたくても仕事がない若い百姓が何百人も町の職業紹介所

に押しかけてきて、たちまち四十人の定員は一杯になってしまった」様子に触れた。この問題はプロレタリア作家平林たい子も、故郷長野県諏訪を舞台にした作品のなかで取り上げ、政争の道具にされた拳句、最後は小作農民に更なる疲弊を齎す政策であったことに、鋭い批判の目を向けている。

この頃正雄たちの村の各区でも競って救農工事の許可を県に申請中だった。すでに千円、二千元という金を下附されて、工事委員まで選出した区もあった。しかし、一つの許可が下りるためにはその三分の一位の金が、予め運動費の名義で県当局や県会議員の周囲に必要なという噂だった。地主の少ない正雄の区でははじめからこの競争の傍観者の立場に立った。いろいろな附加税や戸数割などの重い地方税になやまされている半小作農の彼等は、徒な補助の申請はただ税金の加重を促して戻ってくるばかりだという見解をとった。しかし、「こういう立場は地主等によって破られた。あそこが許可になった、ここが許可になったときくと、この工事で救われる筈の貧農よりも先に地主が騒ぎ始めたのだ。」⁽⁵¹⁾

ここで和歌を一首挙げてみたい。

託児所の 寝臺の横に 千代紙ら 散りばめるなり 蛹のように⁽⁵²⁾

これは農村における託児事業に携わった保姆が唱った作品であるが、農家における保育や子育ては共同体によ

る相互扶助よりも、一家の維持、存続にとって必要な機能として重視された、つまり血縁的紐帯の強化こそがここでは求められた。しかし、平時における農繁季託児所に加え、戦時における人手不足を補う必要が外圧となつてこの問題が関わってくる。そこで次に、戦時託児所を取り上げてみよう。男子労働力の不足を補うために農家の主婦、女子は更なる農業に専従しなければならなかった。昭和初期、農村の暮しに経済不安が押し寄せた時、それまでは都市を中心に展開された保育事業が農村にも導入されるようになり、その需要は年とともに高まった。この問題をとりあげた賀川豊彦は「農村社会事業」（昭和八年一月）で、「農村には農村らしい種々な困難と不幸が、次から次に起つて来る。農村の社会生活は、都会のやうに複雑でないから、社会事業が要らないと思へば、大間違ひである。今日の資本主義文化は農村にまで浸潤してゐる。小作人は土地を失ひ、農産物の価格は暴落し、農村信用組合は次から次に倒産する」⁽³³⁾ 現実を直視しなければならない。頃日、財団法人協調会は「更生農村の模範的事例」を発表したが、それは昭和九年六月のことであつた。翌一〇年に農村調査を実施した鍵山博史によると、「特に東北はひどかつた。食事など朝昼晩とも、味噌汁に沢庵ぐらゐであつた。その味噌汁も、毎日新しく汁を変へるといふのではなく、餘つた汁へ水をさし、味噌を入れ、時々実を入れるといふやうなものであつた」⁽³⁴⁾と報告している。かくして昭和十一年六月、社会事業調査会第一〇回総会は農村社会事業の振興を政府に具申、隣保共助をとまなう農民の自力更生策を政策課題とするよう主張している。とりわけ妊産婦、乳幼児の健康問題、季節保育事業の促進、日常生活における共同化、その推進を強調した。頃日、壺井栄は東京府下南多摩郡横山村を訪ねて「農村訪問記」を書いたが、その内容は調査会の具申内容を裏書きする実態を描いている。

はるかな右の方には高尾山、小仏峠などが、晴れた晩秋の空の下に、遠近の濃さが目に映り、近くの山々は彩色された複雑な秋の色が美しく粧われている。「あれが眞覚寺というお寺で、農繁期にはあのお寺の中に託児所ができるのです。」案内の横田氏の指すところ、そこには畑の中の森にかまれたお寺の屋根が見られた。ここならば交通事故もなく、親も子も安心だらうし、畑の真中ということも百姓にとっては都合が良いにちがひあるまい。やがては農繁期の共同炊事なども考えられているという。農村もそこまで行かなければ、真に共同的な発展は望まれないのだらうと思う。⁽⁵⁾

島木健作（一九〇三―一九四五）は札幌の生まれで、東北帝大法学部を中退、その後は農民運動に関わり、結核に罹りながら日本共産党に入った。昭和三年に検挙された後に転向、以後はもっぱら作家を職業とした。獄中経験をもとに書いた「癩」、「盲目」によって新進作家としての実力を認められ、その一方農民運動をテーマとした「再建」、あるいは「生活の探究」が世評の高い作品となった。ここに紹介するのは昭和一三年八月発表「続・生活の探究」であるが、農繁期託児の様子が記されている。島木は農民生活のなかには、人生如何に生きるべきかという哲学的な人生論と、そのための実践論がひそんでいると指摘、いかにも知識人らしい筆致で自説を述べる。が、同時に医療体制の整備、農村青年の教育向上、道路改良といったインフラ整備、さらには自然災害に対する対策の必要性に触れ、農村問題をより広い視野のもとで検討している視点を見落してはなるまい。

五月の半ば頃から、駿介は健康回復後の最初の仕事として、農繁期託児所を創設するために奔走しはじめ

た。これはかねてから考へてゐたことであるが、今度病後の保養中に暇を得て、いろいろに考へを練り、實行の決意を固めたものである。夏は麦刈りから田植えまでの、秋は稲の刈取りの、この二つの時期に、小さな子供のある家がどんなに困るかといふことは、廣く知れ渡つていゝるし、この二年間に駿介は自分の目で見て来た。子供が手足まとひになつて仕事の能率が殺そがれるといふ親達のことより、子供が哀れであつた。六つか七つの子が、二つか三つの子を親代わりに子守りをしなければならなかつた。それも出来ない時は小さな子がただ投げておかれた。⁽⁵⁶⁾

二 ウチとソトから見た地域社会

慈善会とはなにか——ウエからシタへの施与

政府は明治一六年一月、一八万円余の経費を投じて東京に外国高官接待場を設立、その名を鹿鳴館と名づけた。「呦呦ゆうゆうタル鹿鳴、野ノ萃ヲ食ム、我ニ嘉賓アリ」(詩経)に由来するといわれ、落成後は外国公使団を招いて度々夜会、舞踏会を開いた。欧化政策をとりつつあつた明治一七年六月、この鹿鳴館でわが国最初の婦人慈善市が開かれてゐる。その「名は婦人會で、賣場は婦人受持なりしが、一切の計劃施設は、皆男子の手に成れること勿論なり。……今日、有志婦人相會し、婦人慈善會を設けて愛宕町有志東京病院へ寄附の爲め、特に手製品を蒐集して、本月一二、一三、一四の三日間山下町鹿鳴館に於て、會員出場、賣鬻せんとす、依て内外紳士及び貴婦人の來館を希望す、但來觀者は本會々員の紹介に依り、來館券を購得したる者に限る⁽⁵⁷⁾」。當時は他所でも慈善會が行

なわれ、二〇年一月に三日間連続で開かれた東京婦人慈善会による慈善市などは、女学雑誌にその内容が詳しく紹介されている。「古來例無き結構」であると言われた反面、こうした試みには批判もあり、例えば「慈善の事もとより有徳高尚にして人世の尤も美なるものなりと言へども、人もし之が恩を施すの方法を撰んで能く其道を得るに非ずんば、折角の美拳は反つて実情に不善を招き、為に慈善愛他の精神に反する結果を惹き起すの憂有之べき也」という。世間は概してこの行事に同情薄く、むしろ好奇の眼で眺めた。とりわけ上流婦人が中心となつて事が運んだことへの反撥は少なくなかつた。泉鏡花の「貧民俱樂部」を開くと、この慈善会に触れた場面が登場する。鏡花はこの作品を構想するに当たり、描かれる世界とは対称的な都市下層貧民を登場させるが、その記述は松原岩五郎の「最暗黒の東京」から多くを参照しているところがミソと言えばミソだろう。

天下泰平、町内安全、産ある者は仁者となり、産なき者は志士となりて、賢哲天下に満ちたれば、六六館（鹿鳴館）の慈善會は今にはじめぬ大當。就中喫茶店は貴婦人社會にさるものありと衆も識りたる深川綾子、花の盛りの春は過ぎても、戀に草茂る女盛り、若葉の雫滴たる如き愛嬌を四方に振撒き、多恨多情の八方睨に大方の君子を殺して黄金の汁を吸取ること長鯨が百川を吸ふが如し。助けて働く面々も、すぐり抜きたる連中が腕に繕否襷を懸けて、車輪になりて立廻るは、こと二番目の世話舞台、三階総出大出来なり。⁽³⁶⁾

頃日、すなわち明治一九年一月七日、市内の楽善会訓盲啞院において、慈善音楽会が開催されており、他の慈善会を含めて連載記事を掲載したのは東京日日新聞であった。なお、こうした慈善会と並行して催されたバザー

に慈善観劇會、慈善音楽會がある。この慈善音楽會については樋口一葉も「蓬生日記（一）」で「今日は慈善音楽會の催しあればにや來會者いと僅少なりし」（明治二四年一月七日）と記し、正宗白鳥は作品「何処」で、あるいは透谷は「慈善事業の進歩を望む」のなかで触れている。とりわけ透谷は「貴婦人慈善會なる者を見るに、是れ亦吾人が思ふ所の慈善主義の者ならず」（傍点、引用者）と、批判的である。一方植村正久は「日本評論」（第三号、明治二三年四月二日）で次の様に述べているが、こちらはこうした催しに肯定的な反応を示した。

近来、次第にその頭角を社會の上に煩わさんとする青年會、矯風會等が主人となりて、下等社會の巢窟職工の淵叢とも称すべき所に音楽の會を開き、文藝史伝の講談を催しなば、吾人は社會の改良に有力なる一の本槌を使用し始めたるなり。⁽⁶⁾

斎藤緑雨も明治二六年二月、「今では慈善會の名目を金で貸借の出来る世の中、減多に口は開かれず」と語り、語ることもはばかれる話題だと批判した。貧富の階級分裂がはつきりと人びとの眼に映るようになったのは、前述したように明治二〇年代の後半以後であるが、此の頃になると、それまでは「国民之友」で慈善會こそ現代の義拳だとほめあげた徳富蘇峰も「吾人は貴婦人たちが追々慈善會を開くと見る。然れども未だ貧民の為に之を開くを聞かざるなり。人窮すれば人を怨む。貧民たる者貧に窮すれば、必ず貴人を怨み、富者を怨む者なり、其然みを齎らすの術他なし。只隣愛を垂るのみ、貧民の為に慈善會を開き、高官貴人の懐より沢山の金を聚め取りて、之を貧民の上に雨降らすに在るのみ」と述べて、貧富の懸隔を埋める上において慈善事業が有効かどうか、自分

ははなはだ疑問になったという。しばらく後のことだが、小山内薫も同様の趣旨で批判を残した。「今から七年前、丁度日露戦争が済んだ年の秋だった。久松町の明治座に愛國婦人會の慈善演芸會が三日ばかり催された」ときのこと、その有様を見れば効果、効用の面から見てこれはすこぶる疑問であるという。巖本善治の批判は更に手厳しい。

凡そ志ある者が貴婦人諸氏を見るの温かなるは、猫は熱湯の如く藝妓俳優の頬を見るの冷なるは猶ほ寒水の如し、然るに湯水相混じて、水やや温度を増すと同時に熱湯は亦其割に冷ややかと相成る者とぞ承知せり、貴婦人諸氏が此回の趣向はたとひ彌よ彌よ慈善の心に富ませらるる徴にして、彌が上にも賣捌高を多くせんとの信切に出たりとすとも、若し之が為に世人が藝妓輩を惡むの情やや減じもせば、其反動の及ぶ所に密にひそか憂なきを得ず。⁽⁶⁾

蘆花の「思ひ出の記」について。後に書かれた「黒潮」に対する世評が社会小説の佳作であるといわれたことに比べ、こちらは文学史上評価として見るべきものはない。明治中期における保守と革新の思想的対立、拮抗を文学作品のうえから検証しようとする場合、蘆花はひとつのケース・スタディになる。その際のキーワードは慈善である。近代社会が日々生み出しつつある貧困問題にどう取り組むかという問いに対して、慈善的方法を高く評価する若き日の蘇峰にとって、それはやがて弥縫な方法とみるも、早晚批判の対象としたのが後期蘆花の主張である。

僕は少し変則かも知れぬが、衣食足而知礼節の格で、彼等の身霊を併せ救うの建議を教会に持ち出したが、彼金満家白井翁の首唱で直ちに排棄された。其様な高価な靈魂、加之虱だらけ垢だらけの靈魂を買はうより、外に廉価の、加之びかびか光った靈魂が幾個もある。其方が上帝の經濟に適ふとの事であつた。⁽⁶⁵⁾

夏目漱石（一八六七—一九一六）は幕末の江戸、牛込に生まれ、幼くして養子に出されたが、養親の離婚によって復籍、長じて東京帝大英文学科に入学、子規と同級であつた。松山中学、旧制五高の教員を経て明治三三年、文部省派遣の留学生としてイギリスに渡つた。その一方、高濱虚子の勧めによつて写生文を書き、その延長上に「吾輩は猫である」を著し、知識人の内面世界を描いた。この漱石にも慈善に触れた作品がある。社会問題をどう見たかということについて「それから」（明治四二年八月）のなかで、近代人はこの問題に振り廻され、ために「我々個人の上に反射してゐるから見給へ……悉く切り詰めた教育で、さうして目の廻る程こき使われる」人びとの何と多いことか。そしてまた、混沌とした世相は「自分の事と、自分の今日の只今の事より他に、何も考へてやしない。考へられない程疲労してゐるんだから仕方がない……日本中何所を見渡したつて、輝いている断面は一寸四方も無いぢやないか。悉く暗黒だ」と世相を診断するが、これは啄木が言う「時代閉塞の現状」にも通じる認識であつた。下層社会に特化してみると、「琴のそら音」（明治八年五月）のなかに「極楽水」と呼ばれる小石川の片隅に住む人びとを介して、上流社会を浮き彫りにし、「貧民は此処に來ない……あなた方が世間に出れば、貧民が世の中に立つた時よりも余計権力が使えるといふ事」だという。婦人慈善会に対する漱石の批判も鋭く、「尤も浅薄な仮面ノ例ニハ貴婦人ノ杯の慈善事業ガ一番イイ。本人ハ真ニ慈善ノ氣デ居ル。實際ハ虚栄ノ

ホカニ何ノ意味モナイ⁽⁶⁷⁾」。漱石の慈善批判を更に拾ってみよう。

カノ紳商杯、Selfishナル者ハ必ズ辛キ目ヲ見シ、西洋人ノ眼前ニ此般鑑アル故ニ可成慈善事業ヲナス（又宗教ノ結果）。日本ハ如何、彼等紳商ナル者ハ理非ヲ弁ゼヌ者ナリ。又宗教心杯ナキ者ナリ。但我儘ノ心アルノミナリ。⁽⁶⁸⁾

「君はヂッキンスの両都物語りと言ふ本を読んだことがあるかい」。「ないよ、伊賀の水月は読んだが、ヂッキンスは読まない」。「それだから猶貧民に同情が薄いんだ。―あの本のね仕舞の方に、御医者さんの獄中で書いた日記があるのがね、悲惨なものだよ」。⁽⁶⁹⁾

大正期に入ると倉田百三（一八九一―一九四三）の作品が注目される。早熟で蒲柳の質であった彼は、旧制一高に在学中から文筆活動を始め、大正三年に中退すると西田天香の主宰する一燈園に入って農作業を続けながら思索生活にひたり、この頃経験したことをもとに書いた、戯曲「出家とその弟子」が世間の評判となり、「俊寛」、「布施太子之入山」など、愛や信仰をテーマにした作品を次つぎに発表した。時代状況からいえば西田幾多郎が読まれ、人道主義が思想的に影響力を持った頃で、こうしたエートスに文学的な表現を与えて作品とした彼の主張は広く共感を得たのである。つまり、「倉田百三が圧倒的に迎えられたところに、当時の風潮の一端を見る」（加藤周一）。大正九年、評論集「愛と認識との出発」が刊行されると、これは阿部次郎の「三太郎の日記」と並ぶ青春の思索を代表する作品とみなされて一世を風靡した。この作品には慈善問題に触れた箇所があるので、次にそれを紹介

しておく。

私が別府の温泉の三階の欄干にすがつていたとき、足下の往來を見てみたら、小さい子供が三人鼓を打って流して歩いていた。私が氣まぐれに、「あれを呼び入れて何かやらせませう、慈善になるから」と言ったら、私の知人は「慈善になるからといふのは止して下さい。面白いからやらせませう」と言った。私はその時穴へも入りたいほど羞かしかつた。世の中には美しく見えて慘酷なものが實に多い。それを見るとき私の心は憤りに慄へる。慈善音楽会や、畫家のモデル女や、動物試験のモルモットや、これ等は嫌悪すべきものである。⁽¹⁰⁾

福祉施設のはじまり——收容された人びと

首府東京にある養育院は明治五年一〇月の開設だが、これは本格的な公立施設のはじまりである。当初、市内にたむろする浮浪者二四〇人余を強制的に收容したのは治安上の必要からで、一八年に財政的理由から公費支弁が打ち切られ、様ざまな経緯を経た後、二三年一月東京市に移管、公立施設としての性格を保った。この施設にとって運営上忘れられない人物が三人いる。澁澤榮一、安達憲忠、瓜生岩である。澁澤は幕末、埼玉県の生まれ、パリに渡り、ヨーロッパの近代産業をつぶさに見聞した。帰国後はわが国最初の商法会議所を開設、大蔵省にも出仕したが明治六年に退官。以後は第一国立銀行の創設、紡績、製紙、セメント等各種基幹産業の育成、経営に携わり、その数はおよそ六〇〇余り、近代産業成立の功勞者となった。後半生はこうした活動のかたわら慈善事

業とも深く関わり、ここに取り上げる養育院の院長をはじめ、中央慈善協会会長等、多くの団体における役員を勤めてている。紹介するのは養育院との関わりから、自身の情民観に触れているところである。

養育院の事業はその創設当時においては規模も小さく、経費もそうまで多額を要しなかったが、その後次第に収容者が増加したので、したがって経費も多く要するようになり、明治七、八年ごろからは年々一万七、八千円から二万円近くの経費を要するようになった。また上野の収容所は手狭を感じるようになったので、明治一四年に外神田和泉町の旧藤堂邸の東部に移ったが、明治一五年の東京府会において、養育院の経営は廃止したほうがいいという議が起り、この説がすこぶる有力となった。当時の廃止論者は府会議長沼間守一、議員益田克徳その他であったが、廃止の理由はこのような慈善事業は自然に怠け者の民をつくるようになるから、むしろ害あつて益なきものである。このような事業に多額の経費を投じることがはなはだよろしくない、すべからく廃止してその経費をほかの有用な方面に利用すべきである⁽¹⁾と云う。

時代はくだって明治三六年一月の「新小説」に掲載された太田宙花の作品「東京市養育院」を紹介しよう。他に養育院を題材にした文学は少なくない。明治後半期に限っても遅塚麗水「月夜鴉」(春陽堂、明治二九年二月)、斎藤緑雨「ひかへ帳」(太陽、明治三二年一〜二月)、無署名「参観、東京市養育院」(婦女新聞、明治三四年四〜五月)、泉鏡花「註文帳」(明治二九年四月)、坪谷水哉「東京市養育院」(文藝倶楽部、明治三五年一月)、安達憲忠「貧民窟と養育院」(新公論、明治四〇年三月)、国木田独步「窮死」(明治四〇年六月)、巢鴨生「養老院に入るものの道筋」

(新公論、明治四三年九月)。

次に我等は子供の室を参観したるが、此處は事務室の隣に在り、斯は嬰兒貰受人保育人日々出入頻繁なる上に、最も注意を拂ふべきものなれば、斯く為せるものなりと。収容せらるる子供は棄兒、迷兒、其れに行旅病者の携帯兒と窮民の五種なるが、これを幼稚室(五歳以下)、幼童室(六歳以上の男兒)、幼女室(六歳以上の女兒)に分けたり。幼稚室には天井に犬張子をつるしたるあり。嬰兒は直ちに里親に托し、滿五年になれば帰院せしむるなるが、此の保育を託する里親の中には、其を取り上げんとする際に當り、永き月日の間の愛情に引かれ、数日間院内に止まって去らざるものあり。又里扶持は貰ふに及ばねば、今暫く托せよと言ふものあり。⁽⁷⁾

昭和期の養育院について。作品紹介の前に、築地小劇場でその戯曲が上演された前後の事情からはじめ。藤森成吉の「何が彼女をそうさせたのか」は六幕九場からなり、初演は昭和二年四月。演出は土方与志、主役すみ子は若き日の山本安英が演じた。三年後に映画化した際の主役は高津慶子、新興シネマの製作である。藤森によれば、「浅草で上映されるや、毎日観客が行列をなして、映写中歓声や拍手が湧き、日延べまた日延べの盛況」であった。此の頃、昭和恐慌のあおりで不況のどん底にあえいでいた庶民は、この作品に共感を惜しまなかった。各地に労働争議が起こり、小作争議も多発するという社会不安が、人びとの心理をいやがうえにも鬱窟とさせた。築地小劇場で配布されたプログラムには、第三幕「処、養育院内の隔離室」というト書きに続いて、「藤森成吉氏

は、この社会の欠陥を、この作によって鋭く描破した。可憐な少女すみ子は、子供芝居の楽屋、慈善を看板とした押し売り、養育園⁷⁴、紳士の邸宅、琵琶の師匠の家、天使館へと転々流浪する。いずこにあつてもすみ子を持っているのは迫害である」と書き、劇の持つ左翼的な傾向性が窺われる。東京朝日新聞の劇評（昭和二年四月二〇日）は、「何も知らないすみ子の可憐な人生を対象にして、社会と環境の不合理な欠陥一切を暴露し、不幸な人がわけもなく落ちていく運命の姿を描破せんとした」ことに好評を与えた。ところが、社会事業界の反応はその反対で、この劇は社会事業に対する偏見と誤解に満ちているという。例を雑誌「社会事業」から拾ってみると、同誌は座談会形式による劇評を試み、内容もそうした主張になっている。そして、「社会事業に関係する私たちとして、黙つてゐられない節がある。私たちとして考へねばならぬ材料もある」⁷⁵ことを踏え、「藤野恵」この劇は不完全な施設を攻撃する目的をもって書かれたものに違いなからう、「（高島巖）勿論そうだ。けれども、自分が芝居を見ながら教へられたことは、施設そのものの改善も急務であるが、更に必要なことは、この施設に対する民衆の理解がもっともっと進まなければいけない」⁷⁶ということだ。次に、地方都市における例として、北陸金沢の慈善施設に触れてみたい。泉鏡花の作品「風流線」に金沢市内の慈善家が登場する。鏡花は明治六年一月、彫金師を父として市内に生まれ、郷土の慈善家小野太三郎が経営する小野慈善院は、市内六カ所に施設が散在しているから、少年時代から慣れ親しんだ施設風景であった。登場する主人公は実在の小野と全く逆のタイプとして描かれ、金満家で剛腹な人物である。しかし、施設の内部、運営に関わる叙述はほぼ実在のそれに順じており、巨山五太夫（主人公）は、城下に貧窮人のお救い小屋を立ててお在りなさる」篤志家とされている。別に、鏡花は「湖のほとり」（新小説、明治三二年四月）でも「浦島の殿様」をして、「国内随一の大長者で、且つ徳望家で、

又未曾有の慈善者で、あらゆる乞食を救済して、之を養ふ者数を知らず、城北の野に矮屋八十六棟を有して、養老院と称へてある」(鏡花全集、巻五)と記し、記述内容は詳しい。評論家秋山稔によると鏡花が小野をモデルに執筆した理由として、「横山源之助『北陸の慈善家』に接した」ことが推測される。「日本の下層社会」が刊行されたのが「湖のほとり」の発表とほぼ同じ明治三二年四月であるから、鏡花は「源之助の記事を毎日新聞の初出で読んだことになる」⁽²⁶⁾。ただし、前述の「貧民倶楽部」と同様、主人公の取り上げ方に多少の諧謔を含ませていることを考えれば、自身の慈善観は決してストレートな肯定論者ではなかったことが分かる。実在の小野をそのまま小説の主人公とし、上つらつたわけではないことも、それを客観視したためであり、小野への眼なごしは次の様である。

以前は誰も丸木橋のやうなもので往來をして居たのですが、其の水で流されますと、村方困窮の折から、丸太一本手の届きません處を、篤志の大慈善家があつて、新たに立派なものを拵えて下すつたんですな。なし崩しに其の費用を辨ずるといっても、人助けにされた事業ですから、取らうとは言はれんですが、其の方は又、久しい以前から城下に救小屋をお建てなされて、出入りはいつも四、五百の窮民を甦ふて居らるで、其の幾分の足に、引く諸君の寄付を仰ぐなどして、慈善家の恩恵で出来ました。此の橋をお通りの方に有志を頂戴しやうといふわけです。僕が申さんでも当国の境を跨ぎになった以上は、速に御承知ありませう。慈善家というふのは、巨山氏、誰も活如来といへば知らぬものはありません。⁽²⁶⁾

隣保館とはなにか——地域福祉のはじまり

明治二九年一二月、アメリカから帰国した片山潜（二八五九〜一九三三）は、彼の地で学んだ労働問題、社会問題について既に一家言を持つていた。頃日、市内神田区三崎町三丁目に、自身の考えを実践するためセツルメント、キングスレー館を設立した。このことについて「自傳」はキリスト教社会事業の本営にするのが目的であったと述べている。在米中、組合派教会に通い、洗礼を受け、この頃はキリスト教社会主義者を名乗っていた。活動内容を「労働世界」（第五二号）から拾ってみると、「きんぐすれい館の社会事業は着々其歩を進め、幼稚園はすでに満員となりて、頗る評判良く入園を申込み者続々とある程……昨年は七〇名以上の職工及友人の事務ありて欲を盡したるが、今年も同館長（片山潜、引用者）は諸氏の来館を希望していらるる」と述べる。同じ頃、彼は東京専門学校で講師をしており、生徒のなかに若き日の正宗白鳥がいた。正宗が受けた印象は、「無愛嬌で陰氣なので学生に喜ばれなかつた⁽¹⁷⁾」という。それでも或る日、彼はキングスレー館を訪れて見学と対談のひとつときを持った。

その家は耐震家屋として建てられてゐた。二階の（片山）氏の居室に入つて見ると、その設備は西洋風になつてゐて、住み心地のいいやうに調^{とよ}つてゐたので、当時の私の目には贅沢にさへ思われた。装^かりのある笠を垂れた大きなランプが卓上に置かれてあつた。学校へはいつでも質素な洋服を着けてゐた氏も、その夜は柔らかい日本服を着て羽織をも着けてゐたが、それが不似合いに思はれた。氏は私たちを快く迎へて呉れた。問ひに應じて優しい聲でポツリポツリと話して呉れたが、相変わらず陰氣であつた。椅子に腰掛けてゐ

た氏の容貌、態度がコチコチしてゐて活氣も生彩もなかつた。⁽⁷⁸⁾

賀川豊彦（一八八八―一九六〇）は四国徳島の回漕業賀川順一の庶子として生まれ、幼くして父を喪い、家も破産、失意の中学時代に宣教師H・W・マヤスから洗礼を受けて、牧師となるべく明治学院神学部に進む。ついで神戸神学校に移った頃、結核を患い、静養中に自伝小説「鳩の真似」を書き、やがて体調が回復すると明治四二年二月、神戸市北本町のスラムに住んで奉仕と伝道の生活に入った。一膳飯屋「天国屋」を開いたのが福祉実践のはじまりであるが、やがて大正八年、三二歳の時、鈴木文治等とともに友愛会関西労働同盟会を組織、関西地方における労働運動を指導する。翌九年には「鳩の真似」に加筆して「死線を越えて」と改題、改造社から出版すると、やがてベスト・セラーとなった。賀川は当時の社会事業界において、どのように見られたか。ここに小塩力の評言がある。

大正八、九年頃だと思ひます。私は直接留岡幸助から、賀川さんについて話を聞きました。それは礼拝説教だったのですが、神戸の貧民窟に賀川という男が捨て身になって仕事をしている。えらいやつじゃ、とたいへん褒めましてね、壇上から「貧民心理の研究」をみせてくれました。これはぜひ読まねばならぬ、非常に貴重なものだと思ひ、さらに、それにもまして詩集「涙の二等分」をすばらしいと思ひてほめたのです。

賀川の登場は大正という時代、社会事業を理解するうえで象徴的な意味を持つていたから、社会問題の解決は

理論的な、高踏的な人道主義では間に合わなくなっていた折、実践的で理想主義に立脚する労働運動が賀川によって起こされる。「その記録『死線を越えて』が大歓迎を受けた」ことも、ここからみれば当然であつたろう。しかし、その「死線を越えて」が当時の文壇からはほとんど評価されなかつたことも確かで、菊池寛は世間の評判と重ね合わせて複雑な印象を持ったことに触れる。つまり、「相当の反感を以て、あの作品を読んで見たが、描けていない、描けていないと思ひながら涙ぐまずには居られなかつた」（新潮、大正十一年七月）。概して同情をさそうキワモノ風通俗小説という評価のほうが多かつた。そうした風潮のもとでも、與謝野晶子は舞台となつた葺台新川の貧民地域を訪れ、賀川の隣保事業を見聞した。それは「晶子の鋭敏な詩人的感覚がようやく全容を現して来た社会の矛盾を、いちはやく捉えた」⁽⁸⁰⁾からではなかつたか。自身は「偶然にも貧民窟に生まれた為に、其等の子供達は悪性のトラホームや、皮膚病や、親から傳染された梅毒やに罹つて、一人として完全な肉體を持つて居る者がありません。何といふ不幸な子供達でせう。」⁽⁸¹⁾という感想を抱く。

どうせ近い中に死ぬのだから——一年か、二年か、長く生きて三年くらいのうちには肺で死ぬのだから、死ぬまでありつただけの勇氣をもつて、最も善い生活を送るのだと決心した。彼はまったくトインビーやフレデリック・マウリスやチャールス・キングスレーの基督教社会事業に傾いていった。そして、ただ唯物的なマルキシズムでは満足できなくなつた。彼はしかし現代の教会が肉を離れ、経済問題を離れて、愛を説くことに反対した。彼は、愛は肉を装わなければならぬと考えた。彼は愛と肉と精神は一つのもので、時間の上に延び上がる意志が精神で、空間に広がる意志が肉だと考へた。それで肉をとらねば、すべてのものに意義が

なく、神も肉の形で表象されなければ我らには理解がされない。⁽⁸²⁾

既述した明治三〇年設立のキングスレー館から始まり、やがて大正、昭和期を通じて普及した、いわゆる隣保館事業が、その社会的意義を広く持つようになるのは、主として昭和期以後のことである。近隣に住む下層細民にとつてここはやがて無くてはならない社会事業施設に変化していったから。当初はほとんど民間の私立施設であつたが、やがて、公立隣保館も加わるようになる。大阪市立隣保館（市民館）はその代表的な施設であらう。ここでは民間施設としての典型例を紹介してみる。大正八年五月、日本基督教婦人矯風会によつて建てられた興望館は本所区松倉町で事業を開始、やがてより、需要の高い南葛西郡寺島町に移転したのは昭和三年四月のこと。寺島町は「東京市の延長として大正の中頃、玉の井新地が出現し、さらに震災後の好影響を受けて異常な発展を遂げ」（墨田区史・前史）つゝあつたところである。偶たま水利、交通の便が良かったため、ここ墨東一帯はやがて工場地に変貌する。とりわけ下請け零細工場が謂集した。同じような例を関西に需めるなら大阪、釜ヶ崎近辺がそれに近い。ここに林文雄は四恩学園を設立、こちらも典型的な隣保館となつた。仏教主義に立ちながら、当時の風潮であつた左翼運動の影響を受け、協同消費組合をモデルとした貧困労働者のための施設として機能する。

我々の任務が、セツルメントが勤労無産階級の自主的機関であることを大衆に目覚めしめ、その覚醒と断の研究と精神による団結が、総ての中に浸透して理想社会の域にまで高揚せば、全勤労無産階級の窮極的幸福の招来も助成するのみならず、又完全に社会進化の過程に副う所以であると信ずる。⁽⁸³⁾

興望館も四恩学園も、資本主義経済の展開にともなって大量に生じた失業者、産業予備軍としての半失業者が抱える様々な貧困に対処するため、東京、大阪をはじめとする大都市で社会的ニーズに適合した施設となった。ここに文学作品をあてはめようとすれば、まず「冬の宿」ははずせない。作者の阿部知二（一九〇三～一九七三）は東京帝大文学部を卒業すると、大学院に進むかたわら、小説、評論を書いて文壇にデビューした。昭和五年に「主知的文学論」を発表すると、教養的主知主義者と呼ばれた。そして、昭和十一年一月「冬の宿」を発表するや、たちまちベスト・セラーになり、続く「幸福」「北京」「風雪」などにより作家としての地位を確立した。「冬の宿」は、「時代の風潮として、自身にほど近い友達が争って社会運動に入っていく」なか、そうした「友達のたれかれが官憲に逮捕される」。そうした学生の一ひとりが主人公である。下宿先の家主は内閣調査局に勤め、同宿者には朝鮮人の青年医師がいるなかで細かい人間関係を追い、精神と肉体の葛藤事情を内面的な象徴を心理的表現方法に用い、「すこしの隙もなく、暗く冷却した冬の色に塗られた」時代状況を浮き彫りにした。セツルメントとの関わりは朝鮮人青年高こうの存在を中心に、「某私立医学校を出て」病院に勤務する傍ら、彼は、「同郷の先輩の社会事業家が深川に建ててゐる」朝鮮人労働者の「施療院に奉仕的に」通っている。そこが「東京の有名な貧民窟であった」ことから、セツルメントの存在意義を世に知らしめるには十分であった。この作品は後に東宝映画で豊田四郎監督により映画化されている。同じ頃忘れてならない作品がもう一つある。主人公の名は真知子という。昭和三年八月から同五年一二月まで、「改造」に連載された野上彌生子の作品である。評論家瀬沼茂樹によると、「それは当時の若い我われを感動させることの大きかった作品」であるという。脇役として登場する大庭米子は、女子大を退学して三河島のセツルメントに入り、そこで革命運動との接点を求めようとした。当時の社会的背景か

らえば大正一五年一月の京都学連事件が執筆のきっかけになっており、知識人青年の苦悩を群像風に取り上げて描写している。加えて言えば、J・オースティンの「高慢と偏見」Pride and Prejudiceからの影響も少なくない。だが、この作品を現業の社会事業的視点からみると問題がなかったわけではない。当時、セツルメント事業に従事していた牧賢一によれば、革命運動との接点はほとんど無きに等しく、大抵は「教育的であると考えられているのであるが、其の各々について内容を検討する時、多くは託児事業を主要事業とし、他は僅かに其の附带的意味に於いて之を行ふと思はれるものが少なくない、近隣と真の接触をなし、其の組織化を實行しつつあるもの等は極めて少い」というが、米子の従事するセツルメントの風景を作者は次の様に描写している。

真知子は学校からセツルメントに廻った。あらゆる種類の工場と屑屋の延長が町であった。荒削りの南京じたみに、埃のたまった褐色の建物は、メリヤス工場と材木置場の間に見出された。頸のかほそい少年工が、メリヤス屋の二階の窓から見下ろしてゐる。ささやかな空き地のブランコと迂り台と、小学校の楽しい夢を彼は追うてゐるのだ。きれいに洗はれたおむつが運動場の一部を乾場にして、高々と洗濯屋のやうに翻つてゐる。

就労援助への注目——職業紹介事業のこと

慶庵（又は慶安）とは、江戸期から長く呼び慣れた、雇人の口入業（紹介、斡旋）のこと。雇人とはこの場合、労働力をもって生産、販売に従事する、いわば臨時の使用人で、勤め先は商人であったり、職人であったり、諸

事雑業を請負ったりした。この雇用関係をとりつけ、仲介役を果したのが慶庵だった。名称の由来は諸説あって確実な根拠は示し難いが、「文藝界」（明治三十七年一月）をみれば、「寛文（二六六〇年代）の頃、木挽町五丁目慶安といふ医師があつて、本業よりは縁辺の世話を専らとして居たが、或る時に酒井某の息子を縁附けて、持参金五千両の内から二千両を着服し、其金を仲間の浪人と分配しやうとしたことが露頭、夫はその為に刑に處せられた。此時から人の媒妁をすることを、戯れに慶安をすると言ひ出した」ことが世間に披まつたのだという。俗説かも知れない。さて、明治期になつて職業紹介所が現れたのは四四年のことで、浅草と芝に二カ所設置されている。公的な性格をもつて斯業が成立したのは、他の施設に比べると、大分遅いと言わねばならない。その間の風俗としては、次の様な記述が残されている。

午前中に茅町へ出掛けて見ると石千尾以下五、六軒の店頭と言つたら、宛然市場でもあるかの様で、大勢の雇人志願者が黒山の様に群集して、二十歳前後の若い者もあれば、伶俐らしい男もあるし、ぼっと出の田舎漢もあれば、渡り者の摺ッ枯らしもあるし、夫は種々様々の人物が集まつて、各自適当な奉公口を求めるのである。⁽⁸⁶⁾

これまで近代文学は職業紹介所をめぐる話題を作品にすること、窓口業務から見た世相を文章にすること、なかなかここで生きることに必死であった人びとの人間模様を描くことに興味を示さなかつた。わずかに目に触れた例でいえば、昭和萬葉集に「扉をあけると、むっと鼻つく人いきれ、紹介所はいつ來ても満員だ」という雑

歌がある。貧しい人びとの生き様がわずかだが伝わってくる一首だろうか。職業紹介所を通じて非行少年の矯正、社会復帰を図ろうとした記事が新聞の片隅に載ることもあった。「感化院はあるが、肝腎の悪少年は忽ち逃亡を企てて旧の如く市中で悪事を働くし、先頃から市の小石川職業紹介所でも、警察から送られた浮浪児を收容、職業を与へて感化する方法を始めた」という。あるいは、在日朝鮮人のための窓口事情に触れるなら、昭和一五年のこととして金文善は大阪市内でのそれを紹介、日中戦争が長期化するさなか、労務報国が叫ばれ、主要な男子労働力は他の重要国策に移ってしまい、その空白を埋めるべく、「紹介所ではそれまで常時少年五、六人ほどころころさせていたが、それもいつのまにかいなくなり」、在日朝鮮人にとって雇用の機会がここに広く適用されるようになった。その場合でも雇用条件は日本人との間に隔差を設け、朝鮮人差別ははっきりと存在していた。さて、島木健作が昭和一五年に発表した「地方廳」をみると、東北地方における季節労働者施策に触れた雇用事情が出てくる。

先づ職業協会の各町村区会が、職業紹介所の指導を受け、求職票によって毎年出稼ぎし、或は新たに出稼ぎしようとする者の一斉登録をする。求職者の連名名簿が出来、その一通は職業紹介所に備えつけられる。紹介所はかうして求人申し込みに対して備える。つまり、出稼ぎ労働者を雇はうとする会社とか工場とかいふものは、今後は原則として職業紹介所の手を通さなくては、雇ふことが出来なくなつたわけなのである。⁽⁹⁰⁾

話題を大阪に移し、時代を少し遡ってみよう。小林佐兵衛（一八三〇～一九一七）は大阪、北野に生まれ、武家出身であるが少年であった頃に家出し、やがて質屋の養子になるも、それも嫌になり、博徒の世界を生きるようになった。やがて侠客として世間に名が知られるようになる、ふとしたきっかけで伊予小松藩お抱えの土分にとり立てられ、以後名前も明石家万吉から小林佐兵衛と変え、明治維新を迎えた。大阪では政府が清水谷に救恤場を設け、やがてそれは大貧院と称する慈善施設となった。主に孤老、棄児、迷児を収容、明治一三年の記録によるとその人数はおよそ八〇名であった。更に幼児や障害者を加え、施設の機能も収容だけでなく、授産施設として運営すべく、性格改変を図った。小林はその経営責任者に指名され、名称も小林授産場としたが、経営は困難をきわめた。

世話人に伴われて授産場を見る。入口の右方に十六畳敷と八畳の二工場あり、今日は明き居れり。その二階十畳ばかり敷きたる室に古き畳四枚敷きたるあるは、これ良児童の寢室たり。掃除はいつせられしものぞ。軸木は右に、左に散乱て、暫く佇み居れば足袋のコハゼの辺むずかゆく、竊に手を当れば蚤なり。櫓はしを降りて背の辺頻りにかゆし。軸並工場の前に至れば一種言ふべからざる臭氣鼻を衝く。各児童は帽に羽織を着け居れる。余を何者と見たる、いずれも急に居坐を正し、一同は首を下げて挨拶す。

次に紹介するのは村松梢風の「現代侠客傳」に登場する佐兵衛の姿である。経営が行き詰まり、「しまいには佐兵衛もこれには弱った」という経営費の支出超過が主な理由となって明治四三年九月、大阪市に返上願いを提

出、斯業から手を退いた。この後、同市は財団法人弘済会を組織、授産場の不動産を全て売却する。市に移管する際、ここには一〇〇名以上の収容者が暮っていたが、梢風はその「佐兵衛は、性來情深い人だったので、可哀想だの、不具者の年寄りなどで養ひ手のない者を見つけると、おれの家へ來いと言って、つれてきて養っておいた。だから、彼の家にはいつでもそんなのが多勢いた」という。次に、昭和期に入ってから職業紹介を記した作品を紹介してみたい。それは室生犀星が「読みながら、豊田正子さんの文学のことを考へた。野澤（小池）さんの文章は、豊田さんよりも複雑であつて、感覺の方面も、小説家の卵として相應しい多くの清濁を持つてゐる」（讀賣新聞、昭和一五年五月二八日）。ここで対象となつた作品とは小池富美子（一九二一―不詳）の「煉瓦女工」である。小池は横浜市に生まれ、小学校を卒業すると家政婦、女工と職業を変えながら生計をたてた。生來病弱だつたため、どの職場も長続きしなかつた。そうした暮しを題材に書いたこの作品は、犀星の書評にあるように、豊田正子の「綴方教室」との間に多くの類似性が認められ、発売されると異常な売れ行きを示し、戦時下における数少ないベスト・セラーのひとつとなつた。舞台は京浜工業地帯の一角。「家と家とが目茶苦茶に建てられた迷路のような鶴見川沿岸の漁村である」。大工を父に、浅蜷売りの行商人を母に持つ貧乏所帯に育つた。転職の度に紹介所を訪ねねばならず、面接場面では職員の好印象を得るため、しんどい思いを重ねた。昭和一三年四月公布の社会事業法には授産場、宿泊所と並んで「其ノ他經濟保護ヲ為ス」（第一条）事業として出てくる。島木が綴つた世界は農村が舞台であつたが、こちらは工業都市の下層社会である。労働条件の厳しさや労働機会の少ないことは、戦時下であることがここに大きく影響し、何よりも弱小婦人労働の就業機会が少な過ぎることが理由となり、そうした弱い立場で就労を活写したこの作品は「荒々しく、切なく」、そして、あてのない日本の下層社

会を雑然としたままの筆力で描き出し、「一種の感動を与えた」と記したのは宮本百合子。

赤子を背負って「通いで飯たきの口はないでしょうか？」と所員にすがる血色の悪い女や「どんなに骨が折れてもかまいませんから、お金のとれる処へ」と、はげた白粉の顔を赤くして頼む三十女、「内職で一日二十円ぐらい欲しいんですけど……」と、出来ない相談を仕掛け、子供を泣かせては饒舌りお辞儀をくり返しては頼む女の群、その一番後で、みさは給仕が渡してくれた紙片へ、ガリガリひっかかるペンを運ばせる。「志望一」とある欄に女工と書き入れ、本籍、現住所、生年月日、学歴、山崎みさと署名し終ると、人いきれの熱さで汗が気味悪く背筋を流れるのを感じ乍らもホツとした。⁽⁹²⁾

ここでまとめをしておくなら、家族を持たない単身者、あるいは疾病経験があつたり、就労条件がどうしても合わない者など、つまり食事すらままにならない人びとにとって、簡易食堂の利用は日常欠かせない存在であつた。淵源は明治の一膳飯屋に行きつくが、いずれも利用が簡便で、何よりも料金が安い。衛生や風紀の点で問題が無かつたわけではないが、下層庶民にとっては便利な生活施設であつたと言えよう。社会事業施設としては簡易住宅、公設市場、授産場、簡易（無料）宿泊所とつながり、いずれも社会的な需要は高かつた。簡易食堂の原型となる一膳飯屋について、漱石の「道草」から一部を引用しておきたい。

ある時の彼はまた馭者や労働者と一所に如何^いわしい一膳飯屋で形ばかりの食事を済ました。其所の腰掛の

後部は高い屏風のように切立っているので、普通の食堂の如く、広い室を一目に見渡す事は出来なかつたが、自分と一列に並んでいるものの顔だけは自由に眺められた。それは皆な何時湯に入ったか分らない顔であつた。⁽⁹⁸⁾

救世軍とともに——ソトに向かって働きかける

ところで、救世軍とは一体何だろう。イギリスのプロテスタント、メソジスト教会牧師であつたウィリアム・ブースがロンドン東部地区イーストエンドの貧困層を対象に伝道をはじめたのは一八八五年のこと。それまでは東ロンドン伝道会と名乗っていた、その名称をSalvation armyと改称したことから始まる。これを救世軍と邦訳したのは尾崎行雄である。名前が示すとおり軍隊組織を採用、教理としては「救拯」と「聖潔」を強調、伝道と社会事業を一体化した点に特徴がある。「救霊にあらざる社会事業はなく、社会事業にあらざる救霊はなし」というのがモットーで、イギリスではジャック・ロンドンが体験記のなかで一九〇二年のロンドン事情に触れた際、救世軍の活動を作家の眼で観察している。その救世軍はわが国に来日するや、都市部を中心に活動を開始した。指導的な役割を担つたのは山室軍平（一八七二—一九四〇）である。貧しい職工として活版印刷に従事していた彼が、明治三二年に入るやたちまち頭角を現わし、かつて同志社に学んだことによる人脈も役に立ち、やがて知名の人となつた。三二年一〇月、代表作ともいふべき「平民之福音」を刊行、四二年には歳末助け合い活動を始めた。街角に慈善鍋を措えての寄付金募集である。その後、職業紹介、宿泊提供、婦人救済、児童保護、貧民救療等多方面にわたる社会事業を経営した。山室の社会事業思想はキリスト教々理を別にすれば、自立、自助論が特徴である。晩年

の回顧によれば「わたしはまたスマイルスの『自助論』（中村正直訳）を得て、これを読み、その中に出てくる英米人の不屈不撓、万難を排して何事かをやり通した、多くの模範に感動した」という。若月紫蘭の「東京年中行事」（明治四四年一月）を開くと、そこには「救世軍の三脚鍋」に、街行く人びとが小銭を投げ入れる情景が記されている。歳末の風物詩として、慈善鍋は社会的に認知されていたことを窺わせる記事である。集まった寄付金は「世の貧困者の為に、同情する人々の喜捨によって、正月の餅すら得ることの出来ない氣の毒な家族に、紅白の餅を搗き、その他の寄付を合わせて蜜柑、石鹸、手拭、玩具といった品物を一折りの籠に入れて一軒毎に配り、少しでも虐げられた人達に神の恵を傳へんが為でありました⁽⁹⁾」。当初は市の中心部に近い銀座、日本橋、水道橋付近に限っていたが、事業の拡大とともに、やがて「賑やかな広場、街の四辺の四辻に設けた」慈善鍋は世間の評判を呼び、盛大となり、分配地域も本所、深川、浅草、下谷の細民街から三河島、吾嬭村といった市外地にまで広がった。そこで、この慈善鍋が登場する作品はないものかと尋ねてみると、久米正雄（一八九一～一九五二）がここに触れた風俗小説を書いている。久米は長野県に生まれ、はじめは河東碧梧桐について俳諧を志したが、まもなく劇作に転向、第三次新思潮に加わり、「牛乳屋の兄弟」を発表、以来芥川龍之介と共に漱石門下の流行作家として広く世に知られるようになった。「慈善鍋」は小品であるが、普段慈善などを考えたこともない市井の庶民が、ふとしたきっかけで寄付する機会に遭遇、そのやり取りを次の様に記す。

ふと見ると、其處はもう新橋際の街角近くで、灯の賑やかな夜店とともに、人通りもやや途切れて、巷の風がどっと腋の下に沁みた。と、ぼんやり佇んだ彼女の後ろで、妙に職業的な鍛錬を帯びた人の聲が起る

のを聞いた。「……え、どうぞ皆さん、此の歳の暮れの、饑と寒さに戦^かへてゐる吾々の貧しい同胞の為に……」と振り返つて見た鈴龍の眼には、ふと其處の最後の街路樹の横に、三ツ又を組んだ棒と、其中央に吊られた、大きな鍋が映つた。鍋の底には其の頃大いに使用されてゐた小型紙幣や、黒ずんだ貨幣などが寧ろ汚ならしく二、三分ばかり溜つてゐた。鈴龍は咄嗟に、ヤケ半分の心持と共に、天啓のやうなものを感した。そして直ぐ懐ろ紙を取出すと百圓紙幣を分らないやうに包んで、怖る怖る、何だかひどく悸^{たか}ぶる心臓の音を自ら意識しながら、鍋の方へ近寄つた。⁽⁶⁵⁾

平林たい子は自らの貧困体験を自作に取り入れるが、そのなかでしばしば社会事業に対する辛辣ともいえる批判を文章にしている。このプロレタリア作家にとって、社会事業は概して賞賛するに値する存在ではなかった。そうした一例として、救世軍が経営する婦人ホームの食事風景に触れた際、職員の応対のまずさ、食事内容が余りにも貧弱であること、あるいはその経営姿勢の高圧なことを問題にした。瀬沼茂樹によれば、「夫を投獄の憂き目に遭はせた雇主に復讐をたくらむような意志的、実践的女性を通じて、『行き倒れの女達の捨て場所』のうな婦人ホームの内部の実情を剔抉し、凡そ博愛の精神とは反対の偽善性を明らかにし、描き切っている」ところに特徴があるという。どんな慈善でも裏には偽善が常につきまとうていることを指摘したのである。

蒸気の出ているひじき臭い味噌汁を並べた前に窮屈に坐っている子供たちは冷たい水で洗ったあとの、ぼかぼかと赤い頬をしている。味噌汁のわきにはブツ切りの菜漬の皿が並び、漆くさい箸箱で一人前ずつ飯台

の一番手前に、観艦式のように行儀よく列をつくっている。子供等の手垢で汚れたカーテンのわきには、昨年救世軍士官学校を卒業した女教員あがりの少尉が引きつめた髪に銀縁眼鏡で坐り、次に二人の大尉の娘が坐り、隣りに大尉婦人が肥り肉のきめのあらい顔で、大尉の着席を待っている。収容人の女達は子供達のうしろの席に、子供等の頭の上を来る士官たちの視線をよけるように背を曲げて俯目がちに坐つてゐる。⁹⁶

方面委員の登場——もうひとつの地域的なつながり

大正期社会事業の特徴を一言にして表現するなら、中間層にあたる地域住民が実践の担い手として登場した時代だということ。明治期の慈善事業が地方改良事業の担い手であった篤農層（「地方中堅」）をはじめとする富裕層によるものであったこと、そして、行政機構の末端と結びつき、伝統的な社会的紐帯の中核を支えた人びとであった。その彼らを支えてやまなかった「中間階級は住民（市民）」として、これまでとは異なる性格と役割を負うことになった。社会事業に限っていえば、中堅の中間層は感化救済期から本期にかけて、それまでの慈善的個人主義を離れ、地域共同体に近づいた結果、地方行政から新たな政策課題を引き出すことに成功した。つまり、彼等は政治的支配の貫徹と国民の日常生活要求を結ぶための媒介的な役割を果たした。社会事業実践に際して、伝統的人倫関係にあえて棹さすことはせず、ひたすら具体的生活課題と結び合う。さて、こうした「共生」を条件に成り立つ道徳規範は、当然近代的なそれとは異なるものであり、近代的な制度改革を目指すものではなかった。ところが、こうした性格を変えざるを得ない社会的な事件が勃発した。世にいう米騒動である。国際情勢からみれば、第一次世界大戦の終結した大正七年七月、富山県魚津町の住民が米の県外移出に反対して暴動を起した。

その波はまたたく間に全国各地に拡がった。この頃、下級細民の生活難は「愈々倍々甚だしい」状況が広範化していた。当時、與謝野晶子は米の廉売状況に見られる特徴からここに弥縫的慈善、施与的な性格を読んでいるので、それを次に引用してみたい。

食糧騒動に促されて、内外米の廉売が全国に行はれて居るのは結構ですが、東京市のやうに旬日の後に白米賣商と妥協し、區役所や小學校で市の吏員が直接に賣つて居たのを廢めて、小賣商の道徳に信用のない私は、非常に面白くない事だと思ひます。「廉賣」といふ事は一種の施行です。米價の暴騰に對して困窮を感じて居る無産階級の目前の急を救済する為めの、一時的な慈善行為です。既に一時的性質のものとするれば、其れに適應する異常臨機の方法を取つて然るべきだと思ひます。不正行為の多い小賣商に、この慈善行為を託すべきで無いのは勿論、私は暑中休暇の期間にある男女の教師達を召集して、小學校で賣らせる事すら宜しくないと思つて居ます。⁽⁹⁸⁾

昭和戦前期の思想史的特徴を指して、吉田久一は「文学が社会事業問題を取り上げた稀有の時期であつた」という。本稿がたどつてきたこれまでの流れからいえば、言い過ぎのきらいはあるが、傾向としてなら、そう言うことも可能である。村嶋歸之（一八九一―一九六五）は奈良に生まれ、早稲田大学を卒業、大正四年から大阪毎日新聞の記者をしながら、日本労働総同盟友愛会を支援したり、三菱川崎造船所の労働争議で労働組合側の指導者となつた。そのかたわら労働劇団、女給同盟を結成するなど、独特の活動でも識られるようになった。ここに

紹介する「善き隣人——方面委員の足跡」もそうした試みのひとつで、方面委員の活動事例集である。天覧に供されて、ベスト・セラーになった。日常活動の断面を次の様に切りとっている。「方面委員は、昭和三年二月四日まず済生会病院、今宮診療所に頼んで、往診して貰った結果、久吉は入院を要すとの診断を受けたが、生憎、同病院に空いたベットがないため、やむを得ず翌六日、天王寺方面担当尾崎医院の往診療を受けさせ、爾来現在におよんでいるものである。同三月七日、長男庄吉の勤務先なる陸軍被服支廠でも、久吉の一家の窮乏を知り、同廠員が方面事務所へ来て、玉野常務（委員）と救助の方法を打合わせ、長男庄吉に増収の途を与ふることに⁽¹⁰⁾なった」。ところで、読者は豊田正子の作品「綴方教室」という、生活綴方運動から生まれた児童文学をご存知だろうか。昭和初期の東京郊外にあった細民街に暮し、ブリキ職人を父とする小学生が、貧しい日常生活を丹念に綴った日記文学である。後に映画化し、新劇で上演された。映画は監督を山本嘉次郎、主演は高峰秀子。作品のなかには次の様な一節がはさまっている。

「では、一つ、あなたに訊くがね、ホームインの小父さんと水野さんという人は同じなのか、それとも別の人かね。」「同じ人。」「そうか、で、ホームインというのは、何か喫茶店でもあるのか。」「ううん。」と首を振って、彼女は人差指で下唇を押えながら笑って次のようにいう。「あのね、失業した人だの、病気で困っている人だのを、世話してくれる人なの。」「ああ、そうか。それじゃ、ホームインではないよ。方面委員と
いうものだよ。」⁽¹¹⁾

この時、地域の方面委員活動が少女の眼に刻み込まれ、何気ない下町風景のなかに、社会福祉の実践場面が挿入された。当時、この作品を別の角度から分析した人物がいる。シナリオ作家、松岡二郎である。

正子さんの綴り方の一つに、「困ってゐても正月はまだよかったですでしたが、七日まではお金がちつとも入らなかったものだから、家はよくよく貧乏して了りました。七日すぎからは、父ちゃんの仕事が少ない上に、雨だの雪だの降ったものですから、なほ困ってしまつて、お米を買ふ金も失くしてしまひました。」と書いてある處で、我々の畑から言へば、かかる家庭は正にカード階級に属する人々である。しかるに、その家庭へは一度も方面委員も、市の吏員も見舞つて來ず、調査にも、救護にも來ないのである。或は實際は來たのかも知れないが、そのシナリオの中には一つも書かれていない。實際は、そのシナリオに書かれている通り一度も訪れていないのが本當なのではあるまいか。であるとすると、日本の社会事業、日本の方面事業といふものは、本當に未だく前途遼遠だと言ふ感をますます強く、濃厚に感ぜずにはをられない。

街なかの映画館で「綴り方教室」を観た観客の反応について、次の様な挿話が語られる。「丸の内で見たとときは、ここで丸の内の客がドツと笑つたのである。たとえば、かけ取りの苦勞も経験もないサラリーマンとか、一文無しになつても寝て待つてゐれば、親元から金を送つて貰へる學生とか、江東の長屋など、生れてから見たこともないにちがひない金利生活者とか、さういつた丸の内の客は大晦日の悲劇を見てワツハツハと笑つたのである。左様、かく言ふ私もいくらか笑つたのだが、ブリキ屋のおとっさんに扮した役者（徳川夢声）の狂乱的演技はいく

らか喜劇的でもあったのだ。その可笑しさに、浅草の客は決して笑はないのであった。笑はないどころか、見ると、私の前の、何人かの職人のおかみさんらしいのが、すすけた髪の毛が顔にかかるのもかまわず、肩掛けで眼を拭つてゐるのである。あちこちから啜り泣きが聞える」。これは高見順の「如何なる星の下に」(昭和十五年四月)に出てくる一節。このように、同じ映画でも見る人や、住む処によって、映像から受ける心理的反応は大きく異なることがある。綴り方教室の世界は、当時の言葉で言えばカード階級(被救護世帯) スレスレの生活を営んだ人びとにとって他人事ではなかった、そうした身につまされる日常が描かれている。ついでに言うところ、経済学者永野順三は「国民生活の分析」(一九三九年)のなかで、この作品を貧困記録のデータと読み変え、その生活構造を計量的にとらえ、住む地域、暮らす生活状態の違いによって、そこに暮す人びとの最低生活すら保障し得ていないことを証明し、日本の貧困の特殊性を突き出した。

自立・自助の涵養を説く

時代を明治初期に遡らせてみる。中村正直(一八三二—一八九二)は天保二年に江戸で生まれ、二四歳で幕府学問所教授方に出仕、学識に秀でていたため、三〇歳の若さで幕府儒者となり、その後は幕末の派遣留学生としてイギリスに渡り、維新後に帰国すると、スマイルスの「セルフ・ヘルプ」を邦訳、名を西国立志篇として出版した。そのなかで「我思フニ、邦人鋭意ニ勉強センニハ、今ヨリ後久シカラズシテ、邦人盡ク同等ニ安寧ヲ得、同等ノ福祉ヲ享ケ、同等ノ自由自立ノ權ヲ得ベキ地位ニ至ル」べきことを説いた。後に吉野作造は「福沢(諭吉)が明治の青年に智の世界を見せたと言うなら、敬宇(中村正直)は、正に徳の世界を見せた」と評した。「西国

立志篇」はやがて一〇〇万部を売り盡すベスト・セラーとなり、他にJ・ミルの「自由之理」(明治五年)も訳し、文明開化期に封建的イデオロギーを脱却するうえにおいて大きな思想的役割を果たした。その一方、彼は訓盲啞施設を興し、盲人救済に力を盡したことも世間に名が知られている。ここでは自助との関わりが問われている。次に、慈善論のなかで自助を強調したのは森鷗外(一八六二—一九二二)である。彼は山口の津和野藩医の家に生まれ、二〇歳で東京帝大医学部を卒業、その後軍医となるも明治一七年から三年間ドイツに留学、衛生医学を学ぶ。そのかたわら西洋の文学、芸術に親しんだ。帰国後は公務の合い間に「しがらみ草紙」を創刊、文学の革新に向けて評論活動を展開、やがて歴史小説に新境地を開いた。その鷗外にとっても、慈善事業は批判の対象であった。理由は「慈善(應某囑)」に記されているが、同じ頃「医者が病人の苦痛を病人とともに感じて療治をしようと思つたならば、所詮明かな診療をして明かな手段を盡すことは出来ない。医者は某病苦の側は餘所にして、平氣になって、自分の学び得た所を冷かに商量して行なはなければならぬ。其通りにどんな場合でも、人の苦を除く仕事に掛る時は、其同感の情をば抑えて、初めて其目的を達することが出来ます」と述べる。自然科学者であった鷗外の観察は、人間の心理をどこまでも客観的、病理的に扱うという態度を捨てなかつた。

さてこの慈善の行といふのはいかなるものでござりますか。これを實例に徴して見ませう。どなたかのお宅へ乞食が参ります。その乞食の餓ゑ凍へて居る苦を救ふために、これに食なり、錢なり、お遣りなされば、尋常それが慈善だと申します。かやうに申しますれば、慈善といふのはまことに容易なもので、別に深く思索して見る程の事もござりませぬ。併し乞食が二人來る、三人來ると、段々殖えて参りましたなら、それに

一々お遣りになれませうか。^(四)

自立、自助の精神からいえば、慈善は憐民養成を結論とするから反対だという。これと同じ立場から慈善を批判したのが高山樗牛であるが、その「所謂社会小説を論ずる」を見ると、自然淘汰、適者生存こそが自然の理であり、それが人類の進歩を促す重要な契機となっていることを説いた。

所謂社会問題と称するものを見れば、則ち如何。吾輩は毫も国家事業として、當に社会の劣者弱者を保護すべき何等の理由を見ざるのみならず、社会進化の必然なる結果として、国家的活動の勢力となる能はざるが如き、不能者に向て彼等に価値せざるの利益を惠与するは、国家全体の幸福の上に於て断然有害無益なりと思惟するものなり。(中略) 人情自然の発動に任じて、輒ち完全なる道德的生活を現ぜむこと、亦難しと謂ふべし。吾等は是点より、世の所謂慈善的行為を以て、適者なる調撰の下に於てするに非ざれば、決して世人の思惟するが如き道德上の価値あるものに非ざること信ず。^(五)

以上の論者は皆、貧困者の生活実態に寄り添うことなく、冷静で客観的な論理を背景に慈善を批判している。このことに比べるなら、次に紹介する露伴のそれは大分性格が異なる。が、しかし露伴も同じく、最終的には自立、自助こそ強調されるべき目標だという説に帰着する。そして、貧困者自身の克己勉励に向けた道義の強調を促している。

営利事業で無いことになると、愈々以て其事業本来の精神的眼目と被使用人が会得体認して呉れぬと、慈善事業が傲慢尊大な態度を以て取扱はれたり、公益事業が酷烈森嚴な執行振りで取扱はれたりするやうな奇現象を生じ、そして其の本来の精神眼目が、破毀されたり、反対の結果をさへ生ずる事になったりする。これ実に多く世に見るところの事で、官府の事業の世人に好感情を以て迎へられぬが如きも、比々皆これに坐するのである。⁽¹⁰⁾

明治から大正に時代が代わるなか、それぞれ時代毎に文学における慈善（社会事業）も登場、それが自助精神と結びつく大正期の例は、長谷川如是閑の場合である。その慈善は、得意とする社会評論の形をとることは無かったが、明治四二年三月から新聞に連載した小説「額の男」で、主人公に仮託、欧米の慈善、救済制度を批判する形をとって表明した。生涯、保守的な自由主義者として説を曲げることなく、評論活動を展開した如是閑の「断而不行」的モットーからすれば、救済課題に特化し、その実践を構想することなど、多分その思想的体質からみてすぐわなないものがあつた筈である。

あるものは哀訴し、嘲罵し、ひしめき合へり。されど中には風采端然として紳士らしき自尊心を失ないおらざるも見ゆ。その光景あたかも数珠繋ぎの囚人を見るがごとし。これらの人々はただ貧困という罪を犯せるのみにて、しかく屈辱の下に曝されておるなり。感じやすく、また尊厳すべき貧民も、一列にかかる惨憺たる待遇のもとに包括する墮落的勢力に関して、ことに指摘するの要なからん。かかる救済制度の一日も

早く排棄せらるべきは心ある者の一致するところなるも、現在においては、彼らをかくのごとき公然の恥辱のもとに曝すほか、何ら救済の方法も講ぜらるることなし。⁽¹⁰⁾

森戸辰男の筆禍事件（一九二〇年一月）は、クロポトキンの無政府主義思想に関連するものだが、有島武郎の場合は同じクロポトキンでも、ロシアを旅行中、偶たま訪問して対談を行ったことが「文壇」へのデビューを促すきっかけとなった。雑誌「新潮」に訪問記が載り、四年後の大正九年一月、讀賣新聞は両者の間にある思想的近似性が人びとの関心を呼んだことを伝える。自立、自助から社会連帯、相互扶助へと社会事業における思想的変化が起きていたことも、こうした流れに添った。有島によれば、「翁（クロポトキン）の無政府主義といふのは簡単に言へばコミュニティを小さなものにして、其の各々が共産の形をとるのです。翁の計算に従へば、そのコミュニティでは各人の生産労働に従事する時間は一日三時間でいいのです。さういふ強制労働の理想になると、何時も問題になるのは汚ない仕事、例へば糞尿の処理とか、活字を殖える労働とかは誰もするものが無からうといふ事ですが、クロポトキンはそれを科学の進歩に依頼してゐる⁽¹¹⁾」。有島は作品「惜しみなく愛は奪ふ」でもクロポトキンの相互扶助論を紹介しているが、それはもともとなる考えを直接本人から聴いたからである。

私が讀みたる氏の著作殊に「相互扶助論」に對する質問に答ふる為め、氏は私を伴ひて二階なるその書齋に登られ候。四壁は天井にとどくまで書物に蔽はれたる陰氣な廣間にて、その一端に据ゑられたる長椅子に私を坐らせ、自分も延々と座を占めて、さて諄々と説明の勞を取られ候。⁽¹²⁾

三 課題・分野別に見た援助の諸相

医療分野から

恩賜財団済生会という、施療を中心とした法人医療機関は、明治から大正、そして昭和へと続く社会福祉史にとって、さまざまなニーズの変化、拡大にともない、逐次形態を代えて医療福祉の分野を渡り歩き、今日に至る。主な顧客といえる細民の移動、課題の変容に応じて関わりを続けたが、大正九年二月、草間八十雄が踏査したところによると、総じて細民のニーズには応え切れていない実態が浮び上ってくる。まずはその経緯に触れてみよう。最初、済生会活動は市内に限り、「同会直営にて救済に従事するので、市内の貧民窟には巡回診療班が歩くか、或いは比較的によく救療方法が行渡るのであったが、一歩なり市外に出ると、其處は囑託にかかる救療方法を要する」⁽¹⁰⁾土地であり、ニーズ面からいえば、済生会活動のそれもほぼ同様である。吉屋信子の施療認識は世間と変わるわけではないが、描写力からいえば通俗小説を書かせたら彼女の右に出る者はいないと言われたとおり、その記述内容は分かりやすかった。つまり、一般市民の見る眼を代弁していると言つてよい。

赤羽橋近くの病院を一郎と品子が出た時は、もう相当な時間になっていた。ふたりとも、その前の道を歩きながら、しばらく黙っていた。……「品子さん、貴女^{あなた}はもうあすこへは、いらっしやらないでください。

——感染率が高いのだそうですから——」。「——気をつければ大丈夫でしょう、診察なさるお医者様も看護婦もうつらないですむんですもの。」「だが、貴女にこれ以上ご迷惑をおよぼしたくないのです」⁽¹¹⁾。

別のルートに眼を転じてみると、鈴木梅四郎が加藤時次郎から、実費診療所設立の相談を受けた時、目的としたのは、社会中流以下の貧困病人に対して、可能な限り低廉な費用で治療できるようにする施設の設立で、それは防貧事業としての役割を兼ねたものであった。鈴木が王子製紙専務に在職していた頃、社員、職工とその家族を、さらには近隣の住民も利用できる実費診療を実施して効果を上げた経験がヒントになっている。済生会とは別な形で、救済のための診療事業を立ち上げたのである。一九三三年四月井伏鱒二は作品「実費診療院」(新潮)で、「実費診療外科内科専門という小さな病院」に触れた診療風景を切り取っている。

「困るね、連れて行きたまへ。おいおい、このまま帰ってしまっっちゃ困る。」「どうもすみませんが、また明日……」さうして人びとは帰って行ってしまった様子であった。当直の医者は腹立ち紛れに看護婦にあたりちらして「こんな変てこな話があるものか？君がドアを開けてやったからいけないんだ。その罰に、診療室のあの死体に君は消毒液を撒いたきたまへ。」「先生、あたくしひとりでは不気味ですわ。」と看護婦はいったが、医者は医務室のドアを手荒く開けた。そして、ひとり看護婦を廊下に置き去りにした。その翌る日、病院では使ひを出して、死体を運んで来た人たちに死体を引き取るように頼んだが、たうたう引き取りに来る様子はなかった。仕様がなかったので病院では棺を注文したり、人夫を雇ったりして、死体を火葬場に運んで行った。看護婦のいふところによると「今日は院長さん、とても機嫌が悪くて、怒ってばかりあるんです」といふが、その理由をきいてみると、「あの人たち、昨日、死体を持って来たあの人たちは埋葬費がないので、つまりこの病院に棄てて行つたわけなんです。病院では、自腹をきって埋葬費を出してやらなくてはいけま

せん。院長さん、ぶうぶういつてますわ。」⁽¹²⁾

昭和一六年七月一〇日厚生省令、第三六号によつて保健婦規則が制定された。同規則第一条に、保健婦とは「疾病予防ノ指導、母性又ハ乳幼児ノ保健衛生指導、傷病者ノ療養補導其ノ他日常生活上必要ナル保健衛生指導業務」を行う者である、その業務は「保健衛生ニ関スル科学的専門知識ヲ必要トシ国民ノ日常生活ノ全般ニ亘リ相当広範圍ノ指導ヲ行フモノデアル」とされる。これ以前の昭和一二年四月、保健所法が公布され、地域を対象とした保健衛生上の在宅指導を行うため大綱を定めたが、この時保健所職員のなかに、保健婦がはじめて登場した。「保健政策と産業組合」(昭和一四年)をみると、「保健婦とは訪問看護婦、巡回看護婦、又は社会看護婦とも呼ばれている。この保健婦を置くことに依りてのみ、初めて凡ての保健事業が徹底し得る。特に現在の最も必要な母性及び児童保護は、彼女なくしては行われなかつても過言ではない」とあり、ときに「医者に代つて、応急の診療行為に近い程度の家庭看護を要する場合もある」⁽¹³⁾。かくして各地の保健婦による活動は、世間にもようやく知られるようになった。

そして、頃日、活動が文学作品の中に登場するものなれば当然であつた。例えば伊藤永之介の「保健婦」がそうしたひとつ。伊藤(一九〇三―一九五九)は小学校を卒業した後、日本銀行秋田支店で下働きをしながら上京する機会をうかがい、大正一三年に上京するとやまと新聞に就職、かたわら「文藝戦線」「文藝時代」等に投稿、やがて「梟」「鴉」「鶯」などを書き、東北人の暮らしをリアリズム風に描き、その中で地域保健の実態を記録している。ここに紹介する「保健婦」は産業組合病院で看護婦活動に従事する女性が主人公であるが、農村におけ

る生活改善運動の困難さにも言及している。

「ほら、女おなこ醫師が来た」自分の體よりも大きい又手に、浜に打ち寄せられた荒布あらめを担いできた子供たちが、石のごろごろした細い上り路を、正子のうしろから駆け抜けて行つた。そんな子供たちの言葉にも、単衣の上にこの土地柄には少し派手な青い上ツ張りを着て歩く正子に対して、大人たちの反発めいたものが匂つていた。

発表当時、雑誌「社会事業」に書評が載り、内容は概して好評であつた。「作者は、村人の無理解に悩む保健婦に温かい愛情を注ぎ、村の医者の言いやうもない行為に對し、激しい正義感から来る憎悪を投げつけてゐる。そして、この作品は一通りの成功を収め、保健婦の苦しい生活がしみじみと胸を打つ⁽¹¹⁾」という。さて、女医が活躍する別の話をひとつ。小川正子（一九〇二〜一九四三）は山梨県東山梨郡に生まれ、東京女子医学専門学校を卒業、市内の診療所、慈恵病院に勤めた後、昭和七年からハンセン病専門施設、国立療養所であつた長島愛生園に就職、以後は救癩事業一筋に働いた。しかし昭和一四年、結核に罹つて退職、四一歳の若さで逝く⁽¹²⁾た。清水威によると、「女学校時代、すでに内村鑑三全集を買つて読んでいた。古典文学、世界文学にいたるまで広く読んでいた⁽¹³⁾」から文学的な素養は充分にあつたと考えられる。その診療体験記「小島の春」は昭和一三年一月に出版されるや、瞬く間にベスト・セラーとなり、一五年七月東京発声が、豊田四郎の監督、夏川静江の主演で映画化、こちらもキネマ旬報のベスト・テン第一位となつた。しかし、後日内容上から問題が指摘されるようになる。牧

哲夫によると「この映画が、もつと癩の科学を描き、癩に対する社会的な『眼』を描いて、癩を浮び上がらせ、或いは療養所及び救癩事業を浮かび出させたならば、完全に近い物心両面の救癩映画ができたであらう」と述べ、医学者にして作家であつた木下杢太郎も「癩根絶の最上策は、其の科学的治療に在る。そして、其事は不可能では無い。『小島の春』をして早く此『感傷時代』の最終の記念作品たらしめなければならぬ」と指摘している。当時寄せられた批評をみると、おおよそ二つの系列に整理することができる。一つは昭和一四年一月、川端康成が「多分に文学的である」とみた、その書き方について、小林秀雄によれば「この種の孤独な事業に検診する女性、一般にどこか病的なものを持つてゐるものだが、この手記にはさういふものは少しも現れていない」と指摘する。他に、その濃厚な叙情性に井上まつ子は、「優れた詩人的要素の持ち主」であること、つまり自作の短歌がしばし挿入されており、それが「苦しみ、流した一人の女人の涙が限りなく尽きない愛となつて、救ライのために花開いた」という評価につなげていく。その一方「芸術性とは別に、患者の人間性を超越したところで、真の芸術が敵とするものに奉仕する役割を果たすことになつた」と批判したのは大竹章。さらに島比呂志は「正子の文学は、まさに感傷主義の極致と言つても過言ではない」とみて、該書が「病氣そのものに対する恐怖ではなく『病氣の隠喩』という実態のない幻想に対する恐怖」心を振りまいたと糾した。同じ主張は荒井英子にもあり、「罪人のメタファーでしか存在を許されない者の人權を、誰がどうやって取り戻すのだろうか」と問いかける。

長島つて島なの、そこに病氣の人が千二百人もいて一つの村を作つて住んでいるの、其處へ行つたら皆何の氣兼ねもなしに芝居や活動を見たり、浪花節も聞いたりして元氣で病氣の治療をすることが出来るの。ラ

ジオもあるのよ、そんな事が所詮この不幸な魂に對して何の慰めにならうと、誰かに言はれるかも知れぬけれど、私はさう言い續けずには居られなかった。「うちの様な者、もうどうなったって仕方ありませんなあ。こんな業病ですけん」と、この人の口を衝いて出るのは、寂しい、悲しい諦めの言葉許りであった。⁽¹²⁾

知的障害者の世界から

伊藤整は評論「近代日本における『愛』の虚偽」のなかで、慈善に関する興味深い指摘をおこなっている。「我々日本人は特に他者に害を及ぼさない状況をもって、心の平安を得る形と考えているようである。『仁』とか『慈悲』という考え方には、他者を自己のように愛するというよりは、他者を自己とは全く同じに愛し得ないが故に、憐みの気持ちをもって他者をいたわり、他者に対して本来自己が抱く冷酷さを緩和するという傾向が漂っている。だから私は、孔子の『己の欲せざるところを人に施すことなかれ』という言葉を、他者に対する東洋人の最も賢い触れ方であるように感ずる⁽¹³⁾」。日本人ははたして本当に他者を愛することができるのか、とりわけ自己を犠牲にしても愛を貫くことは可能なのだろうかという問いを投げかける。たしかに、こうした問いの前に立つと、誰も足がすくむ経験をすることだろう。だが、少数ではあっても、こうした問いかけに正面から立ち向かおうとした人間はいる。その中の一人、内村鑑三（一八六一～一九三〇）の場合はどうか。内村は明治一〇年、札幌農学校に入学するとキリスト教に出会い、W・S・クラークが残した「イエスを信ずる者の契約」に署名、翌年洗礼を受けてクリスチャンになった。卒業後は開拓使御用掛りとなって産業育成に関わったが、明治一七年に結婚するも、まもなく破婚、傷心の思いを抱いて渡米する。ペンシルヴァニア州のエルウィン知的障害者施設に看護

人として就職した。

当院ハ米國ニテモマレナル者ニシテ、實ニ盛大ヲ盡セシ者ニ御座候。役人ハ重ニ婦人ニテ、一同ノ深切言ハン方ナシ。皆々児ヲ愛シクレ、誠ニ痛ニ入り申候。給金ハ一六弗ナレ共、食事其他ハ少クモ三十弗ハカカリ候間、四、五十弗ノ給料ニ均シ。

内村の慈善思想はその後も生涯にわたって長く研鑽されつづけたが、二〇代の中頃、彼が考えたそれは自身の贖罪論と重ね合わせた、愛することの宗教的実存についてであった。

罪は私慾なり、私慾を離るるは罪を離るるなり、聖書は曰はずや、全からん事を慾はゞ往て爾の所有を售りて貧者に施せ、然らば天に財あらん（馬太一九章二節）、又、神なき父の前に潔くして、穢れなく事ふることは孤児と寡婦と其患難の中に眷顧、また自ら守りて世に汚れざる事なり（雅各一章二七節）、慈善は他人の爲めにのみならずるなり、完からんとするもの潔からん事を願ふものは、自らを慈善事業に投すべきなり。

宮澤賢治（一八九六―一九三三）は岩手県下の裕福な質屋に生まれ、盛岡高等農林学校に学んだ。大正一〇年に上京したが、まもなく妹トシの病氣を知り、看病のため帰郷。稗貫農学校の教諭となるかたわら、作家活動を始めた。しかし、その作品が世間に受け入れられることはほとんど無く、本人はもっぱら農事改良の実務に就いた。

やがて病床の人となるが、病床で綴ったものが、「雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ」の歌である。「雨ニモマケズ」は今日も巷間よく知られているが、作者はこうした歌の精神を体现した主人公をもとに小説を書いている。それはデクノボーと呼ばれた知的障害者で、名を度十という。彼は若くして逝くなるのだが、生涯に一度だけ、親にねだって杉の苗木七〇〇本を買ってもらう。それを、育たないと言われた痩せた土地に植林した。やがて丹精の結果、少しずつ育ち、度十の死後、人びとの心をなごませ、安らぎを与える大きな林に変貌した。工藤哲男によれば「度十は『デクノボウ』であった。『少し足りない』人間が『デクノボウ』でなくて何であろう。しかし、度十は『少し足りない』からこそ杉の育たないような土地に苗木を植えたのではなかったか。『少し足りない』からこそ、雨に『からだ中づぶぬれ』になりながら、立番を続けられたのではないか」と考える。知的障害者の「愚かさ」は、健常者のさかしまな「賢しこさ」を撃つ思想的根拠を提出しているとみれば、本当の賢しこさとは一体何か、それを宮澤は問うている。次に紹介するのは、障害児を生む原因としての工場公害（水俣病に通じる！）が昔もあつたということ。それは急激な近代化が生んだ負の遺産であることを読む者に教えてくれる。平澤計七（紫魂）（一八八九―一九二三）は新潟県小千谷に鍛冶職人を父として生まれた。尋常高等小学校を卒業、日本鉱業大宮工場に鉄工として就職、工場を転々と変わるなかで労働運動に携わり、かたわら小山内薫に師事して作品を発表した。やがて、鈴木文治等によって設立された友愛会に参加、各地に支部を結成し、オルガナイザーとしての腕を買われ本部書記になった。労働劇団を組織するなど、文芸と運動を結びつけようとしたが、その矢先関東大震災に遭遇、陸軍憲兵によって虐殺された。世に言う亀戸事件の犠牲者となった。ここに紹介する短編「赤毛の子」は「社会改良」（第二巻五号）に掲載されたが、書き出しは次のようになっている。「赤毛の子はふう、ちゃんと呼ばれて今

年五歳、其父親は床屋、母親は紡績の女工である。母親は其の子の目に映っている中に毎朝工場へ出勤した。夕暮れ時、溝板をがたがた鳴らして、泣き出し相な顔をして待つてゐると、急ぎ足で帰る母親は定つてふうちゃんを抱き上げて、幾度も幾度も頬ずりしながら家の中に入るを常としてゐた」とあり、貧しい労働者家族の日常生活が綴られる。だが、このふうちゃんは知的障害児なのだ。なぜそうなのか、理由を解き明かす文章が続く。紡績工場では化学原料を、安全性を配慮せずに使い、女工たちは毛髪が脱色し、いつしか赤毛になり、生まれてくる子供も障害児が少なくなかった。大正七年当時の紡績工場ではおしなべて過重労働と危険物質の通常使用がまかり通っていた。同じ紡績女工の過重労働については細井和喜蔵の「女工哀史」が著名だが、彼は公害問題には触れていない。

「お作さんはいい女だが、惜しいことには髪の毛が赤い」。私は我れ知らず斯様言った。「まあお世辞を被仰つて、」と、お作は笑つたが、「髪の毛はこんなになつて、本当に私口惜しいんですよ、若い時には斯様ぢやなかつたんですがね」。「若い時には赤くない、ぢや什麼して赤くなつたんだい、」と、私は聞かざるを得ない。「紡績の女工だもの当然ですわね」。「え」と、私は不思議な目を瞞つて、「それはまた什麼したわけだ」。「徹夜を平常しましたからね」。「……」。私ははッと思つて言葉も出なかつた。赤い髪、徹夜、紡績の女工。遺伝、赤毛の子、大きな顔、低能児、赤毛の子は、不幸な運命を其の母の職業からして得たのであつたのだ。そして其の父も母も、美しい衣類を其の愚かな子に着せることを、人間らしくすることだと思つていらしい。私は急いで二階の部屋に帰つて書物を見た。化学工場の事務員であつた私に、私の職が如何に関係し、そし

てそれが私の子供にいかにか影響するかわかりたい為めである。⁽⁸⁾

時は太平洋戦争の末期、防空演習に駆り出された人びとが、さかんに町内を走り廻って、空襲警報と叫んでいた頃、人前でゲタゲタ笑ったり、猛烈な勢いで意味の分からぬ訓示を垂れる「気違い」と、その妻になった「白痴」の女が登場する作品がある。それが坂口安吾の「白痴」（昭和二年六月）である。どこか近くに住み、ある日ころがり込んできたその女は、空襲のたびに主人公につきまとい、只、うろろと逃げまわるばかりであった。作者は戦争の無意味さをこうした人びとの行動を観察しながら、暗に語ろうとしたのだろうか、言論統制が厳しいさなか、障害者の滑稽な様子は周囲の関心をいっこう呼ばないばかりか、むしろ存在すら忘れられてしまう。平野謙によると、表面上は「白痴」であっても、そこには人間の真実が隠され、作者はそれを明らかにしようとしているというが、はたしてそれだけなのだろうか。

この隣人は気違ひだった。相当の資産があり、わざわざ露路のどん底を選んで家を建てたのも気違ひの心づかひで、泥棒乃至無用の者の侵入を極度に嫌った結果だらうと思はれる。なぜなら、露路のどん底に辿りつき、この家の門をくぐって見廻すけれども戸口といふものがないからで、見渡す限り格子のはまった窓ばかり、この家の玄関は、門と正反対の裏側にあつて、要するにいっぺんグルリと建物を廻った上でないと辿りつくことができない。無用の侵入者は匙を投げて引き下がる仕組みであり、乃至は玄関を探してうろつくうちに何者かの侵入を見破って警戒管制に入るといふ仕組みでもあつて、隣人は浮世の俗物どもを好んでい

ないのだ。⁽¹²⁾

身体障害者の世界から

それまでは描かれることのなかった障害者を正面に描え、文学作品とした最初期の例として、「戀目傳」は見逃し難い。幼少期に経験したやけどによって障害を顔面に残す傳吉が主人公である。その傳吉は人間関係のもつれから殺人を犯すのだが、そこに至る心理描写に優れたものがあり、元もと「傳吉は幼児より友達に除者のけにされ、物心つきては、人の我を侮り、軽しめ、尋常ならぬ言ひ罵るが口惜くしさに尾張町の洋風問屋へ奉公せし中も、身を粉にして立働き、主人の信用を得た」手堅く、善良な人物であった。作品の読み方について齋藤緑雨は、「畸形にして愚昧なる傳吉が浮薄、巧慧なる定二郎のおだてに乗りて、座を起して人を殺すに至る事の顛末は、人の同情を惹くに宜しき材にあらず、然るに作者の巧に慈愛深き傳吉が母を寫し出して、讀者をして傳吉が母のために憂ふる念を生じ、遂に傳吉の否運を冷視すること能はざるに至らしめたり。此の如き事は、作者の技倆を論ずる一面より看來れば、別に價値を加ふべきものに非ざらむも、讀者の興味を説く一面よりこれを評すれば、實に少からぬ人助けといふべし⁽¹³⁾」。次に、廢兵院という今日では死語に等しい障害者施設に触れてみたい。武者小路実篤は「その妹」を書いた動機について自序で言及し、それによると戦鬪で盲目となり、帰還した元兵士の訴えを聞くことが偶たまあったという。すなわち主人公「広次のモデルは別にないが、盲目の人の演説を聞いて感動したことがあるのが、一つのヒントになったのは事実だ。木下尚江の演説を聞きに行った時、盲目の人が飛び入り演説して、盲目の苦痛を痛切に訴へて満場の人に大きな感動を与えることがあった。その時のことは長く忘れ

ることが出来ず、之を書いたときも思ひ出した⁽¹¹⁾という。大正七年八月、「太陽」に、「廢兵院」を載せた須藤鐘一の場合は傷痍軍人を抱えた家族の苦勞を描写したものだ。廢兵院の内情と、そこに出入りする人びとに注目し、「□伍長は可哀想だな。今、あれの家族の家に一寸寄つて見たが、近頃物価が高騰して、三度の食事も碌に喰えないといふ状態なんだ。」それは此院の裏手でバテンレースの内職か何かやつてる家でせう。「さうさ、××⁽¹²⁾は此院で一生懸命に働いた内職賃を皆んなその家族の生活費につき込んでしまふのだが、それだつて高は知れているから、妻君は子供を連れて貫ひに出なくちゃ遣り切れんといふ譯さ。」須藤は、年に春夏の二回催される慰勞会の様子、余興や仮装行列といった生活の細部に触れる。同じく廢兵が登場する作品としては鈴木三重吉の「赤い鳥」(大正一五年一二月)に載つた「廢兵さんの葉賣り」という詩があり、市井街上に登場する姿を歌つた。

オルガンひきひき賣りに来た 廢兵の葉賣り 秋の買ったは虫下し しい子だ、どこの子と言ひながら
私の頭をなでました 遠くつづいた村の道 お一二の葉の功能は お一二ブウブ オルガンひきひき行きま
した 廢兵さんの葉賣り⁽¹³⁾

プロレタリア作家金子洋文(一八九四―一九八五)の描く廢兵は、世間の冷やかな眼なごしにさらされながら途行く人に寄付を請い求める、その心裡に踏み込んでいる。金子は秋田県土崎に生まれ、秋田工業学校を出た後、上京して日本評論社に勤めながら小牧近江、今野賢三等と「種蒔く人」を創刊、やがて『文芸戦線』を経て労農芸術家連盟に加わった。ここに紹介する「廢兵をのせた赤電車」は、夜間、数少ない乗客のいる車内にひ

とりの廢兵が座っていた。と、赤坂見附に電車が着くやいなや、泥酔した労働者がころがりこんでくる。運転手に絡んで軽くあしらわれたこの酔客は、今度は廢兵に向かって悪態をつき始め、「何故戦死しなかったんだ」、「泣け、手前(てめえ)のようなものは、泣く、泣く芝居でもしなくちゃ生きていけねいんだ。さあ泣けッ、こ、声を出して泣いて見ろ」と罵る。

彼には両脚がなかった。どれも膝の関節から下部が全く削りとられてなかった。彼は何^どうして街路を歩くことができるのだらう。いやそれより、こんな寒い夜おそく、一体何処へ行くのだらう。夜は汚れきった茶色の詰襟の服を身につけていた。彼も多くの廢兵のように石鹼か齒磨き粉を賣って歩きまわっていたのだらう。鞆に『不幸な廢兵に同情してください』と緑色のペンキで書いてあった。^(註)

島木健作が昭和一六年一〇月に発表した施設訪問ルポルタージュによると、「傷痍軍人東京職業再教育所」もまた廢兵と呼ばれた、戦場で傷ついた人びとを対象とする社会復帰施設である。島木はこの他にも失明傷痍軍人寮に向いてその見聞を書いた。昭和一二年一一月内務省は臨時軍事援護部を設置、軍事扶助法を中心とした関係諸法を担当する軍事扶助課、傷兵院法を扱う傷兵保護課、入営者職業保護法を扱う労務調査課の三課を設置、ついで一三年一月に厚生省が新設されると、これらを全て同省の所轄とし、さらに日中戦争の拡大とともに傷病兵の数が急増したため、一三年四月傷兵保護院を設置した。このように世相は戦争と障害者福祉を益ます切り離せない関係にしていく。次に、視覚障害者の抱える問題に移ろう。広辞苑によれば「こぜ(瞽女)」とは三味線

を弾き、唄を歌うなどして錢を乞う「めくら」の女のこと。すでに中世庶民生活史に登場するから、その存在は長い来歴を持っている。ところが明治以後、文学に登場するのは遅く、例えば三木露風（一八八九～一九六四）が詩壇にデビューした際の詩集「廢園」のなかによりやく出てくる。露風は相馬御風、野口雨情と早稲田詩社を結成した辺りから、世間に注目されるきっかけを得て、やがて北原白秋と並ぶ一世を風靡する詩人になった。叙情詩から象徴詩に移り、最後は宗教詩の世界に落ち着いた。

あはれ見る 街の暮れがた とどろける悲しき響 騒じ立つ色のもつれを 言ひたる空をひたして ふり
みだす雨の垂布 病める音は地に染み入る 灰色な暮るる薄闇 そのなかに暗き歌こゑ 瞽女かたり浮び連
弾く 連弾や、街の暮れがた 底深く沈み流るる 大川の籠うる夢路に

長塚節の「太十とその犬」にもごぜが登場、それは故郷、鬼怒川辺りでのこと。瞽女爺さんというあだ名を持つ人物、横関太十をして瞽女の風俗、生態を語らせた。旅芸人として彼女らが世間からどのように見られたか、それが分かるように書かれている。

死んだ網膜にも灯の光がはっきりと感ずるらしい。一人の瞽女が立ったと思うと一歩でぎっしり詰まった聞き手につつかへる。瞽女はどこまでもあぶなげに、両方の手を先へ出して足の底で探るようにして、人々の間を抜けやうとする。悪戯な聞き手はわざと動かないで彼の前を塞ごうとする。憫な聲を出して揶揄しや

うとする。かういふ果敢ない態度が太十の心を惹いた。大勢はまだ暫くがやがやとして居たが一人の事から白紙で包んだが纏頭が其のかしらの婆さんの手に移された。^(註)

言語障害者のことを唾と呼んで作品の中に登場させた作品も少くない。障害ゆえに家族から幼くして見放され、またしつけや教育も受けることなく育った男が登場する。彼は勝手に山やを駈けめぐって暮らすうちに、地域の共同体からも排斥されるようになった。

彼は唾である。頭髮を長くして、素跣で山を駆け廻っている。日は緑葉の上に落ちて、一片一片が銀のように輝く。其の大きな木を見上げて、彼は叫ぐことも出来なかつた。両足に力を入れて、瓜立って、空中に輝く。この体重を怯えるが如く、羨むが如く眺めて拳で躍る胸を叩いて両手を高く差し上げるばかり、強い光が針のようにさしくる木下にたった大理石の彫像のように、身動きひとつしない。このまま光を浴びて白い石に化してしまうのではないかと思われた。^(註)

鳥崎藤村の父、正樹は座敷牢に閉じ込められたままその生涯を終えている。重度の精神疾患を病んでいたからである。その時代、自傷他害の虞れがあれば、大半は私宅監置という処遇（処置）に添って扱われ、中流以上の家庭であれば座敷牢に閉じ込め、外部との関係を絶つのが通例であつた。あるいは癲狂院と呼ばれた精神病院に強制入院させられることもあり、甚しい場合は鎖で身体を繋いだり、ひもで拘束することにより心身の自由を奪つ

たものである。

青い深い竹やぶがある。竹やぶを背にして古い米倉がある。木小屋がある。その木小屋の一部には造りつけた座敷牢の格子がある。そこがおげんの父でも、師匠でもあった人の晩年を過ごしたところだ。おげんは小山の家のほうから、発狂した父を見舞いに行つたことがある。父は座敷牢にはいつていても、何か書いてみたいと言つて、紙と筆を取り寄せて、そんなになつても物を書くことを忘れなかつた。⁽¹⁸⁾

保育と教育のあいだ

貧児教育の必要を訴えた松原岩五郎の文章がある。ひとの一生は「襁褓むつぎの上より運命は定まれり」とはいうものの、放置しておけば自然に育つというものではない。「貧童の墮落」(国民新聞、明治二十九年五月一七日)を見ると、「都下一般の品位を墮す」地域として、浅草や芝の名をあげたうえで、貧民街に育つ児童が様々な悪事に手を染める様相を記し、彼らは法事中の寺院玄関から履物を盗むことや、店先から飲食物を窃取、やがて「真成の盜群」に入つていくプロセスに触れた。児童が偶たま奥山公園の掛茶屋でおとなびた飲食を済ませると一円札を出して勘定を払う様子を見て、「掏児すりの一人にて悪童を集ひて酒食を振蒔たる」その姿に「人氣じんきの悪しき土地に生育せる児童の前途」を考え、憂いを抱きつつ、世間に警告を投げかける。松原によれば、そうした子供の極く一部が施設に収容され、大半は近隣社会の片隅や裏で隠れるように暮らしている。警察は時に取り締まるだけの存在である。

貧兒を惡風惡俗の地に放ち、飼するの弊害は觀面社會の文化に影響して其害毒の及ぶところ、終に測るべからざるものあり。是を救済する方法如何、世には慈善者あり、亦仁人あり、金錢を投じて貧者の欠乏を救ふ者少なからず。世には刑罰の執行者あり、亦獄吏あり、犯人を捉へて其所業を懲戒するものあり。慈善懲戒元より社會改良の一機関に相違なきも、苟しくも基本を清めずして唯末の濁りたるのみ穿鑿するは方便の妙を得たるものにあらず。⁽⁹⁾

正宗白鳥は明治三六年に読売新聞記者となつて以後、文芸、美術、演劇評に健筆を振つたが、その文章は多くが辛辣であり、暴露的であつたがため、かえつて世間の評判を呼び、そうした書き方は小説にも及んで、「何処へ」、「玉突屋」、「五月幟」にはそうした傾向が認められる。ここから自然主義作家としての白鳥が生まれるまでは半歩の違いである。その彼が「慈善事業」と題する作品を書いて、岡山孤兒院の創設者石井十次の人物像に迫ろうとしたことがある。

今から三十餘年前、私が上京する前の年、半年ばかり岡山市の郊外に下宿してゐて、宣教師の経営していたB学院へ通学しながら、傍ら病院通ひをしてゐた。(石井十次、引用者)氏に接したのもその自分で、I氏は当時の私の目からは餘程の年長者に見えてはゐたが、實際は三十を多く過ぎてはゐなかつたのである。色の白い、面長な體格のガツシリしてゐた男で、いつも丈の短い紺緋を着て細い兵児帯を巻きつけていた。⁽¹⁰⁾

石井が孤児教育会の看板を掲げて三年が経ち、しかし未だ世間には知られない頃、八木和一郎も「岡山孤児院を訪ふの記」を書いた。そのなかでこの事業は「我國未聞の美拳」であるという評価を与えている。どちらかといえば美文調で、技巧的な表現に偏している。次に紹介するのは岡山孤児院が解散する、その三年前に徳富蘇峰が著した「烟露勝遊記」の一節であるが、石井逝きした後、宮崎県茶臼原殖民地における生活が細かく綴られる。

四月二九日。夢清く、眼快し。起床喇叭の口劉々たる音は、五時前に孤児院村の家から家に鳴き渡れり。かくて暁鶏の聲あり。やがて暁鐘の朝靄を破りて響くあり。而して小雨は降り出せり。予等は雨を冒して石井夫人、及び小野田君等其他幹部の諸子と、女児寄宿舎や、男児寄宿舎や其他を見舞ひぬ。概して客舎の清潔にして、掃除の行き届きたるは嘉す可し。(中略)今や二百町内外の地面に、開拓せられたる水田十五町、畠六十町、孤児院出身者の獨立して生計を営むもの、及び職員等の人家、此の原中に四十戸内外あり。宛然たる一個の孤児院村也。⁽⁴⁾

明治末期のことだが、大隈重信が「孤児教養の社会的効果」に触れ、それが必要とされる理由を述べたことがあった。大隈は個人の善意によるのでなく、国家や社会の責任においてことがなされるべきだと主張、「孤児、貧児について社会國家の上から考へると、憐むといふよりも寧ろ恐るべきものがある。彼の憐れむべき處の孤児貧児と雖も、生まれたからには生きなくてはならぬ。生きんが為にはどんな悪いことでも仕兼ねない。世の所謂不良少年といふものは、多くはこれら孤児貧児から出るものであって、これらの不良少年が漸々増加し、漸々に成長

していく将来を思ひ浮かべて見ると、実に社會國家のために寒心すべきではないか⁽¹⁴⁾。孤児、貧児のすべてが不良化するわけではないとしても、不良少年の大半はこうした環境下に置かれたために出現、かつ増加しつつあることを認めるなら、これは国家や社会としても責任を度外視することはできない。このような考えに立つて貧児を教育対象とする慈善事業を始めた者のなかに、森島峰、野口幽香によって設立された二葉幼稚園のあったことはよく知られている。実質的な経営責任を担った野口（一八六六—一九五〇）は兵庫姫路に生まれ、上京してから東京女子高等師範学校を卒業、華族女学校附属幼稚園に勤務、偶たま職場に通う道すがら、路上にたむろする貧児を見て、彼らのための幼稚園設立を思い立ち、明治三三年一月、東京市麹町区六番町に開設、近くに住んだ巖谷小波は「幼稚園も沢山ありますが、かく言ふ風のは日本に初度^{はじめて}で、両女史の熱心の甲斐あり、頗る結果が好いさうです⁽¹⁵⁾」と言う。婦女新聞に載った記事によれば「憐れむべき貧民の子が、貴族の子女と同様の教育を受けている」様子は確かに珍しく、また他に類例がなかった。そこには「切り紙も恩物も、相応には備へていないから、一銭に五枚位の絵紙や古郵便切手を代用して居るが、教育のありがたさは格別で、僅か一ヶ月半許の間に、子供の言葉づかひや行儀作法も改まり、結果が非常によいとのことである。成績優良品は此間のフレールベル会に陳列されてあったが、他の貴族的の製品と相對して、その経済的に平民的な点が大に來会者の注意を惹いた様子であった⁽¹⁶⁾」ことが記載され、当時としてはなんとも珍しい風景であった。髮結、車夫、日傭稼ぎの家では子女の教育など思いつきもしなかった頃のこと。後に、貧民の集住地であった四谷区鮫ヶ橋に移って本格的な貧児教育を行なうが、こちらも、その活動は世間の注目するところとなり、新聞に紹介されることなど幾度もあった。「十二番地の片隅に、いと小さく二葉幼稚園といふ門札を掲げた一構がある。中には幼児の遊び戯るる声が充ちて、

折々洋琴の響おもしろく、菜の葉に飽いたら桜にとまれ」とやさしいこゑも聞こえる。これぞ本年新設の慈善的貧民幼稚園⁽¹⁶⁾である。

自分が此の幼稚園の門を潜^{くぐ}つたのは、當日の朝の九時半であった。祝會は十時から始まるとの事で、自分は單に此所に集まつて居る幼稚者の耳に、一のお伽話を話す役目を負つて居るのである。只見る狭き庭園^{には}に、多くの幼稚者と其の母とは集まつて居る。がやがやと然ながら村のお祭にでも來た様な氣になつて、心から楽しく喜ばしく、薄明かりのする太陽の光線^{ひかり}の下に語り合ふて居る。子を背負つて居るものもある。赤児も胸を表斯^{あらわ}に抱えて乳を吞まして居るものもある。六十位の年恰好の目脂^{めやに}を溜めた老婆さんが、自分の孫が、向ふの隅で小さい友達と、何か語り合つて居るのを楽しく瞞^{みま}つて居るものもある⁽¹⁶⁾。

次に、大正期のルポルタージュ文学からひとつ。それは日本女子大学桜楓会が経営する託児所で、市内巢鴨宮下町で児童保護活動を展開した。住野茂子が記した文章で気づくことは、まずもつて保育の日常実践に徹した姿である。此の頃の都会女性にとつて、それが下層細民でなくとも、託児機能は是非必要であつた。労働事情の變化は保育を広く専門家の手に委ねざるを得なくした。この傾向は昭和期に入るとますます強くなり、文学者の関心と呼ぶ世界となつていく。頃日、平塚らいてふは「社會事業に働く若き友へ」と題した往復書簡を雑誌に載せている。それは都会から農村の僻地に移り、困難な状況下で働く保姆に寄せた激励、総じて人生訓といった性格のもの。

相変わらず社會局で御働きの事とはかり思つて居りましたら、思ひもよらぬ處からの御便たたよりで驚きました。しかし、何處へいらっしやうと、どこでお働きのならうと同じことです。殊にあなたが虚偽の多い社會がたまらなくいやになったと仰有つて、東京を捨てて人のあまり好まぬそんな僻地にご自分からすすんで赴かれたと伺つては、しかもそこが蕃人(マダ)の幼児の保護、教育といふことに使命を感じ、今は感謝と幸福にひたつてゐると伺つては、あなたの若々しい純な、そして眞實なお心をうれしく、力強く感じずにはゐられません。併しあなたはすぐそのあとから、「でもこれが私の本當の幸福なのでせうか。これが圓滿な幸福と言へるのでせうか。この幸福は永續的なものでせうか」と、あなた御自身を御自身で疑いながら私におたづねになりました。

少年教護の世界から

岸田國士が昭和三年九月「新潮」に発表した作品を「感化院の太鼓」という。あらずじは會話で綴られているので、全体に戯曲風に出てゐる。入所する児童とその親に向かつて、院長は「なに、心配はなさらんでよろしい。御覽の通り、普通の学校です。それと同時に倶楽部です」と紹介する。この作品を劇化し、初演したのは新築地劇団で、描き方は良家の子弟として生まれたものの、悪癖が止まらない少年と、それを取り巻く家族や関係者の間で交わされる交流や衝突を扱うが、作品に対する社會事業関係者の劇評から、この問題を考えてみよう。「社會事業が、その対象となるものを扱ふ様な態度で書かれた演劇は、餘程特殊な事情の下に置かれた場合でない限り、望み得ないことではないか、と言ふことです。作家はやはり作家の眼で、諸種の現象を眺める事が正しく、

そして然うして作り出されたもののみが、本当の演劇であるとするならば、社会事業家としては物足りない。或いはそれ以上に不満なことが多いのも、仕方のないことではないかと考えてみます⁽¹⁸⁾。

〔海老子〕（麦太郎の腕を捕へて） 喫驚させちゃ、いや……昨夜あんなに約束したでせう。母さんは決してお前の為めにならないことはしないからって……。院長さんにもよくお話を置いて置いたんだからね。感化院っていうと人聞きは悪いけれど、あそこは他と違って決して窮屈な教育方法はないんだって、さう言ったでせう……そこんところは、今までの中学なんかより余っぽど自由なんですよ。絵の好きなものには絵ばかり習わせるし、体操の好きなものには体操ばかりさせるんだしね。お前のやうになんにもしたがない子には、なんもさせずに置いてくださるだらう⁽¹⁹⁾。

村山知義（一九〇一～一九七七）は、劇作、演出、舞台美術をこなす多彩な文学者である。東京帝大文学部を中退、ドイツに留学して帰国すると前衛美術団体「マヴォ」を設立した。大正一四年河原崎長十郎らと心座を結成、やがて前進座となり、プロレタリア演劇運動の推進役となった。その間二度の検挙、入獄の経験をしている。ここに紹介する戯曲は昭和六年七月に発表したものであるが、創作事情に言及するなら、当時の少年法によれば、少年審判所には九種の保護処分があり、ここで処分対象となつて入所したところは、宗教的保護団体で、「去年某警察署に二ヶ月ばかり御厄介になつていた間に、某少年保護所から初めて逃げて捕まつた少年一人、感化院から六度目に逃げ出して、又もやつかまり、今度は少年刑務所に送らねばならない少年一人と、感化院から初めて逃

げ出して又もや捕まった少年達三人から「くわしく聞いた内情と、某保護団体の報告書」をもとにストーリーを編んだ。舞台は「東京近郊の不良少年保護所、大悲学院」とあるが、都下調布市に現存する六踏園調布学園がモデルである。当時、園内ではちよつとした騒動があり、マス・メディアも注目していたから、公演は世間の反響を呼んだ。留岡幸助が経営していた少年教護施設に務めた鶴見欣次郎によれば、「ちつとも非難する所なんぞありやしない」。感化院の先生だって、生徒だって、みんな彼の通りのものさしと語る。その鶴見が勤めたことのある少年教護施設に、後になって東洋のバレンティノーと呼ばれたオペラ歌手、藤原義江が入ってきた。施設の名は東京家庭学校である。作家古川薫によると母親が引き取りを拒絶したので、「瓜生寅は義江を外巢鴨の『家庭学校』に入れた。ここで二年間、厳格な校風に押し込まれて「とにかく卒業することはできた」（漂泊者のアリア）。創設者がこの施設から岐れ、遠く北海道遠軽に社名淵分校を開設（大正三年八月）したところ、ここを訪れる人達は少なくなかった。初期の頃、大町桂月は層雲峡や佐呂間湖を旅行した、その足で訪れ、短歌を残している。

あなとうと 平和の山に湧き出でる 人の命を 救う真清水

礼拝の 堂にとどかぬ 夏木立 朽木焚く子供 四五人百合の花

とりたての 野菜の味や 樹下の庵 師の家と宿舎の間 花壇哉

徳富蘇峰は同じ同志社出身の経営者、留岡幸助とは古い知己であったから、分校には幾度も足を運んでいる。

何度目かの分校訪問と同じ頃、つまり大正一一年に藤森成吉（一八九二～一八七七）が訪れ、ここを題材にした作品を数篇書いている。例えば大正一一年一〇月発表の「少年の群れ」は彼が日本社会主義同盟に参加したばかりの頃で、品川義人が家族長（職員）を勤める掬泉寮に同宿して見聞したことを題材とした。二年後の一三年八月、今度は一家をあげて来訪、分校生徒と四日間生活を共にしている。この時の体験を生かしたものが「北見」で、とりわけ職員と児童達との心温まる交流が、詳しく触れられる。

感化院附属の北海道の農場へやってくる前、彼は二、三年東京の本院にいた。その前は父親の手もとにいたが、貧乏暮らしの中で継母から虐待されて、小さい時から温かい心を知らずに育った。一六の齡、農場へよこされると、太田という先生の預かっている寮へ入れられた。寮のなかには先生の家族のほか、一二、三人の子供が一緒にくらしていた。それらは、みんな世間で持てあまされた所謂不良少年だった。初め彼はどうしても太田先生に親しめなかった。虐げられて大きくなった彼は、いったいすべての大人に対して怖れを持つていたが、先生は見るから背の高い、毎日の農場労働でピカピカと、どこもかしこも鳶色に光った眉や髭の濃い、眼の鋭い人だった。脚は毛だらけで、跣足^{はだし}で平気で熊のように熊笹の中を歩いた。力もすばらしく、重い箱を軽々と片手でさげたり、太い木を何の雑作もなくへし折ったりした。^(四)

真船豊（一九〇二～一九七七）も戯曲「太陽の子」（昭和二年二月）で、非行少年のなかにきらりと光る人間性を拾い出そうとしたが、正宗白鳥は何ともバタ臭い作品だと言い、壺井栄は「愛に飢えた少年の姿を良く捉え

ている」という。真船自身は学生時代、人生観で煩悶していた頃、偶たま北海道の北見で牧夫生活をし、家庭学校に住み込み、少年達と寝食を共にしている。真船を知る職員の上野一雄は、「主として教師たちの生活を描いたもので、背景にいる少年達も、いかにもそれらしく書かれて」⁽¹⁵⁾ いることに理解を示した。ところが、この作品は東京發聲によって映画化し、世間の注目を浴びるや、施設職員からは批判の声があがった。つまり「世間に好評を拍した東京發聲の映画『太陽の子』は北海道の少年救護院を背景としたものであるが、その中の子供の取り扱ひがあまりにも古い、悪い型の觀念に依つてゐるといふので（之は原作がそもそもそうなのである）家庭学校の某氏は『人道』誌上で大いに憤慨してゐた」という。そして「人道」誌は次の様な、社会事業に対する世間の誤解を助長する書き方に疑問を投げかけた。⁽¹⁶⁾

映画「太陽の子」の感化院内における收容兒童の生活は餘りにも態^{むぎ}とらしく荒^{すま}み果て、一辺当過ぎる。現在の少年救護院とは比較にならず、相違が甚だしい。少年救護院に於ける生活環境は家庭団樂の雰囲氣に包まれた教育理想の修道院生活であり、健康教育法の缺陷を補ふ理想の学園である。この映画により一般觀衆は少年救護院に対する認識を誤ることである。⁽¹⁶⁾

最後に紹介する熊野隆治、豊島與志雄著「みかえりの塔」は社会事業関係者の著した作品としては、めずらしいベスト・セラーである。昭和一六年一月に松竹キネマで映画化、監督は清水宏、主演は笠智衆により、こちらもヒットした。作品を批評した天達忠雄によると作者は「少年救護法による特殊兒童の救護院たる大阪府立修

徳学院の院長である」⁽⁶⁾。そして、熊野の記録を豊島與志雄が編集した。作中、施設概要の紹介されるくだりを引用してみたい。「学院内處々に平屋建の家屋散在し、多くは夫婦者これを主宰し、子供、女中などあれば同居す。夫は教師にして、妻は保母、あるいは保母にして教師を兼ねるものあり。中に二、三、保母単独の家あり。この各々を一家庭とする。院生は男女別々に、各家庭に配分せられ、その広間にて共同生活をなす。本館の学校的教育と家庭の家族的訓育とが渾然融合することを建前とす。各家庭の院生十二名を定員とすれど、超過すること多し」⁽⁷⁾。刊行後、村岡花子が東京日日新聞に寄せた書評を見ると、「感激的気分やひどく涙っぽい感傷から離れて、作爲のない眞實を叙述することに集中されている」ことは、極めて望ましい記述と好評である。

老いを見つめる

番外として老人問題、あるいは老人福祉に関わる文学作品を二、三紹介しておこう。大正一〇年九月発売の「慈善」と題する久保田万太郎の作品を見ると、そこから「大寺学校」「市井人」という、市井ものゝに共通した人生観や世間智を窺うことができる。なかから小品をひとつ。浅草雷門の脇で朝ごとに街頭を行き交う人びとを相手に新聞を売る「売り子」たちの姿を追っていく。と、そこで一人の年老いた男性と売子に注目する。そして、慈善心を起して、この老人をひいきにしてやろうと思う。ところが二人の間で代金が一銭足りない、いやそうじゃないという些細な押し問答から主人公の心に生じた慈善、同情といった気持ちさがさつと消えていく、その心理を追った作品であるが、善意などというものが、いかに頼りないものであるか、それを教えてくれるが、その表現がいかに万太郎らしい。

「これじゃ足りません。」そのとしよりの賣子は、わたしの目のまへに、に膠もなく手を出していった。「そんなことはないだらう。」わたしはさういつてその顔を見た。「いいえ、足りません。——一銭足りません。」かれはけはしい目つきでわたしをみかへした。「よくみてくれ、——その小さいのは今度出来た銅貨だから。」わたしがさういふと、しばらく、その自分の手のうへをみてゐたが、わたしのいふのに間ちがひのないことが分るとそのままうしろを向いて、知らないかほで、かまはず鈴をならしはじめた。その日ぎりで、わたしは再びそのとしよりを相手にしなかった。⁽⁸⁾

井伏鱒二（一八九八—一九九三）は早稲田大学に在学中から小説を書きはじめ、やがて中退して作家活動に入った。「山椒魚」をはじめとする短編小説に優れた作品が多い。ここに紹介する「へんろう宿」もそういう短編のひとつである。この作品が生まれるきっかけに触れた本人は「田中貢太郎さんが病に倒れ、お見舞いに四国に出かけた時、室戸岬に行くバスの中から、二階建ての小さな宿屋にへんろう宿、一泊三十五銭と書いてあるのを見て、空想で書いてみたもので、むろん泊まったわけではない」。へんろう宿の女たちは親も知らず、小さい時に置き去りにされ、嫁がずに、後家のならいゝを受け入れ、やがて来る死を静かに待つ老人たちの暮らしぶりを描いた。ここに展開される世界には、四国巡礼にまつわって伝わる寓話性があり、それはこの土地の福祉文化に結びついてもいる。巡礼の途次、様々な理由から子を置き去りにするケースは少なくなかった。で、その子供たちを引き取って育てることが大師信仰と結びつき、やがて土地になじんでいった。

気が付いてみると蒲団からすこし乗り出して、隣の部屋の話し聲で目をさましたのであった。きつと三番目の五十くらいの婆さんが酒の相手をしながら話し込んでゐたものだろう。「うんちゃ違ひます。みんなあが、ようそれを間違ふけれど、一番年上のお婆さんがオカネ婆さん、二番目がオギン婆さん、わたしはオクラ婆さんといひます。三人とも嬰児あかこのときに、この宿に泊った客が棄てて行つたがです。いうたら棄子まてこですらあ。」……「オカネ婆さんは誰の子やね。やつぱり、へんろうか。」「それやわかりませんよ。オカネ婆さんのその前ををつた婆さんも、やつぱりここな宿に泊つたお客の棄てて行つた嬰児が、ここで年をとつてお婆さんになりました。」

児玉花外（一八七四～一九四三）は京都に生まれ、学業は東京専門学校をはじめ、いくつか通つたがいずれも中退で終っている。花外の名が近代文学に登場するのは、社会主義を詩作の形で発表した「社会主義詩集」（明治三六年八月）である。やがて社会主義陣営の代表的詩人とみなされるようになり、一時は華やかな時もあったが、生活の乱れからやがて貧窮の身となり、あわせて歩行も困難な独居老人となつた。結局、身寄りがなく東京市養育院に收容され、施療患者として公的な救済を受ける身になつた。時事新報が報じ、また落魄の詩人「花外翁」熱血の一献に名残り」を伝えたのは讀賣新聞であつた。院内では他の收容者と同じように暮し、白衣を着て介護援助を受けた。やがて戦時体制が厳しくなると、救護施設はいずれも経営内容が悪化、食糧事情も劣悪となるなか、昭和一八年九月栄養失調により逝去した。

むすびに代えて

本稿は「はじめに」述べたとおり、明治以後近代化が進むなかにおいて、社会福祉の歴史の変遷のあとを、通常の歴史とはちよつと違う角度からまとめてみたものである。まず、素材となる資料を文学作品に限り、その切り口を社会関係や内面描写を問うにあたって、マックス・ヴェーバーのいうエートスをここからとり出してみたいと願いつつ、ひとつの心性史にまとめようと思った。その際、実践の主体、対象、方法に分類し、それぞれの特徴をとりだす通常の研究方法はとらず、生活の「場」を設定し（大きくは都市と農村）、そこで見られた福祉の展開の個別「場面」を切り取ることに重点を置いた。別な言い方をすれば、福祉の風景を描いてみたいということである。まず、明治政府が実施した政策対応（きわめて貧弱なものであったが、確かに存在した）を「ウエからシタ」へ向かう流れと捉え、その背後にある思想的、宗教的な「人倫」の尊重が、どのように生活の場を下りて行ったか、ということ、すなわち「施与」と、それを支える慈恵主義に注目した。それと並んで、ヨコに向かう互助の伝統的な働きに注目してみた。「上から」と「横から」は元もと異なる福祉の「流れ」であり、時に交叉することがあるとしても、たいていは、それぞれ独自に機能し、かつ必要に応じて機能している。しかし、それらが実質的に機能したのは都市における政策原理としての公助と、農村における共同体原理としての互助が、並行して機能し続けた辺りのことだろう。このことは、個別文学作品の世界からも確認することができる。しかし、もうひとつの福祉原理が関わる。「ウチ」と「ソト」（ヨソ）という区分を立てることによって見えてくる風景がある。「ウチ」（ミウチ）に向かつて働く援助機能は「ソト」（ヨソモノ）に向かつてはほとんど機能しない歴史

的事実がある。これを都市と農村にあてはめてみるなら、農村的援助機能は共同体的な互助の働きを高め、強化するが、それはあくまでも「ウチ」に向かったもので、「ソト」に向かうことは無い。一方、都市的援助は共同体としての機能が元もと弱いから、勢い自立、自助の方向に向かわざるを得ず、そこから脱落、背理した場合に限り、最小限度の公助が実施される仕組みを作り上げた。農村が共同社会^{ゲゼインシャフト}であれば、都市は利益社会^{ゲゼルシャフト}である所以である。いずれにしても、こうした援助の機能は「場」としての「容器」があつて初めて活動するもので、それらをトータルに捉えようとする場合、文学作品は、は、か、る、べ、き、応、答（返答）はしてくれただことに気がつくのである。

注

- (1) 例えば明治四年、太政官布告第一七〇号の戸籍法のなかで戸数、人員の生死、出入りを明確にする目的をもつて、従来の自然村を前提としない「区画」を新たに設け、ここに戸長、副戸長を配置、彼らに地方行政の末端事務を掌らせた。
- (2) 「定本柳田國男集」、筑摩書房、第一六卷、九三頁。
- (3) 井上友一「救済制度要義」、明治四二年、一九〇頁。
- (4) 福武直他編「社会学辞典」、有斐閣、昭和三三年、六〇三頁。
- (5) 玉城肇「新版日本家族制度論」、法律文化社、昭和四六年、七八頁。
- (6) 横山源之助「貧街一五年間の移動」、太陽、第一八卷二号、明治四五年二月、一二三頁。
- (7) 「定本柳田國男集」、筑摩書房、第一六卷、二六九頁。
- (8) 前掲書、二六九頁。
- (9) 長塚節「土」、新潮社、一三二頁。
- (10) 三倉の制の場合、根底には相互主義の思想があり、実施にあたっては政治的権力の介入があつた。
- (11) マックス・ヴェーバー（大塚久雄訳）「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」、岩波書店、昭和六三年、二八七頁。

- (12) 須藤南翠「雨窓漫筆 緑萼談」、明治二十年（現代日本文学全集、第一卷、改造社、昭和六年一月、四三三頁）。
- (13) 鈴木正「思想家としての透谷」、有精堂、八六頁。
- (14) 北村透谷「慈善事業の進歩を望む」、評論、第二五号、明治二七年六月（明治文学全集、第二九卷、筑摩書房、一六六頁）。
- (15) 樋口一葉「わかれ道」、国民之友、明治二九年一月（明治文学全集、第三〇卷、筑摩書房、一四二頁）。
- (16) 田岡嶺雲「一葉女史のにぎり江」、日本プロレタリア文学大系、三二書房、昭和三〇年、二六五頁。
- (17) 平岡敏夫「明治文学史の周辺」、有精堂、昭和五年、一一二頁。
- (18) 窪川鶴次郎「近代文学と『貧苦』」、世界、昭和二六年五月、一八〇頁。
- (19) 国木田独歩「窮死」、文藝倶楽部、第二三卷九号、明治四〇年六月（明治文学全集、第六六卷、筑摩書房、二二六頁）。
- (20) 国木田独歩全集、第一卷、学習研究社、昭和四〇年、一三三～一三四頁。
- (21) 石川天崖、「東京学」、育成会、明治四二年六月（明治文化叢書、第二卷、風間書房、五〇四頁）。
- (22) 風俗画報、第三五一号、明治三九年一〇月、一四頁。
- (23) 横山源之助「貧街十五年間の移動」、太陽、第一八卷二号、明治四五年二月、一二三頁。
- (24) 鳥崎藤村「春」、明治四二年（日本近代文学大系、第一四卷、角川書店、一二九頁）。
- (25) 幸田露伴「水の東京」、明治三五年二月（岩波文庫「一国の首都」、一九五頁）。
- (26) 木下尚江「不潔物」、新天地、第一卷一号、明治四一年一〇月（木下尚江著作集、第一〇卷、明治文献、昭和四六年、七〇頁）。
- (27) 木下尚江、前掲書、七一頁。
- (28) 荷風全集、第四卷、岩波書店、六三頁。
- (29) 「定本 柳田國男集」、別巻第三、筑摩書房、一三三頁。
- (30) 柳田國男「故郷七十年」、朝日新聞社、昭和四九年、三八頁。
- (31) 宮城県編「明治三十八年宮城県凶荒誌」、二頁。
- (32) 杉村楚人冠「雪の凶作地」、東京朝日新聞、明治三九年一月二五日。
- (33) 加藤周一「日本文学史序説」、下巻、筑摩書房、昭和五五年、四二九頁。
- (34) 川上眉山「七軒百姓」（眉山全集、第二巻、博文館、明治四二年、三二二頁）。

近代文学に描かれた福祉の風景

近代文学に描かれた福祉の風景

- (35) 久米正雄「光の漣」、キング、昭和十二年九月、二七八頁。
- (36) 宮本常一「忘れられた日本人」、民話、第三号、昭和三十三年（岩波文庫、三九頁）。
- (37) 勝海舟「水川清話」、勝海舟全集、第二一卷、講談社、昭和四八年、三四〇頁。
- (38) 徳富蘆花「自然と人生」、民友社、明治三十三年八月（岩波文庫、一二七頁）。
- (39) 泉鏡花「夜行巡査」、文芸倶楽部、明治二八年四月（明治文学全集、第二一卷、筑摩書房、三一頁）。
- (40) 加藤周一「日本文学史序説」、下巻、筑摩書房、昭和五五年、三九七頁。
- (41) 平澤紫魂（計七）「慈善」、社会改良、第一卷六号、大正六年一〇月、二二頁。
- (42) 賀川豊彦「空中征服」、改造社、大正一一年一二月（社会思想社、二二三頁）。
- (43) 石川淳「貧窮問答」、昭和一〇年八月（石川淳全集、第一巻、筑摩書房、四七頁）。
- (44) 昭和文学全集、第一三巻、小学館、昭和六四年、一八七頁。
- (45) 武田隣太郎「釜ヶ崎」（昭和文学全集、第一三巻、小学館、一八八頁）。
- (46) 本田清一「街頭の聖者高橋元一郎」、関谷書店、昭和一一年、一六八頁。
- (47) 高橋元一郎「一杯の水」、新興社、昭和四九年四月、七七頁。
- (48) 改造、第一四巻八号、昭和七年八月、四九頁。
- (49) 社会事業、第二二巻一、二号、昭和一四年二月、八七頁。
- (50) 伊藤永之介「鶯」、文藝春秋、昭和一三年六月（土とふるさとの文学全集、第二巻、家の光協会、昭和五一年、二八六頁）。
- (51) 平林たい子「救農工事」、改造、昭和八年二月（平林たい子全集、潮出版社、昭和五一年、一一九〜一二〇頁）。
- (52) 新萬葉集、改造社、昭和一二年一二月から。
- (53) 賀川豊彦「農村社会事業」、日本評論社、昭和八年一月、一二頁。
- (54) 鍵山博史「農民文学に現れた生活協同施設と消費生活」、社会事業、第二五巻六号、昭和一六年六月、三〇頁。
- (55) 壺井栄「農村訪問記」、主婦之友、第二五巻一、二号、昭和一六年一月（壺井栄全集、第一一卷、文泉堂出版、平成一〇年、一〇三〜一〇四頁）。
- (56) 島木健作「続・生活の探求」、昭和一二年六月（島木健作全集、第六巻、国書刊行会、三六一頁）。

- (57) 石井研堂「改訂増補明治事物起源」、上巻、春陽堂、昭和一九年、一〇三頁。
- (58) 女学雑誌、第八五号、明治二〇年一月一九日、八三頁。
- (59) 泉鏡花「貧民俱樂部」、明治二八年七月（鏡花全集、第二、岩波書店、六六頁）。
- (60) 植村正久著作集、第一巻、新教出版社、昭和四一年、三四七頁。
- (61) 齋藤緑雨「ほご袋」春陽堂、明治二六年二月（明治文学全集、第二八巻、筑摩書房、一〇九頁）。
- (62) 国民之友、第八四号、明治三三年六月三日、四七頁。
- (63) 小山内薫全集、第二巻、臨川書店、昭和五〇年、一頁。
- (64) 巖本善治「婦人慈善会」、女学雑誌、第六二〇号、明治二〇年四月三日、二一頁。
- (65) 徳富蘆花「思ひ出の記」（現代日本文学大系、第九巻、筑摩書房、九七頁）。
- (66) 漱石全集、第一六巻、岩波書店、六〇〇頁。
- (67) 漱石全集、第一九巻、岩波書店、二五二頁。
- (68) 漱石全集、第二一巻、岩波書店、五七頁。
- (69) 漱石全集、第三巻、岩波書店、二三四頁。
- (70) 倉田百三「愛と認識との出発」、大正四年一〇月（倉田百三選集、大東出版社、昭和三三年、一一〇頁）。
- (71) 澁澤栄一「兩夜譚余聞」、小学館、平成一〇年、一九五頁。
- (72) 太田宙花「東京市養育院」、新小説、第八巻二二号、明治三六年一月、二三〇頁。
- (73) 社会事業、第一一巻三号、昭和二年六月、七三頁。
- (74) 前掲書、七九頁
- (75) 秋山稔「風流線への一考察」、三田国文、第四号、昭和六〇年一〇月、四五頁。
- (76) 泉鏡花「風流線」、国民新聞、明治三六年一〇月〜三七年三月（明治文学全集、第二一巻、筑摩書房、一八三頁）。
- (77) 正宗白鳥全集、第二五巻、福武書店、六四頁。
- (78) 前掲書、六五頁。
- (79) 吉田精一「明治大正文学史」、角川書店、昭和三五年、二三八頁。

近代文学に描かれた福祉の風景

近代文学に描かれた福祉の風景

- (80) 定本與謝野晶子全集、第一八卷、講談社、昭和五五年、五一五頁。
- (81) 前掲書、七三頁。
- (82) 賀川豊彦「死線を越えて」、改造社、大正九年一〇月（現代教養文庫、三二七頁）。
- (83) 林文雄「願はくば衆生と共に」、同追悼文集刊行会、昭和五五年一月、三二九頁。
- (84) 「東京市社会事業批判」、東京市政調査会、昭和三年一月、一七八頁。
- (85) 野上彌生子全集、第七卷、岩波書店、昭和五六年、五七頁。
- (86) 浮世爺「慶安」、文藝界、第三卷二号、明治三七年一月、一二三頁。
- (87) 昭和萬葉集、卷一、講談社、昭和五四年、五五頁。
- (88) 都新聞、大正三年一月二〇日。
- (89) 金文善「放浪伝―昭和史の中の在日」、彩流社、平成三年、九四頁。
- (90) 島木健作「地方應」（島木健作全集、第一二卷、国書刊行会、一九九〇二〇〇頁）。
- (91) 村松梢風「現代侠客傳」（現代大衆文学全集、統一九卷、平凡社、昭和七年、九七頁）。
- (92) 野澤（小池）富美子「煉瓦女工」、公論社、昭和一五年五月（日本プロレタリア文学大系、第八卷、三一書房、昭和三〇年一九六頁）。
- (93) 夏目漱石「道草」、東京朝日新聞、大正四年六月（岩波文庫、一六四頁）。
- (94) 瀬川八十雄「慈善鍋から見た下層社会の世相」、婦人画報、大正一五年一月、一〇四頁。
- (95) 久米正雄「慈善鍋」（久米正雄全集、第九卷、平凡社、昭和五年、一二六頁）。
- (96) 平林たい子「感謝週間」、昭和三年三月（平林たい子全集、第一卷、潮出版社、昭和五四年、一二二頁）。
- (97) 婦女新聞、大正七年九月二〇日、一頁。
- (98) 與謝野晶子「米の廉賣と富豪」、大正七年八月（與謝野晶子全集、第一七卷、講談社、昭和五五年、一一五頁）。
- (99) 吉田久一「日本貧困史」、川島書店、平成五年、三七六頁。
- (100) 村島歸之「善き隣人―方面委員の足跡」、創文社、昭和四年七月、二〇九頁。
- (101) 豊田正子「新編綴方教室」、岩波文庫、三〇頁。

- (102) 松岡二郎「シナリオ綴方教室と社会事業」、社会事業、昭和十二年一〇月、五八頁。
- (103) 鷗外全集、第三三卷、岩波書店、昭和四九年、五八六頁。
- (104) 前掲書、三〇六頁。
- (105) 高山樗牛「所謂社会小説を論ず」、太陽、明治三〇年、七月（明治文学全集、第四〇卷、筑摩書房、二七〜二八頁）。
- (106) 露伴全集、第二八卷、岩波書店、六七頁。
- (107) 長谷川如是閑「額の男」（長谷川如是閑選集、第六卷、栗田出版会、五二〜五三頁）。
- (108) 有島武郎全集、第八卷、筑摩書房、昭和五五年、四四八頁。
- (109) 有島武郎全集、第五卷、新潮社、昭和四年、二三五頁。
- (110) 草間八十雄「貧民生活の実状（一）」、社会と救済、第三卷二一号、大正九年二月、三五頁。
- (111) 吉屋信子「家庭日記」、新潮社、昭和二三年九月（吉屋信子全集、第五卷、朝日新聞社、昭和五〇年、四四七頁）。
- (112) 井伏鱒二全集、第四卷、筑摩書房、平成八年、八九〜九〇頁。
- (113) 農村保健年報、第一集、昭和一五年版、厚生省、二七四頁。
- (114) 社会事業、第二五卷六号、昭和一六年六月、二六頁。
- (115) 清水威「小川正子と『小島の春』」、新教出版社、昭和六二年、二二頁。
- (116) 牧哲夫「救済事業と『小島の春』」、厚生事業、第二四卷一一号、昭和一五年一月、六二頁。
- (117) 木下左太郎全集、第一七卷、岩波書店、昭和五七年、一九二頁。
- (118) 川端康成全集、第三二卷、新潮社、昭和五七年、四八六頁。
- (119) 小林秀雄全集、第七卷、新潮社、昭和五三年、二三九頁。
- (120) 社会福利、第二三卷四号、昭和一四年五月、七八頁。
- (121) 瀬戸内晴美他編「人類愛に捧げた生涯」、講談社、一六二頁。
- (122) 島比呂志「らい予防法の改正を」、岩波書店、平成三年、一三頁。
- (123) 荒井英子「ハンセン病とキリスト教」、岩波書店、平成八年、六〇頁。
- (124) 小川正子「小島の春」、新教出版社、昭和二年、二〇五頁。

- (125) 思想、昭和三三年七月（岩波文庫、一四〇頁）。
- (126) 拙稿「内村鑑三の慈善思想」、上・下、明治学院論叢、第二六三・二七三号、昭和五二〜五四四年を参照のこと。
- (127) 内村鑑三全集、第二卷、岩波書店、昭和五五年、一五七頁。
- (128) 平澤計七（紫魂）「赤毛の子」、社会改良、第二卷五号、大正七年五月、三七〜三八頁。
- (129) 坂口安吾「白痴」、新潮、昭和二年六月（坂口安吾全集、筑摩書房、平成一〇年、六三頁）。
- (130) 斎藤緑雨「雲中語」（斎藤緑雨全集、卷三、筑摩書房、二〇五頁）。
- (131) 武者小路實篤「その妹」、大正三年一月（武者小路實篤全集、第二卷、小学館、四九一頁）。
- (132) 須藤鐘一「廃兵院」、太陽、第二四卷一〇号、一九八頁。
- (133) 三木貞夫「廃兵さんの葉賣り」、赤い鳥、第一七卷六号、大正一五年一月、一二七頁。
- (134) 金子洋文「廃兵をのせた赤電車」、種蒔く人、大正一二年六月（金子洋文作品集、第一卷、筑摩書房、一九頁）。
- (135) 三木露風「暮色」、明治四一年四月（明治文学全集、第五九卷、筑摩書房、二九九頁）。
- (136) 長塚節「太十と其犬」、ホトトギス、第一三卷五号、明治四三年二月（明治文学全集、第五四卷、筑摩書房、二五〇頁）。
- (137) 小川未明「哑」、新潮、明治四三年一月（定本小川未明小説全集、第一卷、講談社、二七九頁）。
- (138) 島崎藤村「ある女の生涯」、新潮、大正一〇年七月（島崎藤村全集、第二〇卷、筑摩書房、九九〜一〇〇頁）。
- (139) 松原岩五郎「社会百方面」、民友社、明治三〇年五月（明治文化資料叢書、第二二卷、風間書房、二八五頁）。
- (140) 正宗白鳥「慈善事業」、女性、第一〇卷四号、大正一五年一〇月（正宗白鳥全集、第二二卷、福武書店、一六七〜一六八頁）。
- (141) 徳富猪一郎「畑露勝遊記」上、民友社、大正一三年六月、一六七〜一六八頁。
- (142) 大隈重信「孤児教養の社会的効果」、婦女新聞、明治四二年四月一六日、三頁。
- (143) 巖谷小波「記者申す」、少年世界、第六卷三号、明治三三年三月、九九頁。
- (144) 柳理生「参観記（二葉幼稚園）」、婦女新聞、明治三三年六月二五日、三頁。
- (145) 前掲書、七頁。
- (146) 生田葵山「幼児の祝会」、少年世界、第九卷四号、明治三六年三月、九二頁。
- (147) 平塚らいてふ「社会事業に働く若き友へ」、文化生活、第四卷二号、大正一五年二月、七三頁。

- (148) 上野一雄「演劇と社会事業」、社会事業、第二二卷六号、昭和二年九月、五五頁。
- (149) 岸田國士「感化院の太鼓」、新潮、昭和三年九月（岸田國士全集、第三卷、岩波書店、三二六～三一七頁）。
- (150) 村山知義戯曲集、上巻、新日本出版社、昭和四六年、五〇三頁。
- (151) 社会事業、第二二卷六号、昭和二年九月、五二頁。
- (152) 藤森成吉「北見」、大正二三年八月（土とふるさと文学全集、第一一巻、家の光協会、一二頁）。
- (153) 社会事業、第二二卷六号、昭和二年九月、五三頁。
- (154) 社会事業、第二二卷一一号、昭和四年二月、八七頁。
- (155) 佐藤尚道「映画『太陽の子』」、人道、復刊第六一号、昭和十三年六月、二二〇頁。
- (156) 天達忠雄「書評『みかえりの塔』」、社会事業、第二四卷三号、昭和十四年三月、一二六頁。
- (157) 熊野隆治・豊島與志雄「みかえりの塔」、春陽堂、昭和十四年、三三三頁。
- (158) 久保田万太郎「慈善」、大正一〇年九月（久保田万太郎全集、第一二巻、好学社、昭和十三年、二四四頁）。
- (159) 井伏鱒二「へんろう宿」、オール讀物、昭和十五年四月（井伏鱒二全集、第二巻、筑摩書房、昭和三九年、四四七～四四八頁）。